
風の葵 黒い救急車

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

風の葵 黒い救急車

【Zコード】

N7150K

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

日本史上最強の忍び軍団である月一族の長の娘である水無月葵は、最強の敵である星一族との戦いで重傷を負った。やがてその傷も癒え、事務所の活動を再開した頃、更に厄介な事が起ころる。「黒い救急車」が医療ミスを誤魔化す医師を連れ去りに来るという都市伝説通りに事件が起こり、葵達は調査に乗り出す。

プロローグ 霧月菖蒲（やつせぬやな）の訪問 10月1日午前10時（前書き）

風の葵シリーズ第三弾です。不定期に更新していくます。

プロローグ 露月菖蒲（わづきあやめ）の訪問 10月1日午前10時

あの凄絶な「星一族」との戦いの傷がようやく癒え始めた頃。

「所長、どうされたんですか？」

水無月探偵事務所の所員である神無月美咲は、所長の水無月葵から連絡を携帯電話で受けていた。

「ね、美咲、そこにあの人来てる？」

葵の声は、辺りを憚るかのように、小さかつた。美咲はキヨトンとして、

「あの人って誰ですか？」

「外科医よ、外科医！」

葵の声は相変わらず小さかつたが、トーンは強くなつた。美咲はその言葉でようやく葵が誰の事を言つているのか理解した。

「いらしてませんよ。お話があつたんですか？」

美咲は自分の席に座りながら尋ね返した。

「今朝早く、携帯にメールが入つていたのよ。用があるから、事務所に行くつて。私は出張中つてことで頼むわ」

「ええつ？ そんな、困りますよ。所長に御用がありなんですから、出かけるのはまずいですよ」

美咲もその「外科医」が苦手なのだ。もちろん、葵は美咲以上に苦手である。

「それなら、病院に入院していますつてことにして」

「そんなことしても無駄ですよ。あの人は、東京中の病院の連絡先をこ存じなんですから」

「どうしたらしい？」

天下無敵とも思える程の強さを誇る水無月葵にも弱点はあった。

美咲は呆れ顔で、

「とにかく、事務所にいらして下さい。そんな嘘や誤魔化しが通用

するような方ではないですよ」

「わかつたわよ。顔は出すけど、用件は貴女が聞いておいでよ」

葵はそう言うとサッサと携帯を切ってしまった。美咲は溜息を吐き、携帯を机の上に置いた。

「所長、どうしたんですかア？」

そんな二人の会話をソファに座つて聞いていた事務所の経理担当の如月茜きさらぎあかねが二コ一コして尋ねた。

「菖蒲さんがあやめにいらつしやるのよ。所長、あの人のこと、本当に苦手なのよね」

茜の顔色が「菖蒲さん」という名前を聞いて変わった。その可愛らしい、表現を変えれば幼い容貌からは想像もつかない程強くて、ヤクザを何十人相手にしても怯む事を知らない茜も、その「菖蒲さん」は怖いのだ。

「わ、私イ、早退していいですかア？」

茜は苦笑いして言った。美咲は軽蔑の眼差しで、

「構わないけど、後で菖蒲さんに何されても知らないわよ」

「そ、そんな、脅かさないで下さいよオ、美咲さん」

茜は立ち上がりて美咲に近づいた。美咲はパソコンを操作しながら、

「別に茜ちゃんに会いに来るわけではないんだから、そんなに怖がらなくとも大丈夫よ」

「こ、怖がつてなんかいないですよ。ただ、あの人、ちょっと苦手なんだ」

茜は腕組みをしてそう言った。美咲は茜を見て、

「それはわかるけど、早退はまずいわよ」

「わかりましたよ。何か買って来た方がいいですかね？」

茜は自分の小さめのショルダーバッグを机の引き出しから出した。美咲はニッとして、

「買い物に行くフリをして逃げようとしてもダメよ」

「そ、そんなつもりないですってHー、菖蒲さん、お茶受けにうる

さいからア、何か買つて来ようかなって思つただけですよ」

茜は嫌な汗をかきながら必死になつて否定した。美咲はクスッと笑つて、

「そんなに気を遣わなくてもいいわよ、茜ちゃん」

「そうですかア？」

茜はバッグを引き出しにしまい、椅子にドスンと腰を下ろした。

「所長は来ないんですかア？」

「来るわよ。でもすぐには来ないわね、多分」

美咲がそう言つた時、ドアフォンが鳴つた。二人は思わず顔を見合わせた。

「菖蒲さんですか？」

茜が立ち上がり、美咲のパソコンのディスプレイを覗き込んだ。

美咲はマウスをクリックして、

「そうね。菖蒲さんのご到着よ」

と言つと、立ち上がり、ドアに近づいた。

「いらっしゃいませ」

ドアを開くと、そこにはグレーのスーツに身を包んだ「私女優よ」と言い出しそうな美貌と高慢さを兼ね備えた顔の女性が立っていた。黒髪をバツサリと肩上でカットした髪型は、葵が言つた「外科医」という職業故の長さなのだろうか？ 年は葵より上だろう。貫禄すら漂わせているその風貌は、他者を威圧するオーラのようなものを放つていた。

「逃げたのね？」

その女性は事務所に足を踏み入れるなり、そう言つた。美咲は苦笑いをして、

「いえ、逃げたではありません。今こちうに向かっているところです」

「おかしいわね。私が葵にメールしたのは、今から3時間も前よ。どうしてまだ着いていないの？ 私の家の方が、葵のマンションより遠いはずよ」

女性の言葉に美咲はたじろいだが、

「水無月は朝が弱いんです。その後眠つてしまつたようだ」

「そんな言い訳聞きたくないわよ」

女性はスタスタとソファに近づき、優雅に腰を下ろした。茜はさつきから硬直したままだ。

「あら、茜。貴女もここにいたのね？ 葵とはうまくやつてゐる？」

「は、はい、菖蒲さん」

茜の声は完全に裏返つていた。菖蒲と呼ばれたその女性はフツッと笑つて、

「何そんない緊張しているのよ。私は別に貴女達に怒つてゐるんじゃないわよ。葵に腹を立ててゐるだけ。将来義理の姉になる私に対して、こんな対応をするなんて」

「はあ……」

茜は美咲と顔を見合させた。将来義理の姉になるとほびひついう意味なのか？ それはこの後すぐにわかる。

「姉さん！」

美咲が閉じかけたドアを押し戻して、男が入つて來た。彼の名は篠原護^{しのはらまもと}。防衛省統合幕僚会議情報本部の所属だ。葵の幼馴染みで、自称「恋人」である。葵はそれを完全否定であるが。篠原は美咲に「ごめんな」と手で合図して中に入った。

「何があつたんだ？ 葵に話があるつて、病院に欠勤届まで出して

わ」

彼はソファに悠然と座つてゐる菖蒲に捲し立てた。しかし菖蒲は

「ツ」「リして、

「あら、私が自分の可愛い弟の将来の奥さんになつて來るのが、そんなに迷惑なの、護君？」

と尋ね返した。篠原は向かいのソファに腰を下ろして、

「そうじゃないつて。あまり葵にプレッシャーかけるなよ。そうでなくとも、俺達ギクシャクしてゐんだからさ」

「ギクシャク？ 貴女達、うまくいつていないので、護君？」

「あら、葵。貴女もここにいたのね？」

「はい、菖蒲さん」

菖蒲がいちいち「護君」と言つのが恥ずかしいのか、篠原は赤面して、

「姉さんには関係ないだろ？ 僕と葵のことなんだから」

「悲しい事言わないでよ、護君。一人つきりの姉弟じゃないの」

菖蒲は悲しいそうなフリをした。そのあまりにもあからさまな演技に、篠原は呆れ顔で、

「葵だつてこの前死にかけたんだ。彼女もいろいろ大変なんだよ。そんな時に姉さんのいらない嫌味を聞かされたら、あいつだつて参つちまうよ」

「いらない嫌味？」

菖蒲の顔が一瞬にして氷のようにならざる表情に変わった。美咲と茜はビクッとして一人から離れ、給湯室の陰から姉弟の言い合いを見ていた。

「私は一度だつて葵に嫌味なんか言つた事なくてよ」

菖蒲はそれでも穏やかに反論した。しかし篠原は、

「姉さんの葵に対する言葉は全部嫌味じやないか。わからないのか？」

とさらりと言い返した。菖蒲はそんな弟の暴言を去なすように、

「護君、姉に対してもう言葉が過ぎるわよ。美咲と茜が、貴方の暴言にびっくりして、隠れちゃつたじゃないの」

「……」

篠原はもう何も思いつく言葉がなくなつたのか、額に手を当てて頑垂れてしまつた。美咲と茜は思わず顔を見合せた。

「美咲、すぐに葵に連絡を取つてちょうだい。事は一刻を争つの。私の事が嫌いだからつて、逃げ回つていたら、人がまた死んでしまうかもよ」

「えつ？」

菖蒲の不吉な言葉に美咲と茜ばかりでなく、篠原までもがビクッとした。

「どういう意味だよ、姉さん？ 何があつたんだよ？」

篠原の問いかけを完全に無視した菖蒲は、

「美咲。早く葵に連絡して」

「は、はい」

美咲は大慌てで携帯を取り出し、葵に連絡した。すると、「ただ今到着いたしました」と葵がドアを開いて現れた。

「葵！」

「所長！」

「やつと来たわね、葵」

菖蒲がゆっくりと立ち上がり、葵を睨んだ。葵は愛想笑いをして、「いらっしゃいませ、菖蒲さん。事件が起こったのですか?」

と篠原を横に移動させて菖蒲の向かいに腰を下ろした。

「あーら、そうして一人で並んで座ると、本当にお似合いだこと」菖蒲の強烈な皮肉とも取れる言葉に、葵は苦笑いをしただけだったが、篠原はムツとして、

「姉さん！ そういう嫌味を言つたためにここに来たのなら、俺は姉さんを力ずくで連れて帰るぞ」

と怒鳴つた。しかし菖蒲は、そんな篠原の怒りを全く意に介していないらしく、

「実はね、葵、貴女に調査の依頼に来たのよ」「調査の依頼？」

葵はいきり立つ篠原を押し止めながら、菖蒲に尋ねた。菖蒲はゆっくりと頷いて、

「そう。私の勤務していた病院で殺人事件が起こつたの」「！」

葵は美咲と茜に目配せした。美咲は席に戻り、パソコンを開いた。

茜は給湯室で飲み物を準備し始めた。

「被害者はその病院の外科医で、金村芳樹、三十歳。大学の医学部で、私と同期だった男よ」

菖蒲は先程までとはうつてかわって、真剣な表情で話し始めた。

ようやく篠原も落ち着きを取り戻し、ソファに座り直して自分の姉の持ち込んだ話に耳を傾けた。

「3日前の事件ですね。確か、ワيدショーとかでも大きく取り上げていました」

美咲がパソコンで検索しながら言つた。菖蒲はチラッと美咲を見てから葵を見て、

「貴女、黒い救急車って聞いた事ある?」

「は? 黒い救急車、ですか?」

葵は美咲に視線を送つて検索を促した。すると茜が、「私知つてます。それ、都市伝説ですよね?」

と口を挟んで来た。菖蒲は意外そうに茜を見上げて、

「へエ、茜が知つているなんて意外ね。そう、都市伝説よ、黒い救急車は」

「姉さん、その都市伝説が、姉さんの元同僚の医者の殺人事件とう繫がるんだよ?」

篠原は菖蒲の勿体つけた話の進行にイライラしていた。菖蒲は真顔のまま葵と篠原を見て、

「金村君は、その黒い救急車に殺されたのよ」

「何ですって?」

葵は仰天した。篠原も唖然としている。茜が、

「じゃあ、あの都市伝説は本当だつたんですか?」

と身を乗り出して菖蒲に尋ねた。菖蒲はフツと笑つて、

「それはどうかわからないけど」

葵は美咲を見た。美咲は頷き、

「では、その黒い救急車の都市伝説について、解説したサイトが見つかりましたので、今お話します」

と言つた。

美咲はあるサイトの内容のプリントを葵達に渡した。

「それが所謂『都市伝説 黒い救急車』です。その話は作り話というのが多く人の意見ですが、事によつたら話の核となる部分が実話として存在しているのでは、という仮説もあるようです」

美咲は席に戻つてパソコンを操作しながら言つた。

「このサイトの話を読む限りでは、作り話の域を出でていよいよ気がするが」

篠原はプリントから顔を上げて美咲を見た。美咲は頷いて、
「はい。そのサイトはほんの一例なんです。もっと詳しいサイトもありますが、量が膨大過ぎてプリントアウトできませんので、私がその都市伝説の概要をお話します」

葵達は一斉に美咲を見た。美咲は葵と菖蒲の視線に少し気圧されたが、

「黒い救急車は、医療過誤によつて命を落とした人々の怨念が作り出した妖怪だというのが、多くのサイトでの意見です。今お渡ししたプリントの内容もその説に立つて書かれています」

「それを誰かさんが実体化したつてわけね」

と葵。菖蒲は、

「続けて、美咲」

と葵に一瞥をくれてから言つた。葵は苦笑いをして肩を竦め、美咲を見た。そこに茜がトレイに飲み物を載せて戻つて來た。

「ありがと、茜」

菖蒲はそう言つて自分の好きな紅茶のカップを取つた。茜は作り笑いをして応じた。

「医療ミスを犯し、それをもみ消した上に患者の遺族達に何の補償も謝罪もしない病院に、黒い救急車は現れます。そして医療ミスをした医師、それに協力した看護師、さらに握りつぶした病院の経営

者達を真っ黒な隊員服に身を包んだ救急隊員が強制的に救急車に押し込め、そのまま連れ去ってしまいます。そして数日後、攫われた人達は河原や公園、山の中などで変死体で発見されます。いくら調べても何故死亡したのかわからない状態で」

美咲の話を聞いているうちに、葵はバカらしくなつてしまつたが、自分の様子をしつかり横目で観察している菖蒲に気づき、欠伸を噛み殺した。

「まるで怪談ね。死んだ患者の怨念が救急車になつて、自分達の命を結果的に奪つた医師達を連れ去り、殺す。でも何で救急車なの？殺すのなら、靈柩車の方がそれらしいと思うけど」

葵は菖蒲が睨んでいるのを無視して尋ねた。すると美咲は、「そのことについて、お手元のプリントには書かれていないのでが、この伝説に関する最大のサイトにはこう書かれています」

美咲はブラウザを操作して、そのサイトを開いた。そして、

「何故黒い救急車なのか？ その疑問はまだ完全に解消されたわけではないが、一つの説がある。人の命を救うはずの病院で、命を奪われた患者達は、人を助けるために現場に向かう救急車で、命を助けるべき立場の医師達を拉致し、殺害する事で、その矛盾を指摘しているのではないか。だから靈柩車ではなく、黒い救急車なのだろう」

とそこに書かれている文章を読み上げた。菖蒲はニッコリして美咲を見て、

「ありがとう、美咲。そのくらいでおおよそのことは把握できたと思うわ

「はい」

美咲も微笑んで応じた。茜は給湯室から戻り、自分の席に着くなり、

「それで、菖蒲さんの元同僚の人は、やつぱり医療ミスをしたんですか？」

と尋ねた。菖蒲は紅茶のカップをソーサーに戻し、

「それが金村君は一度もミスはしたことがないのよ。もし本当に黒い救急車が存在するとしても、彼が殺される理由がないの。そこが今度の事件の最大の謎」

「謎でも何でもないだろ、姉さん。犯人が只単にその都市伝説を利⽤して警察の捜査を攪乱しようとしているだけだ。動機は他にあるよ」

篠原の素つ氣ない言葉に、菖蒲はムツとして、

「うるさいわね。私だつてそのくらいのことはわかつてます。謎なのは、どうしてそんなわかり易いことをわざわざしたのか、よ。現実に何人もの病院関係者や患者さんが、黒い救急車が現れ、黒い救急隊員が金村君を連れ去つたのを目撃しているの。そんな大掛かりな事をして、どうするんだひつて、疑問に思つでしょ、護君」

「……」

篠原は「護君」と呼ばれるのが本当に鬱陶しそうだが、何故かそのことを菖蒲に言わない。

「目撃者はいるんですか？」

葵が退屈そうな顔で尋ねた。菖蒲は葵を睨み据えて、

「いるわ。たくさん。でも、警察は犯人の偽装工作だと断定して、全く目撃証言を無視して捜査しているの。このままじゃ、この事件は迷宮入りしてしまつわ」

葵は菖蒲の鋭い視線をまともに受けていられないのか、美咲を見て、

「都市伝説の方では、その辺はどういう展開になつてしるの？」

と尋ねた。美咲はマウスを動かしながら、

「目撃者は多く存在しますが、誰も詳細を覚えていない、ということになつてしるようです。つまり、目撃者は黒い救急車によつて記憶を操作されていると解説されていますね」

「警察がそう考えるはずもない。救急車の目撃証言を無視しているのが本当なら、そこには何か理由があるはずだな」

篠原の「無視しているのが本当なら」という言葉が引っかかつた

のか、菖蒲は不機嫌そうな顔で、

「無視しているのは本当よ。私も証言しているんだから」

「えつ？ 姉さん、現場にいたのか？」

「たまたまね」

篠原は葵と顔を見合させた。菖蒲は篠原を見て、

「黒い救急車は、間違いなく現場に現れて、金村君を連れ去った。そして彼は後日遺体で発見された。それは動かし難い事実なのよ。それなのに警察は、救急車の事を何も調べていないし、目撃者の事情聴取もしていないわ」

「事情聴取もしていないんですか？」

さっきまでとは違う顔をして、葵が言った。菖蒲はニヤツとして、「どうとう興味を示したわね、葵。この殺人事件は、決して怪談ではないし、都市伝説でもないのよ。事実なの。それなのに、誰かが圧力をかけたのか、警察の捜査がどうも信用ならないの」

葵は大原が信用されていないようなことを言われた気がしてムッとしたが、さすがに菖蒲に対して口答えする勇気はないらしく、何も言わなかつた。

「都市伝説の解説では、黒い救急車のことを調べようした人達は皆、謎の死を遂げていると書かれています。だから未だに真相がわからぬのだと」

美咲が言い添えた。篠原は腕組みをして、

「都市伝説とか怪談話は大概そうだよな。だつたらどうして黒い救急車は殺された患者の怨念だということがわかるのか、全く説明がつかない。それはすなわち、誰かが調べたという事だからな。調べようとした者が皆怪死しているのなら、そんなことすらわかるはずがない」

「そうね」

珍しく自分の意見に葵が同意したので、篠原はギョッとして彼女を見た。葵は菖蒲の意見に賛同したくないので、自分に同意したのだろう。彼はそう考え、葵が自分に理解を示してくれたなどという

樂観的な考え方を捨てた。悲しい習性である。

「警察は信用できないから、未來の義理の妹に事件の調査の依頼に来たのよ、葵」

菖蒲は妙に嬉しそうに言った。葵は苦笑いして、

「妹になるかどうかは、まだ未定ですか？」

「あら、護君とは遊びだっていう事？」

「姉さん！」

葵より篠原が慌てた。美咲と茜は顔を見合せた。菖蒲はフツッと笑って、

「冗談よ。こちこち真に受けないでよ、護君」と言つてから、

「警察が事件を有耶無耶にしようとしているのははつきりしているわ。そんなことはさせない。だから貴女に頼みに来たのよ」「その辺の事情はウチの事務所に近い警察関係者に調べてもらいましょう」

葵はそう言いながら、茜に田配せした。茜は一ノ瀬として、

「了解です、所長」

と携帯を取り出し、メールを打ち始めた。

「依頼料は高いですよ、菖蒲さん」

葵が言つと、菖蒲は、

「護君につかといて」

「ええつ？」

護はまだ菖蒲さんに翻弄されてくる。情けないな、と葵は思った。しかしあやつぱり、この人苦手だ。帰つたらたっぷり塩を撒かなくちゃ。

「一つ訊いていいですか？」

葵が居すまいを正して菖蒲を見た。菖蒲はゆっくりと葵に視線を移して、

「何かしら？」

と貴婦人のような仕草で言った。葵はその仕草に苦笑いして、

「何故菖蒲さんはこの事件が有耶無耶になるのを阻止したいのですか？亡くなつた金村さんはどういふじ関係なのですか？」

「……」

菖蒲は一瞬口を開きかけたが、何故か躊躇した。葵はそれを見逃さなかつた。

「なるほど、仇を討ちたいのですね、金村さんの」
やつとこの女の弱みを握つたわ、と葵は心の中でガツツポーズをした。菖蒲はそれでも表情を変えずに、別に彼とは特別な関係ではなかつたわよ、葵。何を勘ぐつているのか知らないけど、貴女の想像とは違うわ、確實に」と応じた。しかし図星に近い事は、葵を見なくなつた事で明らかだつた。

「帰るわ。今日は午後から出勤しますと言つてあるから」

菖蒲は不意に立ち上がり、

「護君、病院まで送つてくれる？」

「ああ、いいよ」

篠原も、初めて姉が狼狽えたのを見て、笑いを噛み殺して応えた。

台風のような菖蒲が、篠原と共に事務所を出て行くと、「大原さん、こっちに来るそうです」

と妙にハイテンションな茜が言つた。葵は茜を見て、

「そんなに急がなくともいいのに。ズルズル引き延ばして、虐めてやるつもりなんだから」

「ひつどーい。所長つてば、サテイストなんですね？」

茜の言葉に葵はフフンと鼻で笑つて、

「とんでもない。菖蒲さんが究極のサテイストよ。発する言葉全てが他人を傷つけているんだから」

「ああ、そうかも」

茜はすぐ納得してしまつた。美咲が、

「いざれにしても、この事件、何か裏がありそうですね」

「それはね。だからあの意地悪姉さんの話に乗ったのよ。でなければ、誰があんな依頼受けるもんですか。多分タダ働きになるんだし」「えつ？ 篠原さん、払ってくれないんですか？」

茜が素つ頓狂な声で尋ねた。葵は呆れ顔で、

「いくら私でも、護に請求できないわよ。それをしたら、あいつ腹いせに今までの情報料を逆に請求して来るわよ」

「篠原さんはそんな人じやありませんよ、所長」

美咲がたしなめるように言った。葵は美咲を見て、

「そんな奴なのよ。あの姉にしてあの弟。日本最悪の姉弟だわ」と身震いしてみせた。美咲は呆れて溜息を吐いた。

「ホントにもつ……」

葵は急に思い出したように、

「ああ、そうだ、茜、もつすぐお昼だから、大原君にいじりじゃなくてこの先にあるファミレスで落ち合いましょうつてメールしておいて」

「えつ？ ファミレスですかア？」

茜が不満そうに言つと、

「別にいいのよ、高級レストランでも。但しその場合は貴女の来用のお給料から差し引くけどね」

「いいです、いいです、ファミレス大好き一つ……」

茜の慌てふりに、美咲はクスッと笑つた。

確かに異様な光景だった。

国道沿いにあるそのファミリーレストランは、ランチを楽しむ有閑主婦や、忙しい合間を縫つてカウンターで本日の日替わりメニューを書き込むサラリーマンでごった返していたが、あるボックスターはそれとは異質だった。

何しろ、三人の美人、しかも可愛い系、綺麗系、ツンデレ系と盛りだくさんな、が、一人のイケメンと一緒にいるのだ。イケメンの隣には可愛い系、向かいには綺麗系とツンデレ系。目を引かないわけがない。店員も他の客も、何の集まりかと、固唾を呑んで見守っていた。

「何か、注目されてる気がするのは、自意識過剰かな？」

警察庁のエリートである大原統は隣に座つて「一ノ一ノしてチヨコレートパフェを食べている茜に小声で尋ねた。

「そりやそうですよ。美人が三人と、イケメンが一人なんですからア。注目されて当たり前ですって」

茜は陽気に答えた。大原は苦笑いして、

「後小松総合病院の事件のことですよね、それ？」

と葵に言つた。葵はムスッとした顔で頬杖を突いて「コーヒーを一口飲み、

「ええ、そうよ」

「あのオ、水無月さん、何か怒つてます？」

大原は慎重に尋ねた。葵はフツと笑つて、

「怒つてなんかいないわよ。ただ、茜があまりにもアホなこと言つたから、呆れてるだけ」

「アホな事つて何ですかア？ 美人三人とイケメン一人で正解じやないですかア」

茜は剥れて反論した。美咲は大原同様苦笑いして紅茶を飲んでいた。葵は茜を見て、

「美人一人とイケメン一人と子供一人が正解よ」

「い、子供って何ですか？ 私、二十歳ですよ！ 子供じゃないですってば！」

茜はますます剥れた。しかし葵はそれを無視して、

「ちょっとワケありで、その事件の事を詳しく知りたいのよ。大原君、知ってるんでしょ？」

「ええ、まあ。僕の高校時代の先輩が事件の担当なので、知つてはいますが」

大原は無駄な質問かな、と思いつながらも、

「ワケありって、どんなワケなんですか？」

葵は頬杖を着くのをやめてシートにもたれ掛かり、

「ちょっとね。取り敢えず、聞かせてくれないかな？」

ああ、やっぱり教えてくれないのか、と大原は思いつながら、

「事件がちょっと変わっているんですよね。田撲者の証言によると、『黒い救急車』が現れたとか」

「その事なんだけど、警察は『黒い救急車』については、どうこう扱いをしているのかしら？」

葵が何故そんなことを訊くのか、大原は不思議に思つた。

「都市伝説なんですよ、その『黒い救急車』っていうのは」

「それは知つてているわ。だから知りたいの。警察の見解を」

大原は辺りを憚るように声を低くして、

「公式には、都市伝説を真似た劇場型犯罪と発表することにしていたのですが、あるところから圧力がありまして」

「圧力？ どこから？」

葵は身を乗り出した。どうやら菖蒲の話は見当違いではないようだ。

「それが医師会からなんですよ。そんな妙な話を広められると、三流週刊誌やら下品な夕刊紙やらが取材に殺到して、病院の威信に關

わるから、公表しないでもらいたいと

葵はその圧力は確かに医師会からのものだろうと思つたが、理由が嘘臭いと判断した。

「信じられないわね。確かにマスコミ共が集まつて来ると医療に支障が出たりすることもあるでしょうけど、病院の威信がどうのこうのつて、あまり関係ない気がするわ」

「ええ。僕もそう思います。しかし捜査本部はそうは思わなかつたようで、医師会の意見を尊重し、都市伝説絡みの話は一切公表していません。捜査に支障はないし、報道機関に発表する必要もない、というのが表向きの言い訳なんですが」

大原は自嘲気味に笑つて言つた。すると茜が、

「その医師会つて、誰がトップなんですか？」

と尋ねた。大原は感心したように茜を見て、

「鋭い質問だね、茜ちゃん」

「えつ？」

当の茜はキヨトンとした。彼女は会話に割り込みたくて言つてみただけだったのだが、何か事件の核心に迫るような質問だつたらしい。

「医師会の会長は、事件の起こつた病院の院長である後小松謙蔵。ちょっとと引っかかるんですね」

大原は葵を見た。葵は腕組みをして、

「その人、どんな人なの？」

「手広く病院を経営している、医療より利益の人ですね。後小松総合病院の他、いくつかの病院の院長や理事長を兼任していまして、あちこちの病院から優秀な医師をヘッドハンティングしています。そのせいで潰れた病院もあるようです」

大原の言葉に茜は、

「何か見えて来ましたね。そいつが黒幕でしょ。自分の意に沿わない人を誰かに殺させたんじゃないですか？」

すると大原は苦笑いをして、

「それはあり得ないな、茜ちゃん」

「えつ？」

今度は否定されてしまい、茜はションボリしてしまった。葵はそれを見てニンマリしたが、美咲は顔を俯かせてクスッと笑った。大原は三人を順番に見ながら、

「殺された金村医師は、後小松院長が自ら出向いて自分の病院に迎えた人です。意に沿わないから殺す、なんて事は決してないですね」「じゃあ、ライバル病院が殺し屋を雇つて……」

茜がもう一度割り込みを敢行した。すると葵が、

「殺す必要はないでしょ？ そこまでの危険を犯してする事ではないわ。むしろ殺すとすれば院長でしょ」

とあっさりと一蹴した。茜はますますションボリした。それに気づいた大原が、

「ただ、金村さんは真面目過ぎる人だったようですから、後小松院長のやり方を全面的に支持していなかつた可能性はあります。我々警察が掴んでいない何かがある可能性は否定できません」

と言い添えた。茜は目をウルウルさせて大原を見た。大原は茜に二コツとしてから、

「捜査本部は、怨恨の線で捜査を進めていますが、わからないのは救急車をどうやって調達したのか、なんですよ」

「そんなに精巧なものだったの？」

葵が尋ねた。大原は頷いて、

「外見は完全に本物と同じで、色が違うだけだったようです。そして、中から出て来た救急隊員も、隊員服の色が違つていただけで、ストレッチャーから中の装備まで全て本物と同じだったようです。現場にいた医師や看護師が証言しているので、間違いないと思います」

「ただの怨恨による殺人に、そこまで手間暇かけるバカはいないしかけられる奴は少ないわね。第一、そんな事をしてどんな意味があるのか」

葵は「一ヒーカップを手に取つて言った。

「そうなんです。疑問は尽きないんです。犯人が誰なのか以前に、どうしてこんな事をしたのか。そしてどうして後小松総合病院は黒い救急車が現れた事を隠そうとするのか？」

「答えはこれからわかる……。もしかして、事件はまだ終わらないんじゃないの？」

葵の言葉に大原と美咲はギョッとした。茜はピクンとして大原を見た。

「何か意味があるはずなのよ、黒い救急車を使った……。犯人の大しくじりは、そんな大掛かりなやり方を選んだ事そのものなのかも知れないわ」

葵はさらに、

「それで、黒い救急車の事は抜きにして、金村医師を殺す動機のあら人間はいるのかしら？」

「殺したい程憎んでいたかはわかりませんが、動機らしきものを持つていてる人物はいます」

大原の言葉に葵達は彼を見た。彼は美人三人に一斉に見つめられて照れた訳ではないだろうが、一瞬たじろいで、

「金村医師の同僚の海藤充。医療に対する見解で対立していたようです」

「対立？」

茜は鸚鵡返しに尋ねた。大原は頷いて、

「金村医師は、医は仁術を地でいくような人だつたようです。ところが海藤医師は医は鍊金術の人らしくて、手術方法を巡つて対立が尽きなかつたようです」

葵は金村医師と菖蒲に恋愛関係に陥る共通点がないような気がしていた。金村医師は医者の鑑のような人だ。それに対して菖蒲は確かに腕はいいが、性格が悪過ぎる上、人情より金に動くタイプだ。どう考えても、これは菖蒲の一方的な片思いではないかと思った。

「でもいくら対立していたとしても、殺そうとは思わないわよね」

葵は大原を見て言つた。大原は真剣な顔で、「そうなんです。動機にはなるかも知れませんが、実際に殺人を犯すほどの事ではないんです」

「そうよねエ」

葵は腕組みしてシートから身を乗り出し、

「金村医師の死因は？」

「鈍器による撲殺です。頭骨が陥没する程強く殴られていました。そして、近くの河原に置き去りにされていたんです」

大原の言葉に茜はギクッとした。美咲が、

「都市伝説通りですね。黒い救急車の手口と一緒にです。但し、都市伝説の方は死因は特定できないんですけど」

と言い添えた。葵は美咲を見て、

「都市伝説では、黒い救急車がターゲットを連れ去つてから遺体が発見されるまでの時間に決まり事はあるのかしら？」

美咲は葵を見て、

「特にないようです。数日後としかどのサイトにも書かれていませんから」

「死因が特定できないのよね、確か」

「ええ」

美咲はキヨトンとして葵を見た。葵は腕組みを解いて髪を搔き揚げ、

「どうして死因が特定できないのかは書かれていませんの？」

「それも書かれていませんね。怪奇現象っぽくするために死因が特定できないとされているだけなのかも知れません」

「うーん」

葵は「コーヒーを一口飲んでから、

「黒い救急車って、本当に都市伝説なの？」

「えつ？」

美咲は葵の意外な疑問にビックリした。大原と茜も意表を突かれたのか、顔を見合わせた。

「私にはそつは思えなくなつて來たのよ。黒い救急車の都市伝説は、この殺人事件を起こそうと考えた者が作り出した、殺人予告の話なんじやないかつて思つたんだけど」

奇想天外とも言える葵の話に茜が、

「黒い救急車の都市伝説は何年も前からあるんですよ。そんな前から殺人を犯そうとしていたのに、どうして今になつて決行したんですか？」

と反論した。葵は真剣な眼で茜を見て、

「準備に時間がかかつたんじゃないの？」

「へつ？」

茜はあつさり反撃されたので、言葉が出なかつた。すると考え込んでいた美咲が、

「考えられない事ではないです。黒い救急車の都市伝説は、突然ネットに流れ出して、あちこちの掲示板に書き込まれ、非常に短時間に広まつた形跡があるんです」

「えつ、 そなんですか？」

茜は意外そうに美咲を見た。大原が頷いて、「捜査本部の中にも、そんな事を言つていた人がいたらしいですね。どちらかと言うと、都市伝説を利用した殺人という発想より奇想天外ですが、あり得なくはないですよね」

と言つた。そして葵を見て、

「どうしてそつ思われたんですか？」

葵は肩を竦めて、

「あまり根拠らしい根拠はないんだけど、この黒い救急車の話、何か酷くあいまいなのよ。都市伝説つて、話は荒唐無稽なのが多いけれど、変な所が律儀で、三日後に死ぬとか、必ず同じ死に方をするとか、法則性があるのよね。作り話だからこそ、そういう傾向が現れるのだろうけど」

「でも、黒い救急車が現れてつていうところに法則性があるじゃないですか」

と茜が膨れつ面で反論した。葵は呆れ顔で茜を見て、「だから、根拠らしい根拠はないって言つたでしょ。何となく、都市伝説とは異質な感じがするって思つただけなのよ」「そつなんですか……」

茜はあまり納得していない。大原が、「とにかく、どちらにしても、この事件は何か裏があるようですし、いろいろと複雑な様相を呈しているようですので、僕も探りを入れてみます」

「連絡は茜の携帯にね」

と葵が言つたので、茜はビックリして彼女を見た。実は美咲が以前、「大原さんからの連絡は、茜ちゃんの携帯にするように言つて下さいね」

と言われていたからなのだ。別に葵が茜に対して気を遣つた訳ではない。彼女は今でも茜と大原がいい関係だとは思つていないのでから。

「わかりました」

大原はそう答えてから茜を見てニッコリした。茜一人ニッコリした。

「それから、捜査本部に高校時代の先輩がいるって言つてたわね」
葵が唐突に切り出した。大原はハツとして葵を見た。

「ええ。それが何か？」

「名前教えてくれない？」「こちらからコンタクト取りたいんだけど」「はア、構いませんが。どうするんですか？」

大原が不安そうに尋ねた。すると葵はチラッと美咲を見て、「色仕掛けよ、色仕掛け」

「ええつ！？」

葵の視線に気づいた美咲が、大原と同時に大声を出した。

第三章 崩せないアリバイ 10月1日午後2時

「どうして私を見たんですか？」

美咲が疑惑の眼差しを葵に向けた。葵は愉快そうに微笑んで、「だつてエ、初対面の男の人を一撃で落とせるのは美咲だけだしい」と急に10歳程若返った口調で言つた。茜がそれを受けて、

「そうですねエ。美咲さんてば、初対面の男子には無敵ですからねエ」

と同調した。大原は苦笑いして、

「僕の先輩は、高校時代から筋金入りの硬派なので、そういう作戦は成功しないと思いますよ」

「それは普通の女子だからよ。神無月大佐にかかれば、どんな難攻不落の要塞もあつと言つ間に陥落しちゃうわよ。大原君、試してみる？」

葵が冗談でそう言つと、茜が仰天して、

「や、やめて下さいよオ、所長！ 美咲さんが相手じゃ、私慘敗しちゃいますウ」

「ハハハ、そうかもね」

二人が面白がっているのを美咲は呆れて見ていた。

「ホントにもう……」

すると大原は全員が凍りつくようなことを言つた。

「僕は、大人の女性は苦手なんですよ」

「……」

葵と美咲は目が点になつてしまつた。茜は何とも複雑な顔をした。

「多少は自覚してたんだ、大原君……」

葵がやつとそれだけ言つた。

警視庁管内のとある所轄署のロビーは、「後小松総合病院殺人事件」のせいで、いつになくこつた返していた。普段はそれほど出入

りしない新聞記者やテレビ局のクルー達が屯している。外には野次馬もいる。大した用もないのに建物の中に入つて来る人間もいた。「黒い救急車」の事は伏せられてはいたが、ネットではそれとなく噂され、知つている人は知つているという状態だつた。

「邪魔な奴らだ」

ロビーにいる連中を見渡して、1人の刑事が呟いた。彼の名は皆村秀一。むらしゅういち どちらかというと「強面」の部類に入る、バリバリの現場担当。今回の事件の捜査本部の一員で、後小松総合病院の胡散臭さに不満を持つ男だ。ガタイの良さとその面構えで、取り調べと聞き込みにはかなり長けていたが、どうしても先走る癖があり、上層部には煙たがられている。それでも彼が捜査本部から外されないのは、年齢（まだ28歳）の割に高い検挙率を誇つていたからだ。

「何も話す事はないですよ」

皆村に気づいたマスコミの連中が彼に群がるが、皆村は何も答えず、ロビーから奥へと歩を進めた。その時女性警察官が、「皆村さん、警察庁の大原さんから紹介された方がいらしてますよ」と声をかけた。皆村は鬱陶しそうな顔で、

「ああ、そう言えば、そんな連絡受けたな。面倒臭いから適当にあしらつといつよ」

「何言つてるんですか。署長もご存じなんですから。ちゃんと応対して下さいね」

女性警察官はムツとして言い添えた。皆村は肩を竦めて、

「へいへい」

と応じると、その紹介された人物が待つてゐる応接室に向かつた。

「大原の奴、俺が死ぬ程忙しいのに、変な事言つて来やがつて……」

皆村はブツブツ言いながら応接室のドアを開いた。パーテーションの磨りガラスの向こうに薄らと人影が見えた。

（女？）

髪が長いのはわかつた。

（ つたくよオ、大原の奴、どんなとこに頼まれたんだよ。 ちょつ

と怖い顔して話せば、すぐに帰るだろう（ ）

皆村は頭の中でいろいろと作戦を考え、パーテーションの向こうに回り込みながら、

「時間があまりありませんので、手短にお願いしますよ」と言つてその女性の座つているソファの反対側に腰を下ろした。

「……」

皆村は固まつてしまつた。そこにいたのは、ガサツで軽薄な女性記者ではなく、深窓の令嬢のような上品なスーツ姿の女性。しかも自分のタイプど真ん中だったのだ。

（ や、やばい…… ）

皆村は決して女性が苦手な訳ではない。普通に話べらつはできる。しかし、それがタイプの女性だと全然違つてしまつ。もづまともこの顔を見る事が出来ない。話をするなんて絶対無理。

「（ ）迷惑をおかけします。なるべく短くすませるよつに致しますので、よろしくお願いします」

もちろん、その女性とは神無月美咲。別名「撃墜女王」（水無月葵談）。美咲はゆつくりと頭を下げた。皆村は卒倒しそうだつた。

（ ひ一つ、仕草が全部素敵過ぎる…… ）

皆村が全然自分の方を向いてくれないので、美咲は少し悲しくなつてしまつた。

（ そんなに私の事が嫌なのかな？ 所長の作戦が裏目に出了のね ）

葵の「色仕掛け作戦」の内容はこうだ。

硬派で鳴らしている男は、清純派に弱いはず。美咲はそんな男のストライクゾーンど真ん中の存在だ。だから、彼女が何を訊いても全部答えてくれる。捜査上の秘密でさえ、聞いてもいらない事まで全部話してくれるだろ？。

（ そんな簡単に行くワケないのよ。所長は男性を見くびり過ぎだわ ）

美咲は皆村が顔を俯かせたままなので、何とかこつちを向いても

らおうと思い、

「大原さんから聞きました。甘いものがお好きだそうで。どうぞ後で皆さんでお召し上がり下さい」

と近くの和菓子屋で購入した饅頭の詰め合わせをテーブルの上に置いた。しかし皆村は、

「あ、ありがとうございます」

と相変わらず美咲の方を見ないで答えた。とつとつ美咲は我慢できなくなり、

「あの」

「はい?」

皆村はそれでも俯いたままだ。

「そんなに私の事がお嫌なんですか?」

「へつ?」

皆村はビクッとした。

(やべ、彼女を不愉快にさせちまつたぞ……。大原に言いつかれで、俺は署長に大目玉だ。それは困る。でも顔を見るのは無理だ。眩し過ぎる……)

ここまで来るともうバカである。皆村はその時はたと氣づき、ジャケットの内ポケットからサングラスを出してかけた。

(これで何とか……)

皆村はゆつくりと美咲の方を見た。美咲は皆村が何故いきなりサングラスをかけたのか理由がわからないので、呆気に取られていた。「さて。何でも訊いて下さい」

皆村は引きつったような笑顔で美咲に言った。

(しつかし、これでもまだ眩しい……。ホント、女神みたいな人だ)

皆村には美咲がどんな風に見えているのだろうか? 美咲はニッ

コリ微笑んで、

「ありがとうございます。ではお尋ねします」

皆村は居すまいを正した。美咲は真顔に戻り、

「後小松総合病院殺人事件の事についてなのですが、疑わしい人物はいるのですか？」

と尋ねた。皆村も真剣な顔で、

「容疑者とまでは言えませんが、それに近い存在の人物はいますね」「それはどなたですか？」

皆村は危うく、

「そんなこと教えられるわけねえだろ、何考えてるんだ？」

と言いそうになつたが、こちらを見ている美咲の眼は、今にも泣き出しそうにウルウルしている。実は美咲の目は元々ウルウルしているのだが、知らない男には泣きそうな瞳に見えてしまうのだ。葵はこれを「悪魔のウルウル」と呼んでいる。皆村はその瞳にまさしくノックアウト寸前だつた。彼は遠のきそうな意識を何とか保ちながら、

「海藤充。同僚の外科医です。ガイシャとは悉く対立していたようです」

「そなんですか」

美咲はごく普通に相槌を打つだけなのだが、皆村はもはや神無月教の熱狂的な信者になつてしまつていて、

「もつと詳しく教えて下さい」

と言われたような気がしてしまつた。

「しかしですね、動機はあるんですけど、厄介な事がわかりまして……」

「厄介な事、ですか？」

「ええ」

皆村は、まるでスキューバーディングをしていた人が、酸素ボンベの故障で慌てて海上に顔を出した時のようにゼイゼイと息をした。（ダメだ。限界に近い。どうすればいい？）

皆村は美咲と話す事に息苦しさを感じていた。美咲は皆村の様子がおかしいので、

「あの、お身体の具合が悪いのですか？」

と小首を傾げて尋ねた。皆村はそれを見てしまった。まさしくそれは「惱殺」ポーズに等しかつた。

「い、いえ、そんな事はありません。ちょっと失礼します」

皆村はバツと立ち上ると応接室を飛び出し、男子トイレに駆け込んだ。

「畜生、何であんなに綺麗な人がこの世にいるんだ?」

皆村は手洗い場で顔を洗い、火照る自分を冷やそうとした。

「よし!なるべく彼女を見ないようにしよう。サングラスをうまく使えば、どっちを見ているのかわからないだろ?」

皆村は意を決して応接室に戻った。

「申し訳ありません」

皆村は美咲を視界に入れないようにしてソファに座った。美咲は何が何だかわからぬ状態だったが、話を進める事にした。

「厄介な事つて、何ですか?」

「あ、ああ、そうでしたね」

皆村は自分が何を話したのか思い出すのに手間取ってしまった。「ガイシヤが拉致された時、海藤はその場にいたんです。他の目撃者と共にガイシヤが連れ去られるのを見ているんですよ」

「という事は、犯人ではあり得ないですね」

皆村はつい美咲を見てしまいそうになるのを必死で堪えながら、「そうです」

美咲はちょっと考える仕草をしてから、

「金村さんが殺害された日時はどうですか? その時もアリバイがあるのですか?」

皆村は顔を美咲に向け、視線だけ下に向けて、

「はい。海藤は、金村氏が拉致された当日、アメリカに出張しています。帰国したのは、金村氏の遺体が発見された翌日です。つまり、昨日まで日本にいなかつたのですよ」

「……」

美咲はちょっと驚いていた。

（ 拉致された日にアメリカに行つて、遺体が発見された翌日に帰国なんて、都合が良過ぎるアリバイね ）

「出入国管理局にも照会しましたが、海藤は確實に渡米していまし
た。完璧なアリバイがあります。直接手を下す事は不可能なんです」

「作ったようなアリバイですね」

美咲の言葉に皆村は苦笑いして、

「確かに作為が感じられます、海藤が実行犯でない事は動かし難
い事実です。こればかりは、どうする事も出来ません」

「そのようですね」

美咲は完全に探偵モードに入つていて。さっきまでの「悪魔のウ
ルウル」は消え失せ、今度は凜々しい顔だ。皆村はそれをつい視界
に入れてしまつた。

（ この人、泣いても怒つても笑つてもど真ん中だ…… ）

神無月大佐はこうして皆村を完全攻略してしまつた。しかも全く
無意識のうちに。

「あの」

美咲が声をかけると、皆村はビクッとして彼女を見た。

（ しまつた、真正面に…… ）

皆村は美咲の顔をまともに見てしまつた。意識が遠のきそうだつ
たが、

「な、何でしようか？」

と問い合わせた。美咲は何故か申し訳なさそうな顔で、
「捜査資料とかを見せて頂く事は出来ますでしょうか？」

普通ならテーブルを蹴飛ばして、

「巫山戯るな！ 何でてめえにそんな大事なものを見せなくちゃな
らねえんだよ！」

と怒鳴りつけるはずだが、今の皆村にそんな発想はなかつた。

「ちょっと待つて下さいね」

と言つや否や、彼は応接室を飛び出し、捜査本部のある第一会議室
に走つた。そしてそこにある山のような書類を抱えると、他の刑事

達が睡然としている中、美咲の下へと駆け出した。

「どうぞ。お持ち下さい」

美咲はその書類の山を見て呆気に取られた。

「いえ、あの、これ、資料の原本ですよね？ 持ち出すのはまずいのでは？」

「大丈夫です。大原に頼んで全部うまくやりますので。お役に立て下さい！」

何故か皆村は敬礼して言つた。

「はア」

美咲はどう答えていいのかわからない状態で皆村を見上げた。

「やつぱり、良くないですよ、捜査資料の持ち出しへ。これ、ここで全部目を通しますので」

「はつ？」

皆村は美咲の返答に仰天した。そこにある資料は、仮に分速1000文字で読んだとしても五時間はかかる量だ。

「そう言えども、自己紹介もしていませんでしたね」

美咲は立ち上がり名刺を差し出した。

「水無月探偵事務所の神無月美咲と申します」

「あ、自分は刑事課の皆村秀一です」

皆村は慌てて名刺を探して美咲に差し出した。美咲は名刺を受け取り、

「素敵なお名前ですね」

と葵に言っていた言葉を口にした。皆村は真っ赤になった。

「いや、そんな事は……。貴女のお名前は本当に素敵ですが」

「ありがとうございます」

という返事も葵の仕込みである。

「その、自分はこれから捜査会議がありますので、おそらくいられないのですが」

皆村は火照る顔をハンカチで拭いながら言つた。美咲はソファに腰を下ろして資料を見渡し、

「大丈夫です。何かわからない事があれば後程お伺いしますので。
どうぞ、会議にいらっしゃって下さい」

「は、はい」

会議は一時間はかかるだらうが、神無月さんが捜査資料に目を通し切るのは早くて五時間後だ。その後もう一度ここに来て話せばいい。皆村は自分が美咲と話せるのを楽しみにしているのに気づいてギョッとした。

（俺、何考えているんだ？）

「では、失礼します」

「お手数をおかけしました」

退室する皆村に、美咲は立ち上がりてお辞儀をした。

「皆村、捜査資料をどこに持つて行つたんだ？」

会議室に入るなり、刑事課の課長が怒鳴つた。皆村はハッとして、「いえ、あのその、えーと……」

大バカである。捜査会議があるのに、捜査資料を持ち出して貸してしまうとは。皆村は課長にさんざん叱られ、仕方なしに応接室に向かつた。

「返してもらうしかないか」

彼は落ち込んでいた。美咲にそんな事を言つのも恥ずかしいが、捜査会議があるのに資料を貸した自分を軽蔑されるのではないかとも思った。

「あの」

応接室にそつと入ると、美咲が捜査資料を抱えてパーテーションの向こうから現れた。

「あつ」

皆村は、美咲が捜査資料が必要な事に気づいたのだと思った。

「すみません、それ、必要でした」

「そうですね。でも、間に合つて良かつたです」

「はつ？」

美咲の言葉に皆村はキヨトンとした。美咲は「一ノタ」として、「全部田を通しました。ありがとうございました」

「……」

皆村は呆然とした。

（ 嘘だろ？ ）

「では私はこれで。まだご連絡致します」

「は、はい」

美咲は二ヶ所のまま応接室を出て行った。皆村は美咲が氣を遣つて嘘をついたと思ったのだが、資料のところどおりに付箋紙が張つてあるのに気づいて、

「本当に読んだっていうのか？」
と驚愕してしまった。

「なるほど。それは鉄壁のアリバイね」

美咲からの報告を受け、葵は椅子に身を沈めて呟いた。葵がコーヒーを出しながら、

「でも、胡散臭いですよね、そのアリバイ」

「そつは言つても、どんな方法を使っても海藤氏に犯行は不可能な

のよ。それだけは動かし難いわ」

と美咲が言った。葵は、

「やっぱり、裏があるわね。美咲、後小松総合病院の情報を収集し

て。まともなやり方だと、何もわからないかも知れないわ」

「そうですね」

美咲は自分の席に着き、パソコンを起動させた。

しばらくしてそれぞれの情報屋からメールが戻つて来た。不思議な事にどの情報屋も口を揃えて、

「後小松総合病院は医療界のブラックホールだから、下手な詮索は命取りになる」

という返事で、用を為していなかつた。美咲が腑に落ちないという顔で葵を見た。葵は腕組みしてソファに座り、「うーん。情報屋がここまで尻込みするなんてあり得ないわね。どうこうことなかしら?」

「医療界のブラックホールという例えが一致しているのが気になりますね」

美咲も深刻な顔で相槌を打つた。

「手を出してはいけないって事なんでしょ。関係ないけどね」

葵は肩を竦めた。

「殺人事件の背景は複雑です。後小松院長がどこまで絡んでいるのか、そして何故金村さんは殺されたのか、何故重要参考人の立場にある海藤氏は完璧なアリバイに守られているのか? 謎は尽きません」

美咲の言葉に葵はフツと笑い、

「ブラックホールが怖くて探偵事務所は開業できないわ。この事件何としても私達の手で解明するわよ、一人共」

「はい、所長」

美咲と茜は真顔で応えた。

一方大原は、皆村に呼び出されて喫茶店にいた。

「どうしたんですか、先輩? お忙しいのではないですか?」

椅子に座りながら大原が尋ねた。皆村は煙草を灰皿にねじ伏せて、「忙しいよ。もう一つ身体が欲しいくらいなー」

「だつたらどうして……」

大原が言いかけると、皆村は何故か赤面し、

「お前、どうしてあんな人を俺に紹介したんだよ」

「はつ？」

大原は一瞬何を言われているのかわからなかつた。皆村は大原が話を理解していないのにムツとして、

「あの女性の事だよ！」

と大声で言つた。店中の視線が集まるのを感じて、大原は、

「先輩、声が大きいですよ」

「うるさいよ」

皆村は酷く苛ついていた。美咲が帰つてから捜査会議に出たのが、彼の頭から美咲の顔と声が離れず、ボンヤリとしてしまい、何度も叱責されたのだ。

「神無月さんが何か？」

「何かも何も、あれは反則だぞ」

「はア？」

大原はますます訳が分からなくなつてしまつた。皆村は言いにくそうに、

「か、彼女、俺のタイプだ」

と蚊の鳴くような声で言つた。大原は何とかそれを聞き取つた。

「そ、なんですか」

彼はホツとした。葵の作戦が失敗して、皆村に激怒されるかと思つてヒヤヒヤしていいたからだ。

「無理だ」

「えつ？」

また奇妙な言葉である。

「無理つて何が無理なんですか？」

「彼女と何度も顔を合わせたら、俺は多分死んでしまう。それくらいあの人俺のタイプなんだ」

また蚊が鳴いたのかと思うよつた声で皆村は言つた。

「もう無理なんだ。後はお前が何とかしてくれ」

「いや、それは……」

大原がそう言いかけると、皆村はテーブルに頭をこすりつけるようにして、

「申し訳ない。こんな事を言えば、間にいるお前に迷惑かけるし、署長にも怒られる事はわかつていい。でも俺には無理なんだ」

大原はフーッと溜息を吐いて、

「わかりました。この依頼を拒絶するのなら、貴方を警察機構から締め出すしかありませんね」

「なつ？」

皆村は思つてもいなことを言われて凍りついた。

「こ」の依頼は絶対に拒否できないんです。どうしてもと言つのなら、そういう事になります」

大原は冷静な顔で続けた。皆村は驚きを通り越して混乱していた。「自分はこの依頼を遂行するためになら、誰に何と言われようと、どんな手を使おうと、貴方を逃がしませんよ」

「大原……」

皆村はこれほど熱い大原を初めて見た気がした。

「お前、変わったな」

「そうですか？」

大原はフッと笑い、

「とにかく、続けて下さい。降りる事は許しません」

「……」

皆村は大原を見た。そして肩を竦め、

「わかつたよ。続ける。純愛に殉じるのも悪くねえかもな」

「皆村さん！」

大原は皆村とガツチリと握手を交わした。

「正面突破、ですか？」

美咲は葵の提案に仰天していた。葵はソファにふんぞり返つて、

「そう。後小松総合病院に乗り込んで、真相を暴くわ

「そんな事が出来るんですか？」

茜が心配そうな顔で尋ねた。葵は茜を見上げて、

「出来るわよ。意地悪姉さんに協力を依頼してね」

「菖蒲さんが手を貸してくれるとは思えませんが」

美咲が反論した。しかし葵は、

「菖蒲さんは何だかんだ言つても、金村医師の事が好きだったのは確かよ。だから必ず協力してくれるわ。どうしても首を縦に振らないなら、私にも奥の手があるから」

「えつ？ 奥の手、ですか？」

美咲はキヨトンとした。葵はニッとして美咲を見た。

「えつ？ 何ですか、今の笑いは？ また私に何かさせるつもりですか？」

「考え過ぎよ。違つわ」

葵は苦笑いした。すると茜が、

「菖蒲さんの事を意地悪姉さんて言つ事は、やつぱり所長は篠原さんと結婚するんですか？」

と突拍子もない突つ込みを入れて來たので、葵はビクッとして、「バ、バカな事言わないでよ。意地悪姉さんは語呂がいいから言つただけで、護と結婚なんてしないわよー！」

と焦り口調で言い返した。

菖蒲は現在出身大学の付属病院にいる。金村もそこの外科医だったが、後小松謙蔵の引き抜きで後小松総合病院に移つたのだ。

「今私は忙しいのよ。手短かにお願いするわね」

病院の応接室でソファに座りながら菖蒲は言つた。向かいのソファに座つているのは、何故か葵ではなく美咲だった。彼女は引きつた笑顔で菖蒲を見た。

「実は、後小松総合病院に行くに当たつて、菖蒲さんの紹介状を頂きました」

「それは無理ね」

美咲が言い終わるか終わらないうちに菖蒲は答えた。あまりにも早い拒絕に美咲は啞然としたが、

「何故ですか？」

「私は後小松総合病院の誘いを断わっているの。そのために後小松院長には相当怨まれているわ。だから私が紹介状を書いても、何のメリットもないわよ」

「そなんですか」

美咲は菖蒲の答えに納得した。しかしこのまま帰つたりしたら、葵に何と言われるか分からない。

「わかりました。ではこの依頼はなかつた事に致します」

美咲は賭けに出た。菖蒲はムツとした表情で美咲を睨んだ。

「何、その言い草は？ 依頼をなかつた事にする？ 誰に向かつてそんな事を言つているのか、わかつているの？」

「はい。ご協力いただけないのなら、この依頼の遂行は無理です。ですから、お断わりするしかありません」

「……」

菖蒲は苦虫を噛み潰したような顔をした。悔しいのだ。だが彼女は、葵にあれほど高圧的に依頼を受けるように迫つた手前、そう簡単に

「わかつたわ」

とは言えない。美咲の作戦勝ちだった。菖蒲はまさに美咲のまいたエサに食いついてしまつたのだ。彼女は真剣な顔で、

「紹介状は書く。でもそれは後小松院長宛ではないわ。弁護士に書くわよ」

「弁護士、ですか？」

菖蒲は立ち上がり、

「松木麗奈。医療関係専門の弁護士よ。今は後小松総合病院の医療過誤訴訟を準備しているわ

「医療過誤訴訟を？ でもそれは後小松総合病院と敵対している弁

護士の方ですね？ そんな方を紹介されても……」

「彼女は海藤の医療ミスを調査しているのよ」

菖蒲の言葉に美咲はハッとした。

「麗奈が会いたいと言えば、後小松院長は嫌とは言わないはず。あいつは麗奈を抱き込むつといろいろ画策しているから、守つて欲しいのよ」

「守る？」

菖蒲は美咲の隣に腰を下ろして、

「そう。海藤の医療ミスは、金村君も知っていたわ。麗奈にその事を話したのは金村君なの」

「その事、警察に話しましたか？」

「誰が話すものですか。連中は私の話を全く無視したのよ。信用ならないわ」

菖蒲の顔がまた険しくなった。

「海藤は医療ミスをたくさんしているらしいの。後小松総合病院は、医療ミスの巣窟だと金村君から聞いたわ。後小松院長がそれを全部握り潰しているという噂なの」

「それが金村医師殺害の動機だとすれば……」

「後小松院長も絶対にこの事件に絡んでいるわ」

菖蒲はキッとした顔で美咲を見た。美咲はニッコリして、

「菖蒲さん、本当に金村さんの事を愛していらしたのですね」

「な、何を言つて居るの、美咲。今度そんな妄言を口にしたら、私も怒るわよ」

「はい」

菖蒲が何時になく焦った様子で言い返したので美咲は笑いを噛み殺して返事をした。美咲が笑いを我慢しているのに気づいたのか、菖蒲は不愉快そうな顔になつた。

「とにかく、麗奈の事務所に行つてちょうどだい。彼女なら必ず貴女達の力になつてくれるわ」

「わかりました」

美咲は菖蒲から紹介状を受け取ると、大学病院を後にした。

「松木麗奈、か。美咲なら大丈夫かな？」

葵は携帯を切るとそう呟いた。茜がそれを聞き逃さずに、「それ、どういう意味ですか、所長？」

「松木弁護士は有名な……」

「言いかけ、口を噤んだ。茜はムッとして、

「何ですかア？　どうして言うのやめたんですかア？」

葵は肩を竦めて、

「あんたには刺激が強いかと思つて言うのを躊躇ためらつたんだけど、そこまで言うなら教えてあげるわ」

「えつ？」

葵の意味深長な言葉に、茜はギクッとした。葵はニヤリとして、「松木麗奈は女性が好きなの。要するにレズビアンで奴ね」「ええつ！？」

茜は美咲の行く末を想像して驚愕してしまった。

「美咲さんが危ないじゃないですか！　すぐに助けに行かないとい…」

茜はバッグを肩にかけ、今にも事務所を飛び出しそうな勢いで言った。すると葵は、

「心配いらないって。松木麗奈も神無月大佐の敵じゃないから」「えつ？　美咲さんてば、そっち系の人にも強いんですね？」

茜が目を見開いた。葵はフツと笑い、

「神無月大佐は無敵よ。多分松木弁護士も陥落しちゃうわ」と答えた。

その頃、話題の人である「神無月大佐」は、銀座の一等地にあるオフィスビルの最上階にいた。そこに松木麗奈の事務所がある。

「医療過誤訴訟が専門の正義感の強い弁護士のはずなのに、どうしてこんな凄いビルに事務所を構えられる程収入があるのかしら？」

一般論として、医療訴訟で患者側に立つ弁護士は採算を度外視し

て戦うタイプが多い。美咲は、経営状態が良くない事務所をいくつか知っているのだ。そのため不思議に思いながら麗奈の事務所のドアフォンを押した。

「どちら様でしょ、つか？」

事務員の女性らしき声が尋ねた。美咲はコホンと小さく咳払いをして、

「水無月探偵事務所の神無月と申します。皐月菖蒲さんの紹介で参りました」

「お待ち下さい」

その言葉の直後にドアのロックが解除される音がした。

「どうぞお入り下さい」

美咲はドアノブを回してドアを開き、中に入った。

「えつ？」

美咲は一瞬ドアを間違えたかと思った。内装がまるで「ファンタジー」だったのだ。いや、「メルヘン」の方が近いかも知れない。何しろ、壁一面少女趣味全開の壁紙。可愛い動物達が楽しそうに駆け回っている絵が描かれている。

「……」

言葉を失うとはまさに「ういう事を言つのだ」、と美咲は思つた。

（ 託児所を兼ねているのかしら？ ）

彼女は本気でそう考えた。

「お待ちしておりました。松木は只今電話中ですので、こちらでお待ち下さい」

先程ドアフォンで応対したと思われる紺の制服を着た女性が美咲をソファに案内した。

「はい」

美咲は導かれるままにソファに腰掛けた。松木麗奈がいるのは、彼女が案内されたソファの横に設置されている白いパーテーションの向こう側のようだ。麗奈の声は丸聞こえだつた。

「はい。わかつております。はい。それも承知しております」

麗奈の声はまるで舞台女優のように良くなつた。

「できません。どれほどの額を提示されても、取り下げは致しません。」これ以上お話をされてもお互い時間の無駄になりますよ

その言葉は若干の毒を含んでいた。相手は被告側の弁護士だらうか？

「いいえ、もうお電話下さらなくて結構です。法廷でお会いしますよう」

ガチャンと受話器を置く音がした。続いてコツコツと靴音がし、パーテーションの向こうから松木麗奈が現れた。ショートカットの黒髪に切れ長の眼。その知性を象徴するような高い鼻。優れた弁舌を繰り出しそうな唇。淡いピンクのスーツとタイトスカート。モデルのような細く長い脚。その容姿は美咲に決して負けていなかつた。この場に皆村がいたら、瞬殺されているだろ？ 麗奈は皆村の好みではないかも知れないが。

「お待ちしてましたア。神無月さんですね？ 私が弁護士の松木麗奈です。^{うるわ}麗^{うるわ}しいに奈良の奈と書きます」

麗奈は二口一口しながら名刺を差し出した。美咲は慌てて立ち上がり微笑み、

「神無月美咲と申します。お忙しいところ申し訳ありません」と名刺を取り出した。その時美咲は麗奈の様子がおかしい事に気づいた。

「どうされたんですか？」

麗奈はドサッと向かいのソファに倒れ込むよつた。座り、グッタリとしてしまつた。

「お身体の具合が悪いのですか？」

美咲はビックリして麗奈の横に座つて麗奈の顔を覗き込んだ。

「貴女、私の好みだわ。今度一緒にお酒飲みませんことオ？」

「えつ？」

美咲はギョッとして身を退いた。思いもしない方向にボールが飛

んで来た時のバッターのようだった。麗奈の発言は、美咲にとつてデッドボールスレスレである。

「ど、どういう事ですか？」

その手の類いの話に疎い美咲は、真顔で尋ねた。麗奈はウツトリとした顔で美咲を見て、

「もうダメ。貴女を見ていると、私の名前が恥ずかしいわ。麗しいに奈良の奈だなんて、とてもおこがましく思えて来るの」

「そんな事ありませんよ。お名前通りの女性ですよ、松木さんは。私なんて全然敵いません」

「その謙虚さも素敵。もう私、貴女にメロメロよ。菖蒲も罪な事をしてくれたわ。貴女のような人を私に紹介したりして」

麗奈のその言葉に美咲はハツとして、

「ああ、そうでした。菖蒲さんからの紹介状です」

「いいわよ、そんなもの。どうせ口クな事書いてないんだから。それより、貴女のところのボスは元気？」

麗奈は美咲から菖蒲の紹介状を受け取ると開ける事なくポイッと投げ捨ててしまった。

「えつ？ 水無月を存じなんですか？」

「ええ。護君の彼女でしょ？」

「……」

美咲は苦笑いした。そして、

「篠原さんとも面識があるりなんですか？」

「もちろん。彼が篠原さんのところに養子に入つたのは私の紹介でなの。だから良く知つているわよ」

「はア」

篠原は元々「臯月姓」である。諸々の事情から養子になつたのだが、その理由はおいおいわかるだろ？

「護君も早いとこ結婚すればいいのにね、貴女のところの所長と」

「はア」

美咲は苦笑いを続けるしかなかつた。すると麗奈はその様子に気

づいて、

「さてと。飲み会の件はまた後で話す事にしてと。本題に入りまし
ょうか」

「はい」

麗奈が弁護士の顔に戻ったので、美咲は向かいのソファに移動し
て居すまいを正した。そこへ事務員の女性が「コーヒー」を持って来た。

「どうぞ」

「ありがとうございます」

美咲がそう言つと、その女性は顔を赤らめてそそくさと立ち去つ
てしまつた。

「「めんなさいね。彼女も貴女にヤラれちゃつた一人なのよ
麗奈が二コツとして凄い事を言つた。美咲はポカンとしてしまつ
た。

（あの事務員さんも女性が好きなのかしら？）

「後小松総合病院には何のために行くの？ 菖蒲からは詳しい話は
聞いていないのだけれど」

「殺人事件の事でお尋ねしたい事があるんです」

「金村医師の事件ね。菖蒲が頼んだんじょ？」

「はい」

「あいつ、金村医師にベタ惚れだつたのよ。私が金村医師と訴訟の
事で会つていたのに誤解して大騒ぎだつたんだから」

「そなんですか」

菖蒲の普段の言動からは想像もつかないような話である。嫉妬に
狂つて冷静さを失つている菖蒲を見たら、葵は大喜びするだろう。

「普段の言動からは想像できないくらい乙女なのよ、あいつは」

麗奈は嬉しそうに言つた。菖蒲はあちこちに敵がいるようだ。

「まあ、あんな性格の悪い女の話はやめて、本題に入りましょか
さつきもそんなことを言われた気がする。美咲はまた苦笑いした。

「後小松総合病院は医療ミスを連発しているとんでもない医療機関
なの。でも院長があちこちに手を回して、それを握り潰しているわ。

ある遺族は金を積まれて、ある遺族は根も葉もない噂を流されて。

とにかく、酷い奴なのよ、後小松謙蔵は

「医療ミスをしているのが海藤さんなんですよね？」

「ええ

美咲は身を乗り出して、

「どうしてそうまでして後小松院長は海藤さんを庇つのですか？」

「海藤を庇つていると言つよりは、自分の信奉者を守つていると言つた方が正しいわね。あのジイさんの最終目標は、東京の私立病院の制覇らしいから。医は鍊金術の権化なのよ」

麗奈はソファにふんぞり返つて脚を組んだ。美咲は更に、

「金村医師は貴女と医療過誤訴訟を起こそうとしていたのですか？」「正確には私が起こそうとしていたのよ。ある遺族の話を聞いてね。それで大学の悪友である菖蒲に金村医師を紹介してもらつた訳。あいつ、それを口実に私にくつついて来て、金村医師と話をする機会を得ようとしていたの。バカでしょ？」

麗奈は肩を竦めて笑いながらそつと語った。美咲は愛想笑いをしながら、

「松木さんは黒い救急車が来た時、現場にいらっしゃいましたか？」

「麗奈つて呼んでよ。苗字で呼ばれるのつて、何か疎外されてる気がしちゃうから

「はア、」

菖蒲の同級生なら葵より年上のはずだが、麗奈は見た目は美咲と同じくらいに見えたし、言葉遣いに至つては茜に近いものがある。

「その時は残念ながらいなかつたわ。菖蒲はいたけどね」

麗奈は陽気に答えた。

「菖蒲さんはどうして現場にいたのですか？」

「私も行くはずだったのだけど、急な用事で裁判所に行かなくちゃならなくなつたので、通常業務を優先したわ。菖蒲にメールしたんだけど、気が早いあいつはもうすでに後小松総合病院の近くにいたつて訳。それで偶然にも黒い救急車を目撃しちゃつたのよね」

「警察はその事を伏せていいようつです」

「みたいね。でもネットで噂されてるし、公式に報道されていない

だけで、まさに公然の秘密になつてるわ」

「医師会が公開を渋つたとか聞きましたが？」

麗奈はその言葉に一悶々として、

「何故かしらね？ 後小松のジイさんは、どうしてそんな事をしたのかしら？ どう考えたつて隠し切れるものではないのに」

「そうですね」

美咲もその点は疑問に思つていた。

「後小松総合病院と黒い救急車は繋がりがあるとお思いですか？」

麗奈はまた駄々つ子のような顔をして、

「そんな他人行儀な言葉遣いはやめてよ、美咲ちゃん。もつとフレンドリーに話しましょ？」

「は、はい……」

「美咲ちゃん」という呼び方は、篠原にしかされた事がない。美咲は本当に麗奈という人物がわからなくななりそうだった。

「海藤は医師免許を金で買ったという噂もある男なの。そんな医者が外科医で、しかも手術を執刀しているなんてとんでもない事よね」いつの間にか、麗奈は美咲の隣に座つて身体を密着させて來ていた。美咲はスッと麗奈から離れ、

「後小松総合病院に一緒に行つて頂けますか？」

と尋ねた。麗奈は満面の笑みで、

「もちろん。貴方の願いだつたら、何でも聞くわよ」

「ありがとうございます」

美咲は身の危険を感じた。麗奈はそんな事は全然気にしていない様子で、

「でも今日はもう遅いから、やめにして、どうかで美味しいものでも食べましようか」

と腕時計を見て言つた。美咲は「これ以上ここにいるのはまずい」と考え、

「わ、私はまだ行く所がありますので、これで失礼します。明日また連絡しますので」

「あら、そんな寂しい事言わないでよ、美咲ちゃん。私と貴女の仲じゃないのオ」

麗奈の言動はとても法律家とは思えなかつた。

「後小松のジイさんは夜行つてお酒飲ませて喋らせるのがベストな よ。美咲ちゃんなら秒殺しちゃうかも」

麗奈は楽しそうだが、美咲は頭痛がして来ていた。

「あらあら、美咲はこのまま後小松総合病院へ直行するそうよ」
葵が携帯のメールを読みながら言った。給湯室から戻つて来た茜
が、

「美咲さん、はつたらき者オ！ 私はもつ帰りますけど」
と嬉しそうに言った。すると葵は、

「残念ね、茜。貴女も働き者になつてちょうだい」

「えつ？」

葵の不吉な言葉に茜はギョッとした。葵はニヤッとして、

「大原君に連絡して、例の所轄の刑事の事を聞いて来て。美咲の話
だと、あまり協力的ではなかつたようだから。作戦変えないといけ
ないかも」

大原に連絡するのが仕事とわかり、茜は途端に上機嫌な顔になつ
た。

「わつかりましたア！ 私如月茜は神無月大佐を見做い、働き者に
なります！」

と敬礼した。葵はブツと吹き出して、

「何よ、それ。大原君と会うの、嫌じやなかつたの？」

「そ、そんな事ないですよ。嫌だなんて言つた事ないじゃないです
かア」

茜は妙にソワソワしながら身支度をし始めた。葵はキヨトンとし
て、

「茜、ロリコン男は嫌いなんでしょ？」

茜はその言葉にビクッとして、

「き、嫌いですよ。でもオ、大原さんはロリコンじゃないですって
ば」

「そつなの？」

葵は納得しかねるといつ顔で応じた。茜は苦笑いして、

「そうですよ。所長は大原さんを誤解してますよ。大原さんは普通の人です」

「ま、奇人だとは思つてないけど。でも、今日だつて……」

「ファミレスの件ですか？」

茜は携帯でメールを早打ちしながら葵を見た。

「そうそう。大人の女性は苦手だつて言つてたじやないの。あれはロリコンの証明でしょ？」

葵の仮説に茜は反論した。

「大原さんは、美咲さんみたいなお淑やかな女性が苦手なんですよ。もつとその、元気がいい、キャピキャピしてゐる女子が好きなんですよ、きっと

「そうかなア」

葵は腕組みしてソファにもたれ掛かった。茜は自分の机から離れると、

「大原さん、すぐに会えるそうです。行つて来ます」

と足早にドアに向かつた。葵は、

「あつ、私ももう出るから、報告はメールか明日事務所で直接でいいわよ」

「はーい」

茜は振り返らずに出て行つた。葵は溜息を吐いて、

「あいつ、最近よくわからないな」と呟いた。

夕闇の中、美咲は麗奈の運転するセダンで後小松総合病院に向かつていた。

「院長はスケベジイさんだから、『氣をつけてね』

そう言つてゐる麗奈は挑発的な服装に着替えていた。ブラウスのボタンを2つ外し、少しでも屈めば胸が丸見えになりそうだ。スカートも美咲が恥ずかしくなる位短い。スーツの色も淡い紫で、院長の好みなのだろうか？

「それでは襲つて下さ」と呟つてゐるよつたものですよつて言つた
「そうね」

麗奈は呆れ顔の美咲をチラシと見て言つた。美咲は苦笑いして、
「そつは言ひませんが。麗奈さんの戦略なのだらうと思つただけで
すよ」

「そつ」

麗奈は嬉しそうに呟いた。そして、

「後小松院長は色々と怖い方々と繋がりがあるらしいの。多分菖蒲
はそれを知つて貴女を私に紹介してくれたのね」

「えつ？」

美咲はギクッとした。麗奈はフツと笑つて、

「心配しないで。私は貴女達と同じ月一族よ。但し、忍びじやない
けどね」

「そつなんですか」

美咲は意外に思つて麗奈を見つめた。麗奈は前を向いたままで、
「私も護君と同じで養子なのよ。養子になつた理由は今説明してい
られないけど、貴女なら一族の考えはよく理解しているから、察し
てくれるわね」

「ええ。月一族の姓のみで血を繋ぐのには限界がありますから、養
子・養女を出しているのだとか」

「第一義的にはね。理由はそれぞれの事例」と別にもあるわ」

麗奈はまたも嬉しそうに言つた。

「私は貴女達のような身体能力がないから、菖蒲が貴女を引き合わ
せてくれた、と思つのよ、怪力の美咲ちゃん」

「えつ？」

美咲は自分の力を知つてゐる事を告げられ、真つ赤になつてしま
つた。

「ごめんなさい、それは貴女にとつてあまり知られたくない情報な
のね。もう言わないわ」

「いえ、別に……」

美咲は火照る顔を右手で扇ぎながら応じた。

「院長の後ろには暴力団以上に危険な連中がいるわ。彼は外国のギヤング達とも親交があるらしいの」

「ギヤング?」

「美咲はギョッとして麗奈を見つめた。すると麗奈は一コッとして、「あんまり見つめないでよ、美咲ちゃん。運転操作を誤っちゃうわよ」

「あ、はい」

美咲は前を見た。すると視界に「後小松総合病院」の看板が見えて来た。ライトアップされていて、病院とは思えないような赤地に白の看板だ。

「趣味悪いでしょ。今時品のない飲み屋だつてあんな色の看板付けてないわ」

「そうですね」

美咲はクスッと笑つた。

（この人、こんな言動しているけど、やっぱり法律家なのよね。改めて一族の懐の深さを感じたわ）

その頃、皆村は美咲が張った付箋紙の箇所を賢明に調べていた。彼は他の刑事に美咲の付箋紙を見られないうつに全て剥がし、どこに張られていたのかメモしておいた。もう署内には当番の者しかない。捜査本部の人間は全員聞き込みに出かけた。

「これは……？」

皆村は一つの付箋紙に目を留めた。

「目撃者の証言が黙殺されている？」

「皐月菖蒲のことだ。しかしその名前は記されていない。

「確かに、現場でも大声で捜査本部の連中に食つてかかつてた女がいたな」

「あんな女、美咲さんに比べれば……。

（俺は何を考えているんだ？）

皆村は自分が何かといつと美咲の事を引き合ひに出して考へている事に気づき、赤面した。

「何かと黒い噂が絶えない後小松総合病院。医師会の圧力。何かあるな？ 捜査本部も真剣に調べている様子がない」

付箋紙を丁寧に机の引き出しの仕切りの中に片づけると、皆村は立ち上がった。

「神無月さんは今どきにいるのだらう？ まさか、奴のどじりどじ？」
彼は自分に対し言い訳しながら、後小松総合病院に行く事にした。

「もしそうなら、彼女が危ない。後小松は只の医者じゃないんだ」
彼は所轄署を飛び出し、自分の車で後小松総合病院に向かつた。

他方、茜は大原とファミレスで会っていた。

「あのオ」

「一七一七しながらもモジモジして、茜は尋ねた。
「どうして待ち合わせ場所、ここなんですか？」

彼女は夜景の見える展望レストランで会いたかったのだ。しかし
そんな要求ができるほど茜は図々しくない。

「えつ？ 茜ちゃんはファミレスが好きなんじゃないの？」
「はつ？」

大原の途方もない発言に、茜は完全な間抜け顔で応じてしまつた。

「え、え、どうということですか？」

「水無月さんに教えてもらつたんだよ。茜ちゃんは高級レストラン
より、ファミレスの方が落ち着くんだつて」

「……」

茜は頃垂れてしまつた。

(所長め、この怨みいつか必ず……)

しかしそれは絶対に無理だとも思つた。そして、
「ところで、美咲さんが会つた刑事さんの事なんですが」
「皆さんがどうかしたの？」

大原は真顔になつて尋ねた。茜も真剣な顔で、

「美咲さんの印象だと、あまり好意的ではなかつたらしいんです。

大丈夫なんですか？」

「ああ、それね。大丈夫だよ。別に協力したくないとかじやないから」

茜はキヨトンとして、

「そうなんですか？ 神無月大佐の攻撃に耐えられるなんて、凄い人だなと思つたんですけど」

「ハハハ。全く逆。皆さんは多分瞬殺されたんだよ、神無月さんに」

大原が陽気に言つたので、茜はホッとした。

「じゃ、作戦は成功したんですね？」

「取り敢えずはね。ただ、皆さんと神無月さんを直接会わせるのは控えた方がいいな」

「どうしてですか？」

茜はウエイトレスが持つて来たサラダに手を付けながら尋ねた。
「皆村さん、硬派じゃなくて、只の純情派だったんだ。神無月さんはタイプど真ん中だつて言つてたよ」

「そうなんですか？」

茜はサラダを頬張りながら応じた。大原は微笑んで、

「あの人、もっと頑固な人なのかと思っていたけど、そうじやなかつた。鉄のように見えても、実は脆かつたりする場合もあるんだよね」

「そうですね。大原さんはどつちですか？」

茜はフォークを置いて大原を見た。大原は茜がジッと見つめたので赤面した。

「僕はノミの心臓さ。好きな人に見つめられると、何も言えなくなるんだ」

「……」

茜はその言葉を曲解した。

「そりなんですか。そりなんだ……」

彼女はシューんとしてしまつた。大原は茜が思つてもい反応を示したので、ビックリしていた。

「どうしたの、茜ちゃん？ どうか具合が悪いの？」

「はい。胸の辺りがキリキリと締め付けられたの？」

「ええつ？」

大原は立ち上がつて、

「それならすぐに病院に行こう。こんな感じで食事してくる場合じゃないよ」

「美咲さんのところに行きたいんですか、大原さん？」

茜は涙ぐんで尋ねた。大原はキヨトンとして、

「えつ？ 何で神無月さんのところに行くの？ 病院に行くんだよ」

「だつて、美咲さんは後小松総合病院に行つたから……」

大原はそこでようやく茜が何を言つてゐるのか理解した。彼は照れ笑いして、

「僕は大人の女性は苦手なんだよ、茜ちゃん」と言い、茜をソッとエスコートした。茜は大原に手を握られて耳まで真つ赤になつてしまつた。

「さ、病院に行きましょつか、お姫様」「は、はい」

茜は幸せで死んでしまひそうなくらいだった。

「じたな時間にこりつしゃるとは、どういう風の吹き回しですかな、先生？」

院長室で対面した後小松院長は、美咲の想像どおりの男だつた。脂ぎつた顔。自分で靴の紐も結べないと思われる程の膨らんだ腹。全部親指に見えそうな太い指。髪が歳の割に黒々としてフサフサなのは、恐らくそういう事なのだろうと推測した。

「あーら、いつもこのくらいの時間に来て欲しこつて言つてたの、

院長先生ですわよ」

麗奈は中身が丸見えになりそつなのも気にせず、低めのソファに腰を下ろした。美咲のスカートの丈でもちよつと躊躇するくらいの高さだ。恐らく、院長の「趣味」でこの高さにデザインしたのだろう。

「ほらほら、美咲ちゃん、自己紹介！」

麗奈は隣を叩いて座る事を促しながらそつ言つた。美咲は仕方なくソファに近づき、

「水無月探偵事務所の神無月美咲と申します」

と院長に名刺を差し出し、腰を下ろした。院長はでっぷりとした腹を摩りながら名刺を受け取り、

「ほオ。探偵さんですか。どういうご関係ですか、松木先生とは？」

「恋人なんです」

麗奈は二ツ「コツ」して言つた。院長もその答えには仰天したようだ。美咲は呆れてしまつて何も言えない。

「何だね、君も女が好きなのか？」

院長は残念そうに美咲を見て言つた。美咲も、この場限りはそれでもいいかなと思うくらい、後小松院長の目は口親父全開だつた。「い、いえ、違います。松木先生とはそういう関係ではありません」根が正直な彼女は、ついそう答えてしまつた。そして、院長の視線の先が自分のスカートの裾に集中しているのに気づき、慌ててハンカチで隠した。

「あーら、残念。美咲ちゃんは私より院長先生の方が好みなのね」麗奈はとんでもない事を言い放つた。美咲は慌てて否定しようとしながら、

「ほオ。例え嘘でも嬉しいねエ、探偵さん」

と猫なで声の院長の声を聞き、ギョツとして目を向けた。彼はすでに舌なめずりをしている肉食獣のような目で美咲を見ている。

「それで美人の探偵さん、私にどんな御用ですか？」

院長は片時も美咲のスカートから目を離さずに尋ねて来た。美咲はハンカチでしつかりガードしながら作り笑いをして、

「実は先日こちらの病院であります、ある事件についてお尋ねしたいのですが」

美咲のその言葉に、院長室の空気が一変した。

「事件？ 何の事ですかな？」

院長はようやく視線を美咲の顔に移した。美咲はその眼光の鋭さに一瞬気圧されそうになつたが、

「黒い救急車の事件です。こちらの病院の外科医だった金村さんが殺された事件です」

あれほど嫌らしい顔をしていた院長が真顔になり、やがて険しい顔になつた。

「その件は警察に全てお話しました。貴女に話す事は何もありません」

「……」

美咲は麗奈を見た。麗奈はニッコリして、

「あらア、院長つたら、急に怖い顔してH。麗奈、泣いちゃうからア」

とクネクネしてみせた。まるでキヤバ嬢である。しかし院長は麗奈の御機嫌取りに無反応で、

「お引き取り下さい。そのような事で貴女達と話すつもりはありませんので」

と立ち上がり、ドアを開いた。麗奈は肩を竦めて、

「わかりました。出直します。さつ、美咲ちゃん」

「は、はい」

麗奈はあつせり引き下がり、美咲を促して院長室を出た。

「さよなら」

院長は冷たくそう言つと、バタンとドアを閉じた。

「すみません、私の段取りが悪かつたみたいですね」

美咲は小声で麗奈に詫びた。麗奈は歩き出しながら、

「いいのよ。私も最初は院長室に入るまで苦労したから。それに、今日は顔合わせだと思っていたしね」

「はア」

麗奈は始めからすぐに帰るつもりだったようだ。

「美咲さん……」

皆村は、イライラしながらハンドルを握っていた。事故渋滞に巻き込まれ、後小松総合病院まで後もう少しのところで、全く動けなくなってしまったのだ。

「ここまで来て……」

美咲の強さを知らない皆村は、彼女が大変な目に遭っているような気がして、居ても立つてもいられない程だった。

「そうだ。水無月探偵事務所。そこを潰してくれ。報酬は弾む。それから、あの出しゃばり女も何とかしろ。そつ。医者も弁護士もだ。目障りだからな」

後小松は携帯に怒鳴っていた。

「私を誰だと思っているのだ。只の医者と思っている奴らには、とにかく思い知つもらうぞ」

彼の目はギラつき、人の命を何とも思わないような兇悪な様相を呈していた。

美咲は麗奈の車で自分のマンションに送つてもらっていた。

「病院で分かれても良かつたのですが

「もう、つれないわね、美咲ちゃんは。私にお家を知られるのがそんなに嫌なの?」

「いえ、そういう訳では……」

実はそうなのだが、「そうです」とは言えない。

「ふーん」

麗奈は「一や一や」していた。

「どうしたんですか？」

美咲は麗奈のニヤニヤが気になつて尋ねた。

「彼氏でも来るのかなア、なんて思ったのよ」

「いえ、今は誰も……」

「あら、美咲ちゃん、フリーなの？」

つぐづぐ正直過ぎるのはいけないと痛感する美咲だった。

「だったら尚の事、これから食事に行きましょ、うつよ、美咲ちゃん」

「いえ、その、所長に会わないといけないので……」

「じゃあ葵には私から電話しとくわよ」

「……」

もう降参するしかないのか？ 美咲は仕方なく麗奈と食事に行く事を決意した。その時だった。

「えつ？」

携帯が鳴り出した。

「あつ！」

まさしく地獄に仮だつた。

「誰？」

麗奈が覗き込んだ。美咲は彼女に携帯を見せて、

「刑事さんからです」

「刑事？」

麗奈はキヨトンとした。

「はい、神無月です」

美咲は弾んだ声で応じた。

皆村は、あまりにハイテンションな美咲の声に仰天した。

「あ、急に電話してすみません。今、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です。どちらにおいでなんですか？」

ああ、勘違いしそうだ。皆村は自分を必死に抑えた。

「今、後小松総合病院に向かう途中なんです。貴女がそこで大変な目に遭つているのではないかと思いまして」

「そりなんですか」

確かに違う意味で大変な日に遭つてしまつたのだが。

「私もつ病院を出て、自分のマンションに向かつてくるといひなんですね」

「そ、そりなんですか」

皆村はホッと一安心したが、その後の言葉を思いつけない。する

と、

「あの、皆村さんはもうお食事すませましたか?」

「は?」

思つてもいゝない問い合わせに、皆村はパニックになりそつだつた。
「よひしかつたら、一緒に食事しませんか? 今日のお礼もしたい

ので」

「え、ええつ?」

つい大声を出してしまつた。美咲は驚いたよつだ。

「あの、ご迷惑ですか?」

「と、とんでもないです。是非、お願ひします」

皆村は見えていゝない美咲に対し深々とお辞儀をした。

「ひどーい、美咲ちゃんたら。私を放置して、男と食事イ?」

麗奈が口を尖らせて言つた。美咲は苦笑いして、

「違いますよ。麗奈さんも」一緒に。刑事さん、黒い救急車事件の
担当の方なんです」

「あらま、そりなの。それは貴重な存在ね」

麗奈は「コッとした。すると美咲は、

「でも麗奈さんの今の服装、あの刑事さんには刺激が強過ぎるよつ
な……」

「平氣よ。私は氣にしないから」

「いえ、そういう事ではなくてですね……」

美咲は「」の「暴走列車」をつまく制御できるのか不安になつた。

「さてと。誰も帰つて来ないんだから、もういいかな
葵は机の上を片づけ、席を立つた。

「？」

その時、妙な気配を感じた。

（まさか、星一族？）

彼女は周囲を探つた。

「違うか。連中なら、こんな簡単に気配を感じさせないわね。どこ
かのおバカさんが、命知らずにもここに来ようとしているのか」

葵はニッとした。

「あれ以来、鍛錬は怠つていないし、すっかり回復したから、肩な
らしでもしますか」

彼女は実に楽しそうに事務所を出た。

皆村は剥れていた。しかし、それは心の中だけだ。美咲を前にし
て、不機嫌な顔など間違つても出来はしない。
「申し訳ありません、先輩。まさか、先輩達がいらっしゃるとは…

…

大原は気まずそうに言つた。

「しようがないよ、偶然なんだからさ」

皆村は精一杯の作り笑いで応じた。

美咲と食事。死ぬ程緊張すると思つた。

ところが美咲と一緒に変な女が現れた。その女までは許せる。一
人きりだと何も喋れなくなると思つたからだ。

しかし、向かつたレストランに何故か居合させた大原と子供みた
いな女。偶然として片づけるには、あまりにも不自然だ。皆村がど
れほど勘ぐつても事実は事実。どうする事も出来ない。

「……」

同じテーブルに着いた男2人、女3人。妙な緊張感と、えも言わ
れぬ嫉妬心が渦巻いている。

茜は美咲を警戒している。麗奈は大原と皆村を警戒している。皆
村は大原を警戒している。複雑な人間模様だ。

「あの、こちらの方は？」

麗奈は警戒しながらも美咲に尋ねた。美咲は苦笑いをして、

「そちらの女の子が私の職場の同僚の如月茜さんです。そして、そ
の隣が警察庁の大原統さんです」

「なるほど」

麗奈は嬉しそうに微笑んだ。そして、彼女は皆村に目を転じた。

「こちらのその筋の方みたいな怖い目つきの男性は？」

随分と棘のある言い方である。皆村自身、自分の顔が強面なのは
十分理解しているが、それを面と向かって、しかも美咲の前で言わ
れたのは心外だつた。美咲は苦笑いをして、

「刑事さんです。さつきお話した、殺人事件を担当されている……」

「ああ、そうなの」

麗奈は二コツと作り笑いをして、

「よろしく、刑事さん」

皆村はムカついていたが、美咲の知り合いのようなので、
「こちらこそ」

と応えた。

「皆村さん、この方は松木麗奈さん。後小松総合病院に対し、医
療訴訟を起こす予定の弁護士さんです」

「後小松に訴訟？ 弁護士？」

あまりに意外な人物だったので、皆村はアホ面をして麗奈を見た。

「あらかじめ申し上げておきますが、美咲さんは私の物ですから」
麗奈の仰天発言に、皆村は息を呑んだ。茜はもう少しで携帯を落
とすところだつたし、大原は呆気に取られて麗奈を見ていた。

「麗奈さん、そういう冗談はやめて下さい」

美咲は真顔で言った。麗奈は美咲を見て、

「あら、『冗談じゃなくて本気よ』

「……」

美咲は何も言い返さなかつた。

「バカ話はそれくらいにして、オーダーをとりませんか」

皆村も負けずに皮肉タップリの言葉で応じた。

「そうですわね、組長さん」

麗奈は更に皆村を刺激した。しかし、皆村はそれには応じず、「それにして、最近の弁護士先生は、まるでキバ嬢みたいな格好でお仕事されるのですね、松木先生？」

「そうですの。私、見ての通り絶世の美女ですから、それを武器にしない手はないのですわ、組長さん、あ、ごめんなさい、刑事さん」麗奈は一步も退かなかつた。茜と美咲は顔を見合わせた。大原は堪りかねて、

「皆村さん、もうその辺でやめてください。松木先生は良き協力者ですよ」

「……」

皆村はムスッとして腕組みをした。麗奈は一ヶ口つして、「ありがとうございます、大原さん。もう少しで私、泣いてしまいそうでしたわ」

と田を意図的にウルウルさせて言つた。大原は苦笑いして、「ど、どうも」とだけ言つた。

一方葵は、外廊下を歩き、エレベーターの前まで來ていた。

(殺氣はまだ感じる。何人？ どんな手合い？)

「おい、そこの女。お前の所のバカが、俺の知り合いの病院に押し掛けで何やら不愉快な事を尋ねたそうだ。すぐにやめさせろ。でないと、痛い目に遭うぞ」

エレベーターの脇から、大男が現れた。どうやら日本人ではないらしい。白人のようだ。「ようだ」というのは、黒い覆面を着けて

いるからである。身長は2メートルを軽く超えている。体重も百キロ以上あるだろ？葵は溜息を吐いた。

「あんた達こそ、私たちの事務所がどんなところと付き合ってあるのか調べてから近づいた方がいいわよ」

「何イ？」

男は葵がハツタリを言つたと思い、彼女に掴みかかつとした。葵はそれを軽くかわした。

「いきなりボディタッチはいけないわよ、おじさん」

「ふざけるな！」

男は激怒し、葵に再び掴みかかつた。

「しつこい男は嫌われるわよ、おじさん」

「殺す相手に好かれても仕方なかろ？ー」

「誰が誰を殺すの？」

葵はせせら笑つて尋ねた。男は逆上して、

「俺がお前をだよ！」

と叫び、サバイバルナイフを取り出した。

「あらあら、そんなの持つてると、お巡りさんに職質された時、絶対捕まるわよ」

「つるさい、このバカ女！」

男はナイフを振り上げて、葵に突進した。

「危ないわね」

葵はそれをヒョイッとかわし、よろけて倒れ込む男の背中に蹴りを入れた。

「うおつ！」

巨体の割には脆い男だ。簡単に倒れてしまった。

「このオツ！ バカにしやがって……。それにしても、その身のこなし、一体何者だ？」

男は立ち上がりながら葵を見た。葵は肩を竦めて、

「探偵事務所の所長よ」

「巫山戯るな！ 探偵事務所の所長が、この俺の攻撃をそつ易々と

かわせるものかよ！」

男は激怒したようだ。

「鬱陶しいわね、おじさん。あまりしつこいと、痛い目に遭わせるわよ」

葵は目を細め、仁王立ちで言い放った。

「ほざくな！」

男はまたナイフを振りかざして葵に突進する。

「芸がなさ過ぎよ、おじさん！」

葵はフワツと飛び上がってそれをかわし、

「はっ！」

と首の後ろに手刀を叩き込んだ。

「ぐへっ！」

大男はそのまま前のめりに倒れ、動かなくなつた。

「こんなところで倒したくなかったんだけど。後は警察に任せちゃおう」

葵は携帯を取り出し、

「ああ、総監に繋いで。えつ？ 水無月葵よ。五分以内に私の事務所に暴漢を引き取りに来なさいって伝えて」

天下の警視総監が、まるでお使い小僧である。

「バカなの、後小松つてジイさんは？ こんな事して、とっても後悔する事になるわよ」

葵は嬉しそうに倒れている男の上に腰を下ろした。

「さてと」

手袋を着け、服を探る。ポケットに携帯電話が入っていた。しかし、着信も発信も履歴なし。もちろん、電話の登録もなし。

「なるほどね。それなりのプロだけど、私達に挑むにはまだまだレベルが低過ぎたわねえ」

葵は携帯をバッグから取り出したビニール袋に入れた。

「それからつと」

男が握り締めたままのサバイバルナイフをもぎ取る。

「これもつと」

携帯と一緒に袋に入れる。

「ついでに顔も見ておこうかな」

葵は覆面を剥ぎ取った。そして結果を見て後悔した。

「うへ、見なきや良かつた……。弱い上に不細工じや、この世界で生きていけないわよ」

その時携帯が鳴った。

「はーい、総監。忙しいのに悪いわね。え？ そう、わかつたわ。それから、後小松総合病院の事件なんだけど？」

総監は何か言っている。

「そりなんだ。凄いのね、そのジイさん。フーン。天下の警視庁が、手も足も出ないって訳ね」

総監は何やら必死に言い訳しているようだ。

「はいはい。いいわよ、そんなに一生懸命部下達を庇わなくとも。私は別にそんな事を^{つくつ}くつもりはないわ。只、後小松のジイさんには、きつちりお礼に伺うけどね」

今度は慌てているようだ。総監が可哀相である。

「心配しなくて大丈夫よ。警視庁には迷惑かけないから。安心して。じゃ、また」

葵は携帯を切り、次に美咲の携帯にかけた。

「はい」

美咲は天の救いとばかりに葵からの連絡を受けた。彼女は麗奈達に会釈して、席を立つた。

「どうしたの、美咲？ 人の声がたくさんしてたけど？」

「今、茜ちゃん達と合流して、食事中なんです」

美咲は小声で答える。すると葵は、

「何よ、私だけ仲間はずれなの？ 美咲までそういう事するの？」

「違いますよ。後小松総合病院から出て、麗奈さんに自宅まで送るつて言われて困っていたところにですね……」

美咲は慌てて弁解した。

「言い訳はいいわよ。場所はどこ?」

葵の声は、有無を言わせないトーンだ。

「はい……」

麗奈と皆村だけで一触即発状態なのに、この上葵まで乱入したら、どうなるかわからない。美咲は逃げ出したかった。

「誰から?」

美咲が席に戻ると、麗奈が小声で尋ねて来た。

「水無月からです」

「へえ。ここに来るの?」

麗奈と美咲の会話を聞きつけた茜が、

「えええ!? 所長が来るんですかあ?」

と大声で言う。皆村も大原も、茜を見た。茜は注目の的になつてゐる事に気づき、

「あ、いえ、その……」

と口ごもつた。

「所長つて?」

今度は皆村が大原に小声で尋ねる。大原は苦笑いして、
「水無月葵さんです。奇麗な方ですよ」

「そ、それはどうでもいい」

皆村はギクッとした。

(こいつ、すっかり俺の事を面白がってるな)

彼はムツとして大原を睨んだ。

「何ですかあ、刑事さん? 大原さんに何か?」

その視線に気づいた茜が、さつきから気に食わなかつた皆村に言い放つた。

「いや、別に」

皆村にとつて、茜は子供にしか見えないので、全然怖気づく要素がない。逆に威嚇するように彼女を見据える。でも茜も強面には経理の専門学校に行つっていた頃から慣れているので、全くビビッたり

しない。

(全く、ここのガキ、いけ好かねえ)

皆村は茜を睨むのをやめて、食事を続けた。

「皆さんは、茜ちゃんの事が嫌いなんですか？」

大原が小声で尋ねる。茜は麗奈と話しているので、聞こえていな
いようだ。

「嫌いも何も、彼女の事は何も知らないよ」

「茜ちゃんは、神無用さんの妹分なんですから、あまり苛めないで
下さいね」

「え？」

その言葉には反応してしまった皆村。だが何とか気を取り直し、
「そう言えば、お前と彼女、付き合つてるとか？」
と反撃した。大原はニッコリして、

「僕はそのつもりなんですけどね」

「フーン」

皆村は愉快そうに大原と茜を見た。その視線に気づいた茜が、
「何ですかあ、刑事さん？」

とまた突っかかつて来た。

「あらあ、何だか貴方達二人つて、性格合わないみたいねえ」
酔いが回ってきたのか、麗奈がケラケラ笑いながら口を挟む。
「余計なお世話だ、キャバクラ弁護士め」

皆村が負けずに毒づく。

「そうですよ、松木さん。この人とは私は関わりがないんですから、
性格が合わないと今は関係ないです」

茜もムツとして反論する。麗奈は陽気に笑い、

「それなら良かつたあ！ 人類皆兄弟だから、仲良くやりましょ！

！ ね、美咲ちゃん」

「は、はい……」

肩を抱かれて、身の危険を感じる美咲。それを見て氣を揉む皆村。

そして葵。ようやく制服警察官が一人到着した。

「後はお願ひね。私はこれから食事に行くから」「は！」

二人は直属の上司から、くねぐれも失礼のないようになると何度も言われているので、とても緊張していた。葵がエレベーターに乗つて降りて行くのを確認すると、長い溜息を吐いた。

「はい、皆村」

本署からの緊急連絡を受け、皆村は席を立つていた。

「何ですって！？」

それは衝撃的な話だった。

「何があつたんですか？」

皆村の様子に気づいた美咲と大原が近づいて来た。大原と美咲が近づいたのを見て、茜もやつて來た。そして素早く美咲と大原の間に立つ。

「黒い救急車が現れたそだ。現場が混乱していく、状況がよくわからぬらしい。俺はこれから署に戻るよ。後を頼む」

皆村は一万円札一枚、大原に渡して立ち去つた。

「僕も連絡をとつてみよう」

大原は携帯を取り出し、警察庁にかけた。

「茜ちゃん、大原さんをお願いね。私は麗奈さんを送つてから、所長と合流するわ」

「はーい！」

美咲と大原が離れるのがわかつて、茜はホッとしたようだ。

一方、葵の携帯にも警視総監から連絡が入つていて。

「そう。また現れたの？ ありがとう、総監。ええ、続けるわよ、私達も。邪魔しないから、安心して」

葵にそう言われても返答のしようがない総監である。

「さてと。美咲とは麗奈さんの事務所辺りで合流するとして……」

葵はワクワクする気持ちを抑え、グランドビルワンを出た。

大原は茜と共にレストランを出た。

「これからどうするんですか？」

茜は二口二口して尋ねた。大原は真剣な顔で、

「本庁に戻る。事件の全体像がまだ把握できないんだ」

「そうなんですか」

「茜ちゃんは？」

大原がハンドルを切りながら言った。茜は大原を見たままで、「もちろん、大原さんと」一緒にします

「ありがとう」

大原は照れたように笑い、チラッと茜を見た。

美咲は精算をすませ、レストランを出た。

「？」

妙な殺気が付近に漂っている。

（何？ 誰？）

葵が襲撃されたのは、彼女から聞いた。その仲間がこちらにも現れたようだ。

（後小松院長の差し金？）

美咲は麗奈を車の助手席に乗せ、周囲を警戒する。

「Jの臭いは……？」

硝煙の臭いがした。美咲はすぐさま運転席に乗り込み、車をスタートさせる。

「くつ！」

銃声が響き、麗奈の車のボンネットに跳弾の火花が飛んだ。騒ぎを聞きつけ、レストランから人が出て来る。そのせいか、殺気が消えてしまった。

「逃げた？」

それでも美咲は警戒を解かず、車を走らせた。

「何事？」

「普通の揺れ方ではない動きを体験して、麗奈も酔いが覚めたようだ。

「麗奈さん、姿勢を低くしていて下さい。まだ安心できません」

美咲は前方を見据えたままで言った。

「カッコいい、美咲ちゃん！ 惣れ直したわん

それでも麗奈はお気楽発言だ。美咲は脱力しそうなのを堪え、「麗奈さんの事務所に戻ります。『自宅は危険』でしょうねから

「そのようね」

麗奈はようやく法律家の顔になつた。

「あのジイさん、とんだ狸ね」

「ええ。今のは本気で殺すつもりの射撃でした。警告ではあります

ん

美咲も探偵モード、いや、忍びモード全開になつていて。

「茜ちゃんも危ないかも知れませんね」

美咲は携帯を取り出し、インカムをセットした。

茜と大原も、何者かが尾行しているのに気づいていた。

「やつぱり来ましたね。所長が襲撃されたから、来るのは思つてましたけど」

茜も忍びモードになつており、口調もいつもと違う。大原はルームミラーを見て、

「尾行がわかり易いといつ事は、僕らに見られても構わないといつ事かな？」

「でしょうね。殺すつもりなんでしょう、私達を」

茜はそんな事を言いながら、嬉しそうだ。彼女は大原と一緒に戦えるのが楽しくて仕方がないのである。

「命知らずだね、茜ちゃん達に戦いを仕掛けるなんてぞ」

大原はニヤリとして言った。茜はニコッとして、

「ホントですよ。バカとしか思えないです」

その時携帯が鳴る。美咲からだ。

「はい。そうですか。」じつにもおかしなのが現れましたよ。わかれました」

茜は携帯をしまつと、

「大原さん、仕掛けますね」

「え、茜ちゃん？」

大原は仰天した。茜がいきなり忍び装束に変わると、走っている車から飛び出し、尾行している車に駆け出したのだ。

「あんたら、邪魔！」

相手も驚愕した。まさか走行している車から、人が飛び出して来るのは夢にも思わなかつただろう。

「うわあ！」

茜は装束の懷から煙玉けむりだまを出し、開いている窓から放り込んだ。たちまち車内は煙が充満し、何も見えなくなつた。

「あわわ！」

パニックになつた運転者はハンドル操作を誤り、付近のガードレールに激突した。

「はい、任務完了！」

茜はしばらく先で停止している大原の車に戻つた。

「茜ちゃん、危ないよ」

茜は助手席に乗り込みながら、

「平気ですよ」

「いや、あのやり方は他の人を巻き込むかも知れないから、別の方法が良かつたと思うよ」

「あ」

大原が自分の心配をしてくれたのだと勘違いした茜は、作戦にダメ出しされたのに気づき、ションボリしてしまつた。

「ごめんなさい」

茜が落ち込んでしまつたのを見て、

「あ、いや、何事もなくて良かつた。そんなに落ち込まないで、茜

ちゃん

「はい……」

それでも暗い茜だった。

第七章 黒い救急車再び現る 10月1日午後9時

葵は美咲たちより先に麗奈の事務所があるビルの前に到着していた。

（それにしても、私達が関わったその日のうちに事件が動くとはね。黒幕は後小松のジイさんで決まりだらうけど、理由がわからない）何故後小松院長は黒い救急車の事件を考えたのか？ その点が不明白だ。殺人は誰かに実行させているのだろうから、自分に疑いがかかるない対策は採っているはず。それなのに何故、こんな大掛かりな方法で事件を起こすのか？ しかも連続して？

「もつと何かあるつて事か」

葵がそう呟いた時、麗奈の車が目の前に停まつた。

「所長、早かつたですね」

美咲が運転席から降りるなりそう言つた。

「お久あ、葵。元気そうね？」

すっかり酔いが覚めた麗奈が助手席の窓から顔を出す。

「どうも、麗奈さん。危なかつたらしいですね」

葵は愛想笑いをして応じた。すると麗奈は、

「私は美咲ちゃんに抱かれて死ねるのなら、そこが下水道の中でも

OKよ」

「……」

葵は呆れて美咲と顔を見合せた。

そして事件の黒幕と思われる後小松院長は、何者かと携帯で話していた。

「しくじつただと？ 何をしているのだ！？ 警察は全て抑えていい。心配するな。何としても連中を消せ。事業の邪魔だ」

院長は、美咲達に見せた顔を更に凶悪にしていた。彼は携帯を切り、別の相手にかけ直した。

「私だ。仕事を急げ。相手は一筋縄ではいかん。もちろん、支援は続ける。しかし、今回の失態は必ず埋め合わせしろよ」

院長は携帯を切り、椅子に座った。

「あの弁護士だけでも鬱陶しいのに、探偵までしゃしゃり出て来るとは……」

彼はこいつ隠し撮りした美咲の写真を見た。

「この女、何者だ？」

院長の眉間に深い皺ができる。

皆村刑事は、署に戻っていた。

捜査関係者達は電話の対応に追われていて、オペレーター達はコンピューターと首つ引きで格闘している。まるで野戦病院である。

「今度はどこですか？」

彼は捜査本部がある会議室に飛び込むなり、刑事課長に尋ねた。「まだ情報が交錯している。何者かがテーマを流しているらしくて、現場が特定できていない」

「ええ？」

皆村は意外な返答に驚いた。

「発信元が特定できない密告電話がかかって来ているばかりでなく、署のメールアドレスにも迷惑メールフルダが満杯になるほどの量のメールが送られて来ているんだ」

「……」

皆村は、美咲達の事が気になった。

（そんな事ができる連中と関わつたりしたら、美咲さんが……）

未だに美咲達が自分達より凄腕だと知らない皆村は、本気で美咲の身を案じていた。

そして警察庁に戻った大原と茜は、大原の部屋に行つた。途中、女連れの大原を見て驚く職員達に出くわしたが、大原も茜も一切取り合わず、廊下を進んだ。

「さてと。取り敢えずデータを収集しないとね」

「はい」

大原と茜は、それぞれデスクトップパソコンを起動させた。

「茜ちゃん、パスワードわかる?」

「はい、年中アクセスしてますから」

笑顔でサラリととんでもない事を言ってのける茜に、大原は苦笑いした。

「一応言つておくけど、それ、犯罪だからね」

「はーい」

茜は陽気に応じた。大原は溜息を吐き、

「じゃ、頼むね」

「はーい」

茜は超高速でキーボードを打ち始める。大原は茜の指のスピードに驚いていたが、

「おつと」

と自分もモニターを見て手を動かす。

「何ですか、このメール？ 警察庁のガードを軽々とかわして、鬼のように攻め込んでますけど」

茜が叫ぶ。大原は頷いて、

「前回の事件の時にも、同じ事が起つてるんだ。どうやら大きな組織が動いているようだよ」

「後小松のジッちゃんが、そんな凄い事できますか？」

茜は当然の疑問を口にした。

「そうだね。いくら医療界を牛耳つている男でも、そこまではできないと思つよ。彼はこの事件の関係者の一人に過ぎないかも知れないね」

大原はキーボードを叩きながら言つた。

「どうやら、破壊目的ではなく、混乱目的のようだね。排除を始めた途端、潮が引けるように撤収した」

「引き際が鮮やかです。プロですよ」

茜は大原を見た。

「そうだね。思つた以上に厄介な連中だ」
大原も茜を見て言った。

葵達は、麗奈の事務所にいた。すでに事務員達は帰宅し、彼女達の他には誰もいない。

「相変わらず、メルヘンしてるんですね、麗奈さん」

葵は壁紙を見渡して言った。麗奈は「コーヒーメーカー」の電源を入れて、

「そうよ。私は永遠の少女なの」

とニーッ「リ笑つて言ひつ。そして、

「私達が襲撃されたつて事は、菖蒲も危ないんじゃないの？」

「大丈夫ですよ。菖蒲さんには、無料で動くボディガードがいますから」

葵はニヤツとして答える。美咲は何故かそれを聞いて溜息を吐いた。

「そつか、護君がいるもんね。頼もしい弟だわ」

「どういう訳か、麗奈はクスクス笑つている。

「あいつもお姉さんのガードなんて嫌でしょ」けどね

葵がそう言つと、

「菖蒲のボディガードなんて、誰だつて嫌よ。うるさいし、我が儘だし」

麗奈までそんな事を言い出す。美咲は菖蒲に密かに同情した。

「そうですね」

葵はケラケラ笑つた。そして、

「ここもそろそろ危ないですから、私の事務所に行きますか、麗奈さん」

「そう?」「一ヒーくらい飲んで行けるでしょ?」

麗奈は全然緊張していない。忍びではないが、やはり月一族だからなのだろうか?

「それくらいは大丈夫だと思います」

葵はチラッと美咲を見て答えた。美咲は頷いてドアに走る。

「え？ どうしたの？」

麗奈がそれに気づいて尋ねる。葵は、

「ああ、ご心配なく。まだ敵はこのビルに入った辺りですか？」
「そんな遠くなのに感じるの？」

麗奈は葵達の力に驚嘆した。

「ええ。それが仕事ですから」

葵は笑顔で答えた。

そして噂の菖蒲は、不愉快な顔をして病院の廊下を歩いていた。
「だから姉さん、危ないから俺のところに行こ」
隣を篠原護が歩いている。

「私は、誰かのせいで自分の仕事を邪魔されるのが一番嫌いなのよ。
ここから出たりしないわよ」

「姉さん！」

篠原は菖蒲の前に立ちふさがった。

「どきなさいよ、護君！」

菖蒲が怒鳴る。菖蒲は篠原を睨みつけて、

「私はこれからオペなの。邪魔しないで」

「ダメだって。姉さんがここにいる事で、他の人達にも迷惑がかかるんだからさ」

篠原はそれでも説得を続けた。

「そんな事、貴方が何とかしなさいよ、護君。そのためのボディガードでしょ！」

「……」

さすがに篠原も姉の言動に言葉を失つてしまつた。どうまでも我が儘な姉だ。

「オペしなければ助からない命があるのに、自分の命惜しざに逃げ出すなんて、私にはできないわ」

菖蒲の事をよく知らない人が聞けば、

「医師の鑑だ」

と感激するだろうが、彼女はそれを方便として使っているだけで、本当にそんな事を思つているのではない事を篠原はよく理解している。でも、いくら何を言つても、絶対に自分の言う事を聞くとは思えないウルトラ頑固な姉との不毛な言い合いを諦め、篠原は決断した。

「わかった。そこまで言つなら、俺は外で姉さんを守るよ」

「やつとわかつてくれたのね、護君。さすが、私の弟だわ」

菖蒲は二ツコリして手術室に入つて行つた。篠原は、

「全く、付き合い切れないな」

と咳き、溜息を吐いた。

皆村は、交錯する情報がようやくまとまり、黒い救急車が現れた場所が特定された事を知つた。

「どこなんですか？」

彼はまた刑事課長に迫つた。

「大日本医科大学付属病院だ。からすまあきる鳥丸暁」という外科医が連れ去られたらしい

「大日本医科大ですか。となると、合同捜査本部が立ち上げられますね」

皆村は嫌な予感がしてそう言つた。刑事課長は、

「そつだな。そこはウチの管轄ではない。本庁に捜査本部が移転し、合同捜査本部になるだらうな」

面倒臭くなるな。皆村はウンザリした顔になつた。

(このままだと、美咲さんに情報を伝えにくくなるな)

すつかり美咲の虜になつてゐる事を自覚していない皆村である。

「ホシの足取りは掴めたんですか？」

「まだだ。何しろやつとの思いで現場を解明したところなんだ。何もわかつていよいよ」

刑事課長は苛ついたように怒鳴った。

「取り敢えず、現場に急行し、あちらの所轄と顔合わせしておけ」

「わかりました」

皆村は渋々頷き、署を出た。そして携帯を取り出し、美咲に連絡する。

「あ、神無月さんですか？」

美咲は慌てているようだ。

「ごめんなさい、かけ直します」

「は、はい」

皆村は見えてもいない美咲に向かってお辞儀をし、携帯を切った。

「取り込み中？」

何があつたのだろうと思つたが、女性の事をあれこれ詮索するのは失礼だと考え、美咲からの連絡を待ちつつ、事件現場に向かつた。

美咲が皆村から連絡を受けたのは、ちょうど麗奈の事務所を襲撃しようとしていた連中をなぎ倒した直後だった。

「ここは三人で襲撃か。私のところは一人だったのに」

葵は賊を特殊なロープで縛り上げながら呟いた。

「所長が暴漢をあつさり倒したので、人数を増やして来たのかも知れませんね」

美咲が推理する。

「かもね。でも、増員が少な過ぎたわね」

葵は氣絶している賊を見て言った。

「ホント、美咲ちゃんて強いのねえ。私の専属のボディガードにならな……」

「お断わりさせて頂きます」

麗奈が二口二口して言いかけたのを遮るように葵が拒絶した。

「ひどーい、葵つたら。そんなに即答しなくてもさあ」

麗奈は膨れつ面をした。葵はそれでも、

「麗奈さんのガードは、私がします。美咲には警察とのパイプ役に

なつてもらいますので

「あーん、残念」

麗奈は美咲を見てウインクした。美咲は只苦笑いをするのが精一杯であった。

「さつきの、例の刑事からだつたんでしょう？ すぐにやこの所轄に行つて、美咲。」こには私が引き受けるから

「はい」

美咲は嬉しそうに答えると、サッと駆け去つてしまつた。
「葵つたら、美咲ちゃんを私から守らうとしてるでしょ？」

麗奈は葵を目を細めて睨んだ。葵はニッとして、

「はい。可愛い部下を麗奈さんの毒牙に晒す訳にはいきませんので」「まあ、言つわね。でもさ、私、葵でもいいのよ」

麗奈の言葉に、葵は全身総毛立つた。

「冗談はやめて下さい、麗奈さん」

麗奈はケラケラ笑つて、

「冗談よ。そんな事したら、私、菖蒲と護君に怨まれちゃうから」「護はともかく、菖蒲さんは何とも思わないのでは？ 私、嫌われてますから」

葵は苦笑いして言つた。すると麗奈は楽しそうに笑い、

「とんでもない。あいつ、酔つ払つと貴女の事をベタ褒めするのよ。一度見せてあげたいわ」

「ええ？ 信じられないです」

葵は目を丸くして驚いた。

美咲は走りながら皆村の携帯にかけた。

「『めんなさい、皆村さん。ちょっと手が放せなくて。どうされましたか？』

「現場がわかりました。大日本医科大学付属病院です」

「そなんですか」

美咲はすぐにその病院の場所を頭の中で思い出す。

「今向かっているところなんです。神無月さんはビニールにこりつしゃるんですか？迎えに行きますよ」

「大丈夫です。その病院なら、それほど離れていないので、直接向かいますから」

「そうですか」

皆村の寂しそうな声を聞き、美咲は悪い事をしたかな、と思つたが、

「では現場で」

と言い、携帯を切つた。

（大日本医科大学付属病院か。ここから、十キロ程度ね。七分で着けるかしら？）

彼女は忍び装束に着替え、夜の闇の中を走り出した。

篠原は、大学病院の周辺をうろついていた怪しい連中を全員ボコボコにし、大原を通じて警察に引き渡した。

「結局、姉さんは狙われていなかつたのか？」

篠原は苦笑いをした。

「暴漢にまで嫌われたのかな？」

何とも酷い事を思う弟である。

しかし、そうではなかつたのだ。本当は、葵を襲撃した男と、麗奈を襲撃した連中が、菖蒲を襲撃する予定だつたのだ。つまり、襲撃者がいなくなつてしまつたのだ。これも菖蒲の悪運の強さなのかも知れない。

「どこのどいつか知らないが、とんでもない女達を相手にしている事を知つてゐのかね。可哀想で仕方がない」

篠原は手を合わせて念佛を唱えた。

後小松院長は、襲撃者達がことじとく捕えられてしまつたのを知り、激怒していた。

「何という事だ。話が違うではないか」

彼はイライラしながら、どこかに携帯で連絡をした。

「私だ。お前のところの連中は、全然役に立たんな。言い訳はいい。

我々のビジネスの根幹に関わるのだぞ。何とかしろ。いいな」

後小松は携帯を切り、ソファの上にドスンと腰を下ろした。

「忌ま忌ましい女共だ」

彼は苦虫を噛み潰したような顔で呟いた。

皆村は大日本医科大学付属病院に到着した。

「皆村さん」

思つてもいられない声が彼を呼んだので、皆村は仰天した。

「え？」

声の主を見ると、そこには間違いなく美咲が立っていた。眩しい笑顔で。もちろん、美咲はスーツに着替え直している。

「神無月さん！ 本当に近くにいらしたんですね」

「ええ、まあ」

美咲は苦笑いして言った。

（本当は、皆村さんより遠かっただけどね）

でもそれは言えない。

「取り敢えず、神無月さんは私の部下という事で通しますので、そのおつもりで」

「わかりました」

また苦笑いする美咲。すでに葵が警視総監を通じてこちらの所轄にも手を回しているはずなのだ。でも、皆村に悪いので、彼の作戦に従つ事にした。

皆村は、病院の玄関を入り、捜査員でこつた返しているロビーを進む。彼は美咲がついて来ているか心配で振り返つたが、彼女は行き交う人々を巧みにかわして着実に皆村について来ていた。

（美咲さんて、スポーツ選手だったのかな？）

その機敏な動きは、バスケットボールの選手を思わせた。

「あの、何か？」

美咲が皆村の視線に気づき、尋ねる。

「あ、いえ、別に。人が多くて危ないですから、気をつけて下さい」「はい、ありがとうございます」

美咲はニッコリ微笑んで応じた。皆村は赤面し、また歩き出す。

皆村は担当所轄の刑事に挨拶し、美咲を部下だと紹介した。

「今現在わかつて いる事は、この病院の外科医である鳥丸暁氏からすあきひが連れ去られたという事だけです。それ以上の事は何も……」

皆村もあまり期待していない。自分が後小松総合病院の事件に関わった時も、

「何かの悪戯か？」

と思つたくらいなのだ。まだこの所轄は運がいい。ウチという前例があるから、動きがとりやすいはずだ。上層部を説得する事も必要ない。

「目撃証言は得られていますか？」

皆村が尋ねる。

「はい。看護師の幾人かが、鳥丸氏が黒い隊員服姿の連中に拉致されるのを見ています」

「顔は覆面で隠していたのですね？」

「ええ、そのようです。年齢、性別、国籍、全て不明です」

皆村はデジヤブを見ている気分だった。

（後小松事件と全く一緒だ）

「院長にお話を伺えますか？」

美咲が口を挟んだ。皆村はハツとしたが、

「院長は海外出張中で不在です。外科部長になり話を訊けますよ」と答えが返つて來たので、困惑した。

（あれ？）

何となくではあるが、こここの担当者と美咲が、顔見知りのような気がした。

（まさかね）

美咲は謎が多い女性だが、警察にコネクションがあるとは思えない。

（大原が動いたのか？）

それなら自分のところにも大原から連絡があるはずだ。

「こちらです」

皆村と美咲は、外科部長がいる部屋へと案内された。

葵は麗奈の車で葵のマンションへと向かっていた。

「別に葵が一緒なら、事務所でも大丈夫なのに」

助手席で甘えた声を出す麗奈に苦笑いしながら、

「私のマンションの方が安全です。それに、美咲も茜も、そのうち集合しますので」

と葵は答えた。

「あらん、美咲ちゃんが来るの？ それを先に言つてよ、葵」

こんな姿を見たら、麗奈のクライアントは彼女の事をどう思つだろうと葵は考へてしまつた。

「あれ？」

地下駐車場に乗り入れると、見慣れた白のワンボックスカーが目に入った。

「どしたの？」

葵が憂鬱そうな顔になつたので、麗奈が尋ねた。

「護が来てます」

「そつなんだ。私、お邪魔？」

麗奈のその言葉に葵は、

「いえ、護だけならいいんですけど」

「ああ」

麗奈は葵の憂鬱な顔を了解した。菖蒲が同乗して来ているのだ。

「まあ、追い返す訳にもいかないわね」

麗奈は苦笑いする。葵は肩を竦めて、

「そうですね」

一人は車を降りると、エレベーターホールに向かつ。

「先に行つてるのかしら？」

「多分、ドアの前で仁王立ちして、『遅いわ、葵！』とか言われそ

うです」

葵がそつ言つと、麗奈はゲラゲラ笑つた。

「田に浮かぶ」

嬉しそうだ。

（麗奈さんて、菖蒲さん以上あやめのドSだな）

葵は含み笑いをして、エレベーターのボタンを押した。

その頃、大原と茜は警察庁を出ていた。

「そろそろ水無月さんのマンションに行つた方がいいんじゃないかな？」

大原が車を通りに進ませながら言つと、茜は、

「まだ早いですよ。今行つたりしたら、菖蒲さんだけいるような気がするんです」

茜が菖蒲という女性を怖がつてているのはわかつたが、どうして怖いのかは大原にはわからない。

「篠原さんのお姉さんて、そんなに怖いの？」

「ええ、それはもう」

茜は身震いして見せた。

「一度会つてみたいな」

「あの人、男の人には天使のよつたな笑顔で接するんです。気をつけて下さいね」

茜が妙に力を入れて言ったので、大原は、

「どうして？」

と尋ねてみた。茜は顔を赤くして、

「大原さんが菖蒲さんに誘惑されちゃうと嫌だから……」

最後の方は、聞き取れないくらい声が小さくなつた。大原は大笑いして、

「大丈夫。僕は茜ちゃん一筋だから」

「……」

大原のその言葉に、茜は顔が爆発しそうだった。

「葵、遅いわよ。私、ここで餓死するかと思ったわ」

マンションのドアの前で、葵が予想した通りの反応をした菖蒲を見て、葵と麗奈は笑いを堪えるのが大変だつた。

「何がおかしいのよ、葵？ 貴女まで何よ、麗奈！」

剥れる菖蒲を見て、とうとう弟の篠原まで笑い出してしまつ。

「あなた達、後で覚えてなさいよ」

菖蒲はカンカンになつて言い放つた。

「どうぞ、お入り下さい、菖蒲さん」

葵は笑いを堪えながら、ドアのロックをカードキーで解除した。

「全く！ 護君！」

まるで古代エジプトのクレオパトラのよつて、菖蒲は篠原にドアを開けるように命じた。

「はいはい」

篠原も逆らわずにドアを開く。

「失礼」

葵は菖蒲を追い抜いて、部屋の明かりを点け、奥へと走つた。

「また黒い救急車が現れたらしいな」

玄関で靴を脱ぎながら、篠原が言った。

「みたいね。今、美咲が現場の病院に行っているわ」

「さすがに早いな」

篠原はニヤリとして葵に近づく。

「イチャつるのは、私達が帰つてからにしてね、護君」

菖蒲の強烈な嫌味が放たれる。

「姉さん！」

篠原はムツとして菖蒲を見た。しかし菖蒲はそれを無視して、「葵、何か食べるものある？ 手術が長引いて、お腹ペコペコなのよ」

「ありますよ」

葵はにこやかな顔で応じた。

「貴女達がモタモタしていたから、また次の犠牲者が出てしまったわ。反省しなさい、葵」

菖蒲の話は暴論である。葵達が事件に関与してから、まだ二十四時間も経っていないのだから。

「無理言つなよ、姉さん。まだ警察だつて何も掴んでいないんだぞ」篠原の正論も、菖蒲の前では何の役にも立たない。

「そんな事は関係ないわ。葵達は、警察より能力が高いのだから、警察に遅れをとつてはいけないのよ、護君」

相変わらずの「護君」の連発で、篠原はウンザリ顔だ。

「申し訳ありません、菖蒲さん。金村さんを殺害した犯人は、必ず捕まえますので、もう少し待つて下さい」

「……」

金村の名前が出た途端、菖蒲の口が動かなくなつた。麗奈がクスッと笑う。

「ねえ、美咲ちゃんはいつ来るの、葵？」

その声に菖蒲が反応した。

「まだそんな事をしているの、麗奈？ 一度心療内科を受診しなさい」

「ありがとう、菖蒲。でも私は至つて健康だから、心配しないで」

麗奈のお恍けに菖蒲はムツとし、

「女なのに、女が好きっていう事自体が、病気なのよ。もつと真剣に自分と向き合いなさいよ」

「はいはい」

麗奈は肩を竦めた。菖蒲にかかれば、どんな人間も「病気」にされる。それでも葵は、麗奈は本当に一度診てもらった方がいいと思っていた。決して同性愛者を否定するつもりはないが。

美咲と皆村は、外科部長室に案内されていた。

「私が外科部長の八幡原栄伍です」

机の向こうに立っている細面の男が言った。五十代くらいだろうか？

「少々お尋ねしたい事があるのですが」

皆村が言い出す前に、美咲が口を開いた。

（いつの間にか、俺が美咲さんの部下みたいだな）

それはそれで悪い気はしないので、皆村は何も言わずにいた。

「わかりました。どうぞ、おかげ下さい」

二人は机の前にあるソファに並んで腰を下ろす。『ぐく自然の行為なのだが、皆村は隣に美咲がいるのを改めて実感し、ドキドキしていた。

「連れ去られた鳥丸さんの事なのですが、どんな方ですか？」
美咲はメモ帳を取り出して八幡原部長に尋ねた。八幡原は美咲達の向かいに腰を下ろしながら、

「真面目で、仕事熱心な男ですよ。まだ三十代ですが、患者の評判も、看護師達の評判も上々で、将来有望ですね」

八幡原は、鳥丸医師を褒めちぎっているが、その顔は真実を語っているように見えない。美咲は不信に思っている。

「鳥丸さんは、医療ミスとか起こした事はありませんか？」

美咲のその質問に、八幡原は一瞬露骨に嫌な顔をしたが、すぐに穏やかな笑みを浮かべ、

「いえ。彼は優秀です。医療ミスなど起こした事はありません」と言い切った。美咲は確信した。

（鳥丸医師は、何か弱みでも握られているのかしら？　どうもこの部長、胡散臭い）

「そんな事を訊くなんて、まさか刑事さん達、あの都市伝説を信じているのではないでしょうね？」

八幡原がバカにしたような顔で美咲を見る。皆村がムツとして身を乗り出すると、

「まさか。あんなバカげた話、信じる訳ないです。話としても、三流ですから」

美咲が皆村を制するように強い調子で否定した。

「それは良かった。やはり、刑事さんは、我々医者と同じで、理性的で、現実的でないといけない」

八幡原はニヤリとして応じた。美咲も作り笑いをした。

「それにしても、八幡原さんがあの都市伝説を存知とは思いました。どこでお知りになつたのですか？」

美咲のその言葉に、八幡原はギクッとしたようだ。

（こいつ、何か知つているな？）

少なくとも、黒い救急車の都市伝説は一般紙には掲載されていない。警察も記者会見でその事に触れていない。そんな知識があるとすれば、インターネットで調べたか、事件の関係者かしかないのだ。もちろん、病院の横の繋がりで知つてている可能性もあるが、先程の八幡原のリアクションは、

「私は関係者です」

と言つてゐるのと同じだった。

「ハハハ、息子がインターネットで調べて、教えてくれたのですよ。後小松先生の病院の事件も、聞き知っていますしね」

八幡原は、そんな言い訳にしか聞こえないような事を言いながら、汗まみれになつていた。

「ほお、なるほどね」

皆村は凄みを利かせた顔で八幡原を睨み、頷いてみせた。八幡原はスッと身を引いた。

美咲と皆村は、何かあつたら連絡するよつて言いおき、外科部長室を出た。

「何か知つてますね、あのオヤジ」

皆村が前を向いたまま言つた。美咲は頷いて、

「ええ。でも、多分断片的な事しか知らないと思います。それに、あまり問い合わせると、消されてしまうかも知れません」

「えつ？」

皆村はビクッとした。

「どういう事ですか、神無月さん？」

思わず美咲の方を見た。すると、彼女の顔は皆村の顔からほんのわずかの距離にあつた。

「あつ！」

皆村は慌てて離れる。

「実はですね」

美咲はどうしようかと迷つていたのだが、皆村に暴漢の話をした。

「そ、そんな！」

皆村は驚きのあまり、そのまま氣を失いそつだつた。

「大丈夫なんですか、神無月さん？ 銃で狙撃されたつて、どうして自分に言ってくれなかつたんです？」

「申し訳ありません」

美咲が深々と頭を下げたので、また慌てる。

「あ、いや、別に自分は貴女を責めている訳ではなくてですね……」

「大原さんがいたので、大原さんに言いました」

美咲はバツが悪そうに言い添える。大原の名を出されでは、それ以上何も言えない。

「し、しかし、もう危険ではないですか？ これ以上関わらない方がいいですよ、神無月さん」

皆村が真剣に美咲の事を心配してくれているのはよくわかつてい

た。しかし、この事件は根が深い。仮にここで手を引いたところで、連中は見逃してくれないだろう。いや、それよりも、菖蒲が何を言いい出すかわからない。どちらかというと、暴漢達より菖蒲の方が気がかりな美咲である。

(どうしよう？ 全部話してしまった方がいいのかしら？)

美咲は悩んだ。こんな時ばかりは、あまりよくよく考えずにズバツと行動してしまった葵や茜の性格が羨ましくなる。

「神無月さん？」

皆村は、美咲が黙り込んでしまったので、機嫌を損ねてしまったのかと思い、アタフタしていた。

「あ、ごめんなさい、考え方をしていました」

美咲は決まりが悪そうに微笑んで皆村を見た。皆村は美咲が怒っているのではないのを知つてホッとした。

「あの、お話があるので、お時間大丈夫ですか？」

「え？」

皆村はドキッとした。

(な、何だ？ 今度は何だ？)

美咲が只の探偵ではない事を薄々は感じている皆村であるが、彼女の正体を知りたい反面、知りたくないとも思つてしまつ複雑な感情が彼の中では渦巻いていた。

美咲は病院の端まで皆村を誘導し、周囲に誰もいない事を確かめてから、

「実はですね」「
と話し始めた。

美咲の話は、皆村には衝撃が強過ぎた。か弱い女性を守ろうと必死になつて動いていた皆村は、自分がとんだ道化だったと感じたのだ。

「今まで黙つていてごめんなさい。許して下さい」

美咲はまた深々と頭を下げた。

「いや、そんな事しないで下さい。自分は全然気にしていませんか

「ら

それはウソだ。しかし、皆村は美咲に対して怒りを感じたりはしていない。確かに自分は道化だったかも知れないが、それは美咲がそう仕向けた訳ではなく、皆村自身の勝手な思い込みから始まっている事なのだ。

「では、今まで通り、協力して頂けるのですか？」

美咲はまた「悪魔のウルウル」を無意識のうちに発動していた。

「も、もちろんです。当たり前じゃないですか」

皆村は辛うじてその「ウルウル」を見なかつたので、命拾いした。

「ありがとうございます、皆村さん」

美咲がギュッと手を握つて來た。皆村は卒倒寸前だつた。

皆村秀一は、眠れぬ夜を過ごした。

神無月美咲。すでに皆村の中では半ば神格化した存在の女性。その彼女が、実は忍びの一族で、あの傲慢極まりない女医の依頼で、黒い救急車事件を調査していると知り、彼はショックを受けていた。それはいい。美咲と一緒にいられる口実ができる。そして彼女は自分を頼りにしてくれている。

だが、皆村は不安だった。

（もしかして、俺の方が美咲さんの足手まといではないだろうか？）

彼も警視庁の所轄の人間である。伏せられていはいるが、アフリカの小国イスバハン王国の王族が絡んだ事件、そして内閣官房長官まで関わっていた改進党代表誘拐事件。その二つの事件に大きく関わり、解決したと噂の探偵事務所がある話は耳にした事がある。美咲はその事には言及しなかったが、警視庁そのものを動かし、警察庁の大原とも繋がりがある以上、彼女達がその探偵だというのはまず間違いないだろう。

（そんな美咲さん達と俺なんかが一緒に行動していくいいんだろうか？）

僻みではなく、そう思つ。

「えつ？」

その時、携帯が震えた。

「はい、皆村」

それは合同捜査本部からだつた。黒い救急車に連れ去られた鳥丸^{あきら}の遺体が、大日本医科大学付属病院から程近い公園の滑り台の上で発見されたと。

「すぐに行きます」

皆村は無精髭もそのままで、警察寮を飛び出した。そして携帯で

美咲に連絡した。彼女から、例え何時でも構わないの、何があつたら連絡を下さいと言われているのだ。

「はい、神無月です」

美咲はワンコールで出た。起きていたのか？

「朝早くにすみません。鳥丸医師の遺体が発見されました。現場は

……

皆村は走りながら美咲に伝える。

「ありがとうございます」

携帯が切れた。もう少し話していたかつたと愚かな事を考えながら、彼は署の中に飛び込んだ。

「早いな、皆村。お前が一番だ」

夜通し連絡係をしていた先輩刑事が眠そうな顔で出迎えた。

「では、現場に向かいます」

皆村は車のキーを掴むと、駆け出した。

「元気ねえ、美咲は」

葵はリビングルームで一晩中菖蒲の小言を聞かされ、ヘロヘロだつた。美咲は苦笑いして、

「私は直接の被害者ではありませんから。何かわかりましたら、すぐ連絡します」

「ええ。頼むわ」

葵はそう言うと、またソファに倒れ込んだ。

「では、行つて来ます」

美咲はバッグを持ち、部屋を出た。

「あんたもいい加減出かけなさいよ」

葵は向かいのソファで同じようにへ口へ口になつている篠原に言った。

「いや、今日は休暇とつた。葵の介抱をするよ」

「パカ！」

菖蒲は言いたい事だけ言つと、麗奈を無理矢理連れ出し、帰つて

行ってしまったので、同じように連れ立つて帰ってしまった茜達もないため、今は「一人きりなのだ。

「あんた、こんな状況を利用して、私を襲うつもりじゃないでしょうね？」「

「あれ、襲つて欲しい訳？」

篠原がニヤリとする。葵は顔を赤くして、

「殺すわよ、つまらない冗談言つと…」

「お前に殺されるなら本望だよ」

篠原は菖蒲がいないといつもの「スケベ」に戻つてしまつ。

「菖蒲さんのがいた方が、あんたが大人しくていいわね」

「じゃ、呼び戻そつか、姉貴を？」

篠原が携帯を取り出すと、

「やめてよ、嘘に決まってるでしょ…」

葵は慌てて篠原の携帯を取り上げた。

「ところです」

「何…？」

葵は携帯を投げつけるように篠原に返す。篠原はそれを難なく受け取り、

「茜ちゃん達、どうしたのかな？」

「そんな事気にしてどうするのよ？」

葵は立ち上がった。篠原は葵を見上げて、
「羨ましいなと思ってさ」

「何が？」

葵はバスルームに歩き出す。それに気づいて篠原も立ち上がる。

「今頃どこかのいいところです…」

「大原君は、あんたと違つて一年中発情しないわよ…」

葵は振り向き様に怒鳴つた。篠原は肩を竦めて、

「人間は一年中発情してるんだぜ、知らないのか？」

「それはごく一部でしょ！ 大抵の人は、理性で抑えているのよ…」

葵が勢い良くドアを閉じる。そして聞こえる、カチヤツという口

ツクの音。

「おーい、一緒にシャワーしないのかよ？」

篠原が遙か遠くにいる人に話しかけるような声を出す。

「誰と、誰が？」

葵の怒りに震える声が尋ね返す。

「俺と、お前が」

「あり得ない！」

篠原はフツと笑い、リビングルームに戻った。

そして如月茜。彼女は、葵のマンションを大原と出た後、大原にアパートまで送つてもらった。彼女はドキドキしていた。しかし……。

「じゃ、お休み、茜ちゃん」

大原は爽やかな笑顔で帰つてしまつた。

「……」

呆然と見送つた茜だが、

「大原さんて、鈍感なのかな？」

と前向きに考えた。

美咲からのメールで事件の進展を知つた茜は、大急ぎで事務所に向かつた。そして、大原の携帯に連絡を取る。

「大原さん？ 黒い救急車の事、聞いてます？」

大原ももちろん、警視庁を通じて情報を得ていた。

「じゃ、また」

茜は頭を仕事モードに変換した。

皆村は現場に到着していた。さすがに今日は美咲はまだ来ていないようだ。

彼は遺体発見現場に案内された。

「遺体は、公園のベンチの上に仰向けの状態で遺棄されていました。死亡推定時刻は明け方の五時から六時頃。死因は鋭利な刃物による

失血死です」

昨夜顔を合わせた担当刑事が説明してくれる。

「拉致してから時間が経過していますね。すぐに殺していないのは、我々の担当している事件と同様ですね」

皆村は忙しく動き回る鑑識課員達を眺めながら言った。

「現在大日本医科大学付属病院にも捜査員を派遣して、関係者の事情聴取をしています」

担当刑事は更に説明した。皆村は担当刑事を見て、

「犯人の遺留品は?」

「発見されていません」

「そうですか」

自分の担当している事件でも、何も遺留品は発見されていない。

「それにも」

その担当刑事は呟くように言つ。

「犯人の目的は何なのでしょうね」

「ええ」

皆村にもそれは最大の謎であった。皆村は現場を見回している時、美咲がいるのに気づいた。

（あれ、美咲さん、来ていたのか？）

美咲は皆村より先に来ていた。それも、大原と共に。

（美咲さんて、大原と？）

いや、確かに大原は子供みたいな女と連れ立つていたはずだが？

皆村は頭が混乱した。

「ああ、皆村さん」

美咲と大原も皆村に気づき、近づいて来る。皆村は担当刑事に会釈して美咲達に近づいた。

「おはようございます」

大原は鰐張る皆村を見て笑いを堪えていた。

「お、おはようございます」

「おはようございます」

美咲は別に皆村の様子の異変に気づく事なく、笑顔で挨拶した。

「何も出ないようですね」

大原が残念そうに言つた。皆村はもう一度現場を見渡して、

「ああ。何を考えているのかわからない犯人だからな」と呟くように言つた。すると美咲が、

「犯人が考えているのは事件の真相を知られないようにする事だと 思います」

「えつ？」

美咲は一人を見ながら、

「これだけ大掛かりな事をして事件を起こすという事は、どう考へても何かを知られたくないからです。私達は何か大事な事を見落としているのかも知れません」

皆村は思わず大原と顔を見合わせる。

（彼女は何かに気づいたのか？）

皆村は、美咲の考えを聞いてみたくなつた。

皆村と大原が同時に美咲を見た。

「もう一度後小松総合病院を調べてみます」

美咲はそう言つと皆村と大原に会釈し、立ち去つた。

「何、だよ、お前、美咲さん狙いなのか？」

皆村は美咲を見送りながら大原に囁く。大原は苦笑いして、

「どんでもない。僕は大人の女性は苦手なんです」

「え？」

皆村は驚いて大原を見た。

「お前、そういう趣味なのか？」

「そういうつて、どういう事ですか？」

大原は不思議そうな顔で皆村を見ている。

「あ、いや、何でもない」

そう言いながらも、確認しておきたかったので、

「お前はあの子供みたいな子と付き合つてるんじゃないのか？」

「そのつもりなんですけど。僕は遊ばれているのですかね？」

大原は大真面目な口調で言つ。皆村は呆れ顔で、「子供に遊ばれちゃあ、お前もおしまいだな」

「ハハハ」

大原は陽気に笑つた後で、「皆村さん、あまり彼女の事を悪く言わないで下さいね。普段温厚な僕も、怒つてしまりますよ」

と急に真顔で言つ。皆村はビクッとした。大原の腕前は知つているからだ。

「わ、悪かつたよ。お前が羨ましくて、ついいじめたくなつたんだよ」

皆村は頭を搔いて言い訳した。大原はフツと笑つて、「心配しないで下さい。美咲さんを狙つたりしませんから」

「あ、あのなあ……」

皆村が何か言い返そうとした時、大原の携帯が鳴つた。茜からだ。

「失礼」

大原は携帯で茜と話しながら歩いて行く。

「けつ」

皆村は鑑識の仕事が終了したのを確認し、近づいた。

「皆村さん」

大原が後ろから声をかける。

「何だ?」

鬱陶しそうに振り返る皆村。大原は嬉しそうな顔で、「神無月さんを狙つてているのは、僕の知つているだけでも、外務省と国会にもいますよ」

「え?」

意外なライバルの多さに、皆村はギョッとした。

「それじゃ」

大原は敬礼して立ち去つた。

美咲は事務所に戻つていた。

「おはよー、茜ちゃん」

「おはよー」さーします、美咲さん」

「コーヒーの香りがフロアに立ち込めてる。

「どこに行つてたんですか？」

「ええ、現場にね」

「え？」

茜はまたおかしな妄想を始めそうになり、それを頭の中から追いで出した。

「そう言えば、大原さんに途中で会つたわ」

美咲は茜が自分と大原の事を疑つているのを察知していたので、

そう付け加えた。後で知られて、

「隠していた」

とか言われて困るからだ。

「そ、そうですか」

茜はドキドキしていた。

（やつぱりそうなのかな？）

「皆村さんもその後に来たわね」

「皆村つて、あの感じが悪い刑事ですね」

茜はどつともあの刑事とは馬が合わないと思つている。

「ちょっと顔が怖いけど、別に嫌な人ではないわよ」

美咲は苦笑いしてフォローした。だが、皆村が聞いたら、ショック死してしまうだろう。

「そうですかあ？」

茜は同意しかねるという顔だ。

「あいつ、私の事バカにしてましたよ」

茜は剥れた。美咲は微笑んで、

「そんな事ないわよ。茜ちゃん、考え過ぎよ」

「そうですかあ？」

茜はそうだと思わない時に「そうですかあ？」を連発するのによくわかつていたので、美咲は話題を変えた。

「所長から連絡あつた？」

「いえ、まだですよ」

茜はポンと手を叩いて、

「美咲さんが所長のマンションを出る時、篠原さんて、まだいまして？」

「いたけど。それが何か？」

美咲には茜の質問の意図がわからない。

「なーるほどお、そういう事ですか」

妙に嬉しそうな茜を見て、美咲はよつやく彼女の「邪推」がわかつた。

「また変な事想像してると、茜ちゃん？」

顔を赤らめながら言う美咲を、茜は面白がり、

「美咲さんこそ、何を想像したんですか？ 私は別に何も言つてないですよ」

「し、知らない！」

美咲はプリプリと顔を背けて、自分の席に座つた。

「美咲さんのそういうところが、アホな男共にはいいらしいんですねえ」

「どういうところ？」

美咲はプリプリしたままだ。茜は悪戯っぽく笑い、「美咲さんの可愛いところですよ」

その言葉にまた赤くなる美咲。

「もう、茜ちゃんたら、私をからかうのが好きなんだから！」

「ああ、こめんなさい、美咲さん。そんなつもりじゃないですよお」
美咲がムツとしたままパソコンを起動させたので、茜は慌てて詫びた。

後小松謙蔵は、また何者かと携帯で話していた。

「警察は抑えているはずなのに、何故動いている連中がいるのだ？」
相手が何か言つていて、

「言い訳はいい。私の力を見くびらないでもらいたいな。国會議員の一人や二人、辞任させる事など、雑作もないのだぞ」

後小松は怒りのあまり、額に血管を浮き上がらせていた。

「仕事を急げ。何ならマスコミに意図的に誤情報を取り入せる。

私が潰れる時は、あんたも潰れる時なのだぞ、よく覚えておけ」

後小松は相手が話を終えないうちに携帯を切つてしまつた。

「使えない連中だ」

後小松は携帯を叩きつけるようにソファに投げた。

葵は篠原の「アプローチ」を振り切り、事務所に着いた。

「お疲れ、一人共」

葵がそう言ってフロアに入ると、

「所長じゃ、お疲れだつたんじゃないですか？」

茜がニヤニヤして言う。葵はバッグを自分の机の上に置きながら、

「ああ、菖蒲さん？ ホント、疲れるわ、あの人」

「違いますつて。その後ですよ」

茜が尚も言う。美咲は顔を赤らめてモニターを見たままだ。

「その後つて、何？」

葵はお惚けではなく、本氣で尋ねた。

「嫌ですよお、私に言わせないで下さい」

茜の嬉しそうな顔と美咲の恥ずかしそうな顔を見て、葵はようやく合点がいった。

「ええ、そうね。大変だったわ、もう。腰が抜けるかと思ったわ

「ええええー!?」

そんな解答を期待していなかつた茜は、顔を真っ赤にした。彼女も所詮は美咲と同じで、「耳年増」なのだ。葵から見れば、「子供」である。

「茜こそ、大原君とはどうだったのよ？」

「い？」

思つてもいない反撃を食らい、茜はオロオロした。すると美咲ま

で、

「そうかあ。茜ちゃんも熱い夜を過いしたのね」と突いて来る。

「や、辞めて下さい、お一人共！ 大原さんはそんな人じゃありませんてばあ」

涙ぐんで反論する茜を見て、葵と美咲は顔を見合せた。

「さてと。バカ話はこれくらいにして、事件の調査を本格的に始めるわよ。相手はこっちを敵と看做したのだから、私達も本気で行くからね」

葵が美咲と茜を見て言つ。

「はい、所長」

美咲と茜は葵を見て返事をした。

その男は苦り切つた顔で椅子に沈み込んでいた。男の名は橋沢龍一郎。与党進歩党総裁にして、日本国のお相手である。彼は以前、葵達月一族に自分の計画を潰され、敵対勢力である星一族を利用して復讐をしようとしたが、その星一族に逆に利用されてしまった。そして、今度は進歩党の支援者の一人である後小松謙蔵の頼みで各方面に圧力をかけたが、まるで機能していない。

「あのジジイ、相手がわかつていなか……」

彼は椅子の肘掛けをガンと叩き、歯軋りした。

「相手があの女達だと知っていたら、手を貸したりしていなか……」

いくら傲慢で有名な橋沢首相でも、一度も酷い目に遭えば、葵達とやり合おうなどとは思わない。

「岩戸の爺さんを通じて、形だけでも詫びを入れて、戦線を離脱しないと、私の政治生命が危ない」

彼は、葵達月一族がどれほどの存在なのか、骨身に沁みて理解していた。

「欲の皮の突つ張つた老いぼれと心中するつもりはない」

その言葉を聞けば、後小松謙蔵は、

「お前には言われたくない」

と反論するだらう。

「最高顧問につないでくれ」

橋沢首相は、インターフォンに言った。

「後小松総合病院の時と同じですね。最有力容疑者にアリバイがあります」

美咲が皆村からの情報を葵に報告した。

「大日本医科大学付属病院の外科部長である八幡原栄伍氏は、烏丸氏が連れ去られた時、現場にいました。多くの医師や看護師が彼を

目撃しています」

美咲は続けた。

「鳥丸氏は、何度か医療ミスで患者を死亡させていて、それを八幡原氏の力で握り潰してもらつたために、まさにアゴで使われて、同僚には『殺したい』と言つていたそうです」

「殺^やられる前に殺つてしまつて奴かな？」

葵は眉をひそめる。美咲は頷いて、

「その可能性が高いからこそ、アリバイも高く確実なものにしているのでしょうか？」

葵は腕組みをして、

「またそれか。有力容疑者には、アリバイ。それで、死亡推定時刻にはその外科部長はどこにいたの？」

「鳥丸氏が担当するはずだつた手術を執刀中でした。これも完璧なアリバイです」

葵は肩を竦めた。

「わかり易過ぎて、バカらしくなつて来るわ。犯人は他にいるつて事よね」

「その可能性も高いですね」

美咲の意外な返答に葵は目を見開き、

「フーン。美咲には、他の犯人像も見えてるつて事？」

「見えているというか、この事件、あまりに不自然なので……」

美咲は資料を捲りながら、

「これだけ大仰な仕掛けを施していくながら、最有力容疑者ははつきりしていて、その上鉄壁のアリバイに守られています」

「そうねえ。三流の推理小説だつて、もう少し読者にわからないよう筋立てするわよね」

美咲は葵の言葉に大きく頷き、

「そこなんです。この不自然さは、意図的なものなのか、偶然の産物なのか、わからないんです」

「なるほどね」

葵は、推理力と分析力では、美咲には敵わないと認識している。

「あんまり難しい話で盛り上がらないでくださいよお、お二人共」

茜が口を尖らせたままでコーヒーと紅茶を運んで来た。

「あら、相思相愛の茜さんには、この事件、どう見えるのかしら?」

「何ですか、その、相思相愛って?」

「あれ、意味わからなかつた?」

葵が更に追い討ちをかける。美咲は呆れて一人のやり取りを見ていた。

「そうじゅありませんよお。私と誰が、相思相愛なんですかあ?」

茜は頬を紅潮させて、わざとらしく尋ね返す。葵は「マーッ」として、

「大原君に決まつてるじやないの。だつて、彼、大人の女性は苦手なんでしょ?」

茜はムツとして葵から離れ、美咲に紅茶を渡すと、

「大原さんは口リコンじゅあります! それと、私も子供じゅありません!」

と葵を睨みつけてから、スタスターと給湯室に行つてしまつた。

「所長、からかい過ぎですよ」

美咲が窘めると、

「貴女がいつも茜に甘いから、今日ばビシッと書つてあげたのよ」

「ホントですか?」

美咲は目を細めて葵を見た。葵はニヤリとして、

「まあ、そんな事より、次に狙わそうな病院を予測してみましょ。」

「これ以上事件が続くと、私が菖蒲さんに殺されちゃいそまだから」

「それはないのでは? 菖蒲さんが所長を殺害する事はできないと思ひますよ」

美咲が大真面目な顔で言つたので、葵は大笑いしてから、

「菖蒲さんが私を殺すとしたら、言葉で殺すでしょ? だから、証拠が残らないわね」

「もう！ 真面目に考えて下さー」

美咲は頬を膨らませて言つた。そして、

「それより、麗奈さんは大丈夫なんですか？」

「あら、心配？」

葵が嬉しそうに尋ねたので、美咲は、

「違いますよ！ あの人も狙われているんですよー？」

と強い調子で言い返した。

「それなら、ボディガードをつけたから大丈夫

「え？」

美咲はそれが誰なのか気づき、ハツとした。

「でもそうすると、菖蒲さんが……」

「それも平気。私達を始末するのは、おおっぴらにするつもりはないよ」だから、菖蒲さんのガードも護がするわ

「ええ？ 麗奈さんと菖蒲さんを同時にガードするなんて、無理ですよ」

「それができるんだなあ、護には」

葵が妙に嬉しそうに言つたので、美咲はキヨトンとしてしまつた。

「酷いわ、護君たら。私を病人扱いしてえ」

心療内科の受診を終えて、診察室から出て来た麗奈は、廊下で待つていた篠原護に言つた。

「護君はやめて下さいよ、麗奈さん。その呼び方、ゾッとするんです」

篠原は真顔で言つ。麗奈はクスッと笑つて、

「なあらほじお。菖蒲がそう呼ぶんだつけ。じゃ、何て呼べばいい？」護？」

「あ、いや、それも……」

「ああ、そつか。これは葵の呼び方よね。じつじよへ、呼び方がないわ」

麗奈はわざとらしく困った顔で篠原を見上げる。

「護でいいですよ。苗字で呼ばれるのも、何か違和感あるし」

「ありがと、ま・も・る」

麗奈は篠原の左腕にスッと自分の右腕を絡ませた。

「え？」

ギクシとする篠原。

（おいおい、麗奈さんて、女が好きだつたんじゃないのかよ？）

「あら、護。何を怯えてるのよ。私は別に貴方に襲いかからうなんて思っていないわよ」

「はあ……」

姉以上に疲れそうだ、と思つ篠原であつた。彼は麗奈の腕を振り解くと、

「それから、ここへ連れて來たのは、姉の依頼なんですからね。俺が麗奈さんを病氣だつて思つてる訳じやないですから」

「それと、護衛の問題もあるんでしょ？」

麗奈は真顔で言った。篠原は頷き、

「そうです。本当は、美咲ちゃんが葵がつべべきなのでしょうけど、いろいろと事情があるんですよ」

「私のせい？」

「わかつているのなら、護君に大人しく従つていなさい」

突然菖蒲がそこに現れた。ここは菖蒲が勤務する大学病院である。現れて当然なのだ。

「うるさいわねえ、菖蒲。あんたのせいで、私と美咲ちゃんとの楽しい一時が失われてしまったのよ！」

「お黙りなさい、麗奈！ 楽しいのは貴女だけで、可哀相な美咲には拷問同然なのがわからないの？」

「！」、拷問？

麗奈の眉が釣り上がった。

「貴女ねえ……」

麗奈が反論しようとすると、

「忙しいので、病氣の貴女とはこれ以上付き合つていられないの。

また後でね、護君」

と菖蒲は立ち去ってしまった。相変わらず台風のよつた女だ、と麗奈は思い、溜息を吐いた。

「後小松を訴える前に、あいつを訴えようかしら」

「協力しますよ、麗奈さん」

篠原が楽しそうに言った。麗奈は思わず噴き出し、

「可哀相なお姉さんねえ、菖蒲は」

「俺はそれ以上に可哀相な弟ですよ」

篠原はニヤリとして返す。麗奈は苦笑いして、

「そうかもね」

と言つてから、

「それより、また犠牲者が出たんでしょう？ どうなつてゐるのよ、あの事件？」

「俺もいろいろ探つてはいるんですが、どうも妙な連中が動いているようで、難しそうです」

「妙な連中？」

麗奈が篠原を見上げた。篠原は麗奈を見て、

「テロリストです」

「テロリスト？」

さすがに怖い物知らずの麗奈もビクッとした。

「何が目的なのか、見当がつかないんです。後小松とテロリストって、接点がない気がして」

「そうね」

麗奈は腕組みをし、

「もう一つ気になつてるのは、金村医師と今度の犠牲者の鳥丸医師との関係ね。全くつながりがないみたいね」

「ええ。まさかとは思いますが、模倣犯の可能性もありますね」

「黒い救急車まで造る模倣犯？」

麗奈が呆れ気味に問い質す。篠原は肩を竦めて、

「もしかすると、救急車はレンタカーで、それぞれ関係のない犯人

が借りただけとか？

「葵に怒られるわよ、譲。眞面目に考えなさいよ」

「はい」

篠原は頭を搔いた。

葵と美咲は、都内にある病院を検索していた。

「内部で揉め事が起つていて、何かありそなとこりつて言つても、難しそうね」

葵がモニターから顔を放して言つ。美咲はマウスを操作しながら、「そうですね。物量作戦で行きますか？」

「そうね」

美咲は常時利用している情報屋達に一斉にメールを送つた。

「昨日みたいにお手上げの返事ばかりでは困るけど」

葵が呟く。美咲もそれを心配していた。情報屋は、自分の身に危険が及ぶような事は決してしない。報酬をばずんでも、動いてくれない場合もあるのだ。

「あ！」

葵は自分の席に戻りながら、大声を出して立ち止まつた。

「な、何ですかあ、いきなり？ ビックリさせないで下さいよお」カップを片付けていた茜は、危うくトレイから落としてしまいそうになつた。

「黒い救急車つて、医療ミスをした医師を連れ去りに来るのよね？」葵は茜の抗議を完全に無視して美咲を見た。

「ええ。でも、それは直接は関係ないのでは？」

美咲も葵の意図がわからず、キヨトンとしている。

「医療過誤のエキスパートがいるでしょ、知り合いでー。」「ああ！」

そこまで言われて、美咲は合点がいった。しかし、茜は、「何の事？」

と首をかしげたまま、トレイを抱えて給湯室に歩いて行く。

「麗奈さんに確認してみて。第一の殺人事件の犠牲者の鳥丸氏が、接触して来ていなかつたかを」

「はい」

美咲は携帯を取り出し、麗奈に連絡した。

「わあお」

病院の待合室の椅子に座つていた麗奈が、思わず声をあげた。周囲の患者が彼女を睨む。

「麗奈さん！」

篠原が小声で奢める。麗奈は肩を竦めて、

「『めーん。美咲ちゃんからだつたので、つい嬉しくて』と言つと、携帯を開いた。

「はい、美咲ちゃん、お久ー」

電話の向こうで呆れている美咲の姿が、篠原にははつきりと思い浮かんだ。

「え？ 何だ、お仕事の話？」

麗奈の顔が真剣な表情になる。篠原はそれに気づき、彼女に顔を近づけた。

「ええ、そうね。それは私も思い出さなかつたわ。さつすが、美咲ちゃん」

美咲は、その事に気づいたのは葵だと正直に話したようだ。麗奈は篠原をチラツと見てから、

「そういう謙虚などこも大好きよ。じゃあね」と携帯を切り、

「鳥丸医師も、私のところに相談に来ていたわ。すっかり忘れてたんだけど」

「繫がつたんですね、一つの事件が？」

篠原が興奮気味に言つと、

「まだそこまでは断定できない。ただ、全く無関係だと思われた二人が、本当はそうではないかも知れないとわかつたのは収穫ね」

麗奈はすっかり法律家の顔になっていた。

「葵は、私の事務所に来た医師の中から、次の犠牲者が出るかも知れないと考えているらしいわ」

「となると、麗奈さんの事務所が危ない可能性がありますよ」

「篠原が立ち上がった。すると麗奈は、

「それもご心配なく、護。すでに葵が向かつたらしいわ。貴方はここにいるように、ですって」

「はあ、そうですか」

篠原はガツカリしたように椅子に戻った。

「あらん、そんな私から離れたいの、護？ 酷いわ」

「違いますよ。離れたいのは、もう一人のマルタイ（犯罪の目撃者や重要な証言をする人で犯人等に命を狙われている者）ですよ」

篠原の言葉に、麗奈はクスッと笑い、

「ホントに可哀相なお姉さんね、菖蒲は」

「そうですかね」

篠原は、やつぱり俺の方がずっと可哀相だと思った。

葵はその頃、麗奈の事務所に到着していた。

「いらっしゃいませ」

妙に愛想のいい事務員が出迎えた。心なしか、彼女の顔が紅潮しているように見えた。

（もしかして、この子もあっち側の人？）

葵は背中を見せないようにしてようと思つた。

「水無月探偵事務所の水無月葵です。麗奈さんから連絡があつたと思ひますが」

「はい。どうぞ、こちらです」

事務員はスタッタと奥へ歩き出す。葵は後ろ手にドアをロックして、事務員に続いた。

「」の棚に保管されています

事務員はたくさん並んでいる書棚の一つを指し示し、錠をはずし

た。

「ありがとう」

葵が微笑んで礼を言ひつと、事務員は、

「い、いえ」

と赤くなつて俯く。

（本物だわ）

葵は溜息を吐いた。

「コーヒーをお淹れします」

事務員はそそくさと給湯室に歩き出した。

（麗奈さんほど攻撃的ではなさねうね）

少しだけホッとした葵だった。

葵は麗奈の事務所で妙な感覚に囚われていた。

（男共の熱い視線は、随分と経験して来たけど、女子の熱い視線は、えーと……）

彼女は相当困惑している。麗奈の部下である女の子は、まだ茜と年齢が変わらないくらい若そうだ。

（「この子って、麗奈さんが自分の好みで採用したのかな？ それとも、この子がここに来て目覚めてしまったの？）

どんな屈強な男にも怯まない葵も、まだあどけなさを残る女子にジツと見つめられるのは怖い。

「あの」

葵は堪らなくなつて振り返った。

「は、はい！」

事務員の女の子は、直立不動になり、葵を見た。

「何かあつたら呼びますから、お仕事続けて下さい」「あ、はい」

その事務員は泣き出しそうな顔になり、自分の机に戻つて行く。（どうしてこんなに罪悪感を覚えてしまうの？）

葵は、自分を死の淵まで追い詰めたあの星一族よりある意味手強い「敵」がいる事を知った。

「！？」

その時、葵は事務所のドアのロックを壊そつとする音を聞いた。（もう来たの！？）

「招かれざる客が来たようです。奥に隠れて下さい」

「え？ あ、はい」

彼女はある程度の事は麗奈に聞かされているのであるが、全貌は知らないのだろう。アタフタしながら、麗奈の部屋に入った。

「ドアをロックして、私がいいと言つまで、絶対に開けないで下さ

い

「はい」

ガチャッヒロツクがかかる音がした。次の瞬間、ドアがこじ開けられ、黒尽くめの男が三人、フロアになだれ込んで来た。三人とも、ロシア製のピストルを構えている。

「あらあら、女しかいない事務所に、大男共がそんな物騒なものを持つていないと乗り込めないなんて、ロシアンマフィアも知れたものねえ」

葵のその言葉に、三人はギクッとした。それでもすぐに気を取り直し、

「死ね！」

問答無用の銃撃が始まつた。葵はそれをまるで見透かすかのようにかわし、間合いを詰める。

「！」

ギヤング達は、まさか銃撃を撞い潜つて相手が接近するとは夢にも思つていなかつたのだろう、葵の急襲になす術なく倒れた。

「弱過ぎる……」

葵は、いきなり飛び道具を使う連中は頭が悪いか弱いかのどちらかだと考えている。

「こいつらの場合、バカで弱いよね」

氣絶しているギヤングを特殊なロープで全員縛り上げ、携帯を取り出す。

「ああ、総監？ 何度も悪いんだけど、東京の治安でどうなつてるのよ？ また暴漢に襲われたんだけど」

警視総監が電話の向こうで必死に詫びている。葵はクスッと笑い、「冗談よ。とにかく、こんな邪魔な連中はとつと連行して欲しいから、大至急護送車を手配してね」

葵は麗奈の事務所の住所を告げると、サッサと携帯を切り、

「出て来て大丈夫ですよ」

と事務員の女の子に声をかけた。

「怖かつたですウツ！」

事務員の子はそう叫ぶと、葵に抱きついて来た。

「あ、その、もう大丈夫ですから」

「は、はい」

彼女は泣いていた。その上、ガタガタと震えている。相当怖かつたのだろう。

（これは別にそういう事ではないわよね？ 一般女子の、当たり前の反応よね）

葵は、その子が特別な感情から自分に抱きついて来たのではないと強く言い聞かせた。

（そう言えば、王女様は元気かな？）

不意に懐かしい顔を思い出してしまつ葵だった。

「えーっ！？ 銃撃されたあ！？」

麗奈は葵からの連絡で、眩暈がしそうだった。

「それで、沙希ちゃんは無事よね？」

事務員の女の子は沙希ちゃんか。横で聞いている篠原はその名を頭に刻み込む。こんな緊急時にも、彼のスケベセンサーは活動を続けている。

「被害は？ え？ 壁に弾痕？」

ギクシとする篠原。

（ああ、弾の痕か）

言葉とは恐ろしいものだ、と彼は思った。

「ふう」

麗奈はグッタリとして椅子にもたれかかった。

「相手がロシアンマフィアじゃ、事務所の損害の賠償請求しても無駄よね」

「ロシアンマフィア！？」

篠原は仰天した。麗奈は携帯をしまいながら、

「ロシア製の改造拳銃を持っていたようよ。見た目も白人らしいし、

決まりでしょ」

「そうですね」

篠原は眉をひそめる。

「それにして、後小松のジイさん、どいでそんなつながりを持つたんだ？」

「院長はよくウラジオストックとかに行つてるらしいわよ。護のところは、そういう情報は掴んでないの？」

麗奈が不思議そうに尋ねる。篠原は苦笑いをして、

「後小松のジイさん個人は、ウチの管轄じやないですからね。貴重な情報です。本部に報告しないと」

「そうね」

麗奈はニヤツとした。篠原はその笑いに何かを感じて、

「何ですか？」

「葵も、何だかんだ言つて、護の事を考えているのかな、なんて思つたの」

篠原は肩を竦めて、

「あいつはそんな優しい女じやありませんよ」

「ああ、言いつけちゃうぞ、葵に」

「どうぞ、どうぞ。俺の株はもう底値ですから、これ以上落ちる事はないです」

篠原は苦笑いした。麗奈は彼の開き直りに呆れて、

「どうしてあんた達は、本当の気持ちを相手に見せようとしないのかな」

「ハハハ」

篠原は照れたように頭を搔いた。

後小松謙蔵は激怒していた。

「あの腰抜けの総理大臣め。たかが探偵事務所に何を恐れているのだ。役に立たん」

日本の首相をここまでこき下ろせる人間はそうはない。

「何だ！？」

イラついている所へ、更に追い討ちをかけるように悪い知らせが入つて来る。

「何だと！？」

麗奈の事務所を襲撃したギャング三人が、警視庁に逮捕されたといつ連絡だった。

「何をしているんだ！？」相手は女三人の事務所だろう！？あの弁護士のところも、女しかいなはずだ。どうしてあんたらは、そこまで使えるんだ！？」

後小松は血圧が上昇し、倒れそうだった。相手は言い訳をしている。

「思つたより強かつたなど、下らん言い訳だぞ。あんたらはプロだろ？！？ここまでしくじられると、交渉相手を考えねばならんぞ」相手は仰天したようだ。

「別に取引先はいくらでもあるんだ。中国でも、インドでも、中東でも、私は全然構わないんだぞ」

相手は何か新しい提案をしたようだ。後小松がニヤリとした。

「わかつた。今度はうまくやつてくれ」

彼は嬉しそうに携帯を切つた。

日本国総理大臣である橋沢龍一郎は、官邸の一室のソファで、与党進歩党の最高顧問である岩戸衆議院議員と相対して話していた。小柄で羽織袴姿の岩戸は、好み爺にしか見えないが、未だに政界に隠然たる発言力を持つていて実力者であり、葵達月一族の秘密を知る数少ない人物でもある。

「なるほど。その後小松とかいうジイさんが、敵対相手を知らせずにお前に協力を求めて来たので、力を貸した、という事か？」

岩戸老人は、顔は穏やかなままであるが、眼光が鋭くなっている。

橋沢は額から流れ落ちる汗をハンカチで拭いながら、

「はい。ですから、私は、後小松氏にこれ以上協力できない旨を伝

えましたので、後は岩戸先生のお力で、彼女達にその……

「詫びを入れたいという事か、橋沢？」

「はい」

橋沢は祈るような目で岩戸老人を見ている。

「相手が葵ちゃん達だと知つていたら、決して手を貸したりしなかつたのだから、許して欲しいと言いたいのか？」

「はい、その通りです」

橋沢は真剣な表情で言つた。岩戸老人は、大きな声で笑い出した。橋沢はホツとして、顔を綻ばせる。すると、

「バカ者ガ！」

といきなり岩戸老人が怒鳴つた。橋沢は子供のように怯え、身を縮めた。

「相手が彼女達とわかつたから手を貸すのをやめた、だと？ 貴様は何を考えている！？ そもそもそんな連中に一国の総理大臣が、いや、国会議員が手を貸して良い訳がなかろう！ どこまで愚か者なのだ、貴様は！」

橋沢は何も言い返せない。岩戸老人は、彼の返事を待つつもりはないいらしく、ソファから立ち上がつた。

「あ、先生、お待ち下さい」

このまま岩戸老人に帰られては、もはや頼る術がない。橋沢は慌てて立ち上がつた。

「案ずるな、橋沢。葵ちゃんには伝えておくよ」

岩戸老人は、振り返らずにドアに近づき、そのまま部屋を出て行つた。

「あ、ありがとうございます！」

頭を下げながら、橋沢は思つた。総理大臣を辞めたい、と。

皆村は、大日本医科大学付属病院事件の担当刑事と共に、重要な参考人である八幡原栄伍外科部長を訪ねていた。

「どうぞ、おかげ下さい」

八幡原部長は、一人にソファを勧め、自分も向かいに座る。

「私は疑われているようですね」

八幡原は皮肉交じりの口調で言った。

「いえ、決してそのような事はありません。これは形式的なものですから」

担当刑事は作り笑いをして返す。皆村は、ジッと八幡原の顔を見ていた。

「そちらの刑事さんは、私をお疑いのようだ。先ほどから、ずっと睨まれていますから」

八幡原は皆村にまで皮肉を言つて来た。しかし皆村は、「すみませんねえ、先生。この顔は生まれつきでしてね。申し訳ないです」

と皮肉で返した。八幡原は一瞬ムツとしたが、「ああ、そなんですか。それは失礼しました」

と作り笑顔で言つ。狸め、と皆村は心の中で毒づいた。

「すでにお調べになつていると思いますが、私は、鳥丸君が連れ去られた時、他の者達と一緒にそれを目撃しています」

「ええ、それは存じています」

担当刑事が鬱陶しそうに応じる。しかし八幡原は、「それから、鳥丸君が殺されたと思われる時間は、彼がするはずだった手術を執刀していました。私に犯行は不可能ですよ」と尚も言い募る。皆村もうんざりしていた。

（こいつ、自分が完璧なアリバイなどを誰かに叩き込まれたように話す。その不自然さに気づかないほどのバカなのか？ それとも他に理由があるのか？）

八幡原は皆村達が黙つたのをどう解釈したのか、得意そうに笑つて、

「見当違いを理解して頂けたようですね。そろそろお帰り下さい。私も優秀な部下を失つて、とても困つてゐるのですから」

と言つなり立ち上がつた。

「わかりました。また来ます」

担当刑事が捨て台詞のように言つと、八幡原はバカにしたような笑みを浮かべて、

「何度来て頂いても、同じ事だと思いますがね」と言い放つた。皆村は、そこが自分の「陣地」でなかつたから我慢したが、そうであつたら、間違いなく八幡原を殴り飛ばしていただろつ。

「よく堪えましたね。自分だつたら、ぶん殴つているところです」部長室を出るなり、皆村は言った。すると担当刑事は、「貴方がいてくれたからですよ。私一人だつたら、殴つていたと思います」

「そうですか」

思いは同じ。皆村は彼の事が好きになつていた。

美咲はその直後、皆村から連絡を受けた。

「そうですか」

何も得るものはないと思つてはいたが、八幡原の自信に満ちた態度は、美咲にある確信を抱かせた。

「やっぱり間違いないわね」

「えつ？ 何かわかつたんですか？」

相向かいの席にいる茜が顔を上げて尋ねる。美咲も茜を見て、「ええ。八幡原氏は、烏丸医師を殺害してはいないという事」「でもそれは、アリバイが完璧なんだから、元々わかつてゐる事ですよね？」

茜はキヨトンとして言つた。すると美咲は、

「そうじやないの。八幡原氏は、仮にアリバイがあいまいだとしても、烏丸医師を殺害していないの」

「はあ？ 美咲さん、意味わからんないにですけど？」

茜は、美咲が自分をからかつてゐるのではないかと思い始めた。

「そして、二つの事件は紛れもなくある同一人物による計画よ」

美咲は更に謎めいた事を語る。

「繋がりがあるのはわかりますけど。どうして断言できるんですか？」

茜は興味津々の顔で尋ねる。美咲はマウスを操作しながら、「有力容疑者にアリバイがある。それも、自分で作ったアリバイではない。誰かが用意したようなアリバイ。そして、過剰なまでの自信。一つ目の事件の容疑者の海藤氏は直接話が聞けていないけど、皆村さんに見せてもらった捜査資料からわかる事なんだけど、やっぱり証言が全く揺らいでいないの」

「それは、完璧なアリバイがあるからでしょ？」

茜はまだ美咲が何を言いたいのかわからぬようだ。美咲は手を止めて、

「容疑者が、犯人は自分ではないと言い切るのは、どうしてだと思う、茜ちゃん？」

「それは、自分で殺害していないとわかつているからです。それ以上何があるんですか？」

茜はまた、美咲が自分をからかっていると思い始めた。

「それ以上の理由があるのよ」

「それ以上？ そんな事、あり得ないですよ」

茜はムツとしている。美咲はその様子がおかしくてクスッと笑ってしまった。

「ああ、やっぱり美咲さん、私をからかっているだけなんですね？」

「違うわよ。わからないかな、それ以上の理由が」

美咲は笑いを堪えながら言つた。茜は腕組みをして、

「それ以上の理由なんてないですよ！ あつたら、美咲さんに今月のお給料、全部あげてもいいです」「本当に？」

美咲がニッとして尋ねたので、茜はギクッとしたが、

「ええ、本当ですよ」

「いいの、本当に？」

「いいですよ！」

茜はムキになつて来ている。美咲は「口うとして、

「じゃあ、今月分のお給料は私のものね、茜ちゃん」

「えつ？」

美咲の微笑みが、「悪魔の微笑み」に見えた茜は、急に弱気になつた。

「う、嘘です、『めんなさい、美咲さん、さつきの取り消しです』

茜は大慌てで言つた。美咲はさも残念そうに、

「ああ、惜しかつたなあ」

茜はじれつたくなつて来て、

「早くそれ以上の理由を教えて下さいよ！」

と叫んだ。美咲はクスクス笑つていたが、

「じゃ、教えるわね」

「はい」

茜は居すまいを正して美咲を見た。

「二人は、誰が犯人なのか知つてているからよ」

「あつ！」

茜は賭けを下りて正解だつたとつくづく思つた。

「これ以上自信になる事はないでしょ？ 自分が殺害していいのを証明するのは難しいけど、自分以外の誰かが殺害するのを知つていれば、警察にどれほど責められても、全く怯む事はないでしょ？」

「そ、そうですね」

そんな犯行を計画したのだとしたら、その連中も凄いけど、これだけ少ない情報から、そこまで辿り着いてしまう美咲さんはもつと凄いと茜は思つた。

「所長が、麗奈さんの事務所で次の標的となる人を特定できれば、犯行グループの先手を打てるし、犯人を捕まえる事もできるはずよ」

美咲の言葉に、茜はすっかり感心していた。

第十一章　急襲　10月2日午後1時

水無月葵は、暴漢達を警視庁の機動隊に引き渡すと、書類の棚の中を捜索していた。

（またか……）

松木麗奈法律事務所は、怖い。葵は溜息を吐いた。

「あの」

事務員の子が声をかける。

「はい？」

葵は愛想笑いをして彼女を見る。

（確かに、伊東沙希さんだけ）

「先程は、抱きついたりして申し訳ありませんでした」

「あ、いえ。怖かつたんでしょ？ 仕方ないですよ」

言つてしまつてから、葵は、

（まづい）

と気がついた。沙希の顔が急に晴れやかになつたのだ。

（OKサインを出したようなものね。困ったな）

「ゴーヒーを淹れますね」

沙希は嬉しそうに給湯室に歩いて行く。

（ま、いつか。あの王女様みたいに、いきなりキスしたりはないだろ（うだから）

しかし、相手はあの麗奈の事務員だ。どうなるかわからない。

「はあ」

また溜息を吐く葵だった。その時、滅多に鳴らない着メロが鳴つた。

「まあ、珍しい」

葵はニシとして携帯に出た。

「おはよ（ひ）や（め）す。」（おはよ（ひ）連絡とは、珍しいですね、おはよ先

生

相手は岩戸老人だ。

「橋沢の阿呆が、また絡んでおつたので、先程怒鳴りつけてやつた」「え？」

葵は意外な事実に驚いた。

「つづづく、執念深いオジさんですね、あの人」

葵は苦笑いする。岩戸老人も笑つたようだ。

「今度は詫びを入れたいと言つて来たよ。さすがのあの阿呆も、君達の事は怖いらしい」

「まあ」

それは嬉しいような、ムカつくような話だ。

「後小松の事、儂の方でも調べた。星一族とは違つた意味で危ないぞ」

「ええ、わかつています。さつきも、手荒い挨拶をされたばかりです」

「そうか。気をつけてくれ、葵ちゃん」

岩戸老人の声があまりに真剣な調子だったので、葵は、「心配しないで下さい、先生。ギャング如きにやられる私達ではありますせんから」

「そうだな。じゃあ、また」

「はい」

葵は携帯をしまい、また書類を開いた。

(麗奈さんて、医療過誤専門なのかな？ 全部それの関係だ)

これでは、次のターゲットを絞るのが難しい。

「後小松総合病院と、大日本医科大学付属病院の方を、もう一度見直してみるか」

葵は書類を閉じ、棚に戻した。

麗奈は篠原と共に菖蒲に付き添い、病院の最上階にある食堂で昼食をとっていた。

「まだ事件は解決しないの、護君？」

菖蒲がステーキを切りながら尋ねる。篠原は、ガリガリに瘦せた姉の旺盛な食欲に驚きながら、

「そんな簡単に解決できたら、警察も消防もいらないよ」

「言い訳ね」

菖蒲はガツガツと肉を食べる。麗奈が、

「あんた、よく脛間にそんなたくさん食べられるわね。胸焼けしない?」

「午後から手術なのよ。胃癌のね」

思わず目を見合させる篠原と麗奈。

「手術前は、たくさん食べないと、体力が保たないのよ」

「なるほどね」

麗奈は気持ちが悪くなつたのか、箸を置いた。

「(1)馳走様」

どうやら、菖蒲の手術風景を想像してしまつたらしい。菖蒲はナイフとフォークを置いて、麗奈と篠原を見た。そして、何故か、二ンマリする。

「な、何?」

麗奈は嫌な予感がして尋ねた。篠原もハツとして姉を見る。

「そうやって並んでいると、あなた達、お似合いね」

「はあ?」

篠原が呆れる。麗奈は苦笑いする。

「護君、葵じやなくて、麗奈と付き合になさい。その方が里の両親も安心するわ」

「あのなあ」

姉の途方もない提案に、篠原はうんざりした顔で抗議しようとした。

「あら、いいの、付き合っちゃつて?」

麗奈の反応に、篠原はギョッとした。菖蒲はフツと笑つて、

「冗談よ。女が好きな貴女が、女が大好きな護君と付き合える訳ないでしょ」

とまたステーキを食べ始める。

「姉さん！」

「女が大好き」と言われた篠原は、それを否定できない自分を悲しく思いながらも、抗議した。

「あら、菖蒲、認識不足よ。私はどちらも好きなのよ」「え？」

菖蒲と護の姉弟きょうだいは、その時ばかりは声がピッタリ揃つた。

「冗談はさて置き、そろそろ準備をしないといけないわ。ここのおいは、護君のガード料と相殺で、私がするわね」

菖蒲はいつの間に食べ終えたのかといいうくらいの速さでステーキを平らげ、トレイを持つと席を立つた。

「姉貴が奢るなんて、何か恐ろしい事の前触れかな？」

篠原が呟く。麗奈がそれを受け、

「かもね」

と言った。

美咲と茜は、珍しく一人共手弁当あんとうだったので、事務所で昼食タイムとなつた。

「麗奈さんの事務所も襲撃されるなんて、後小松つていうジイさん、何者なんですかね？」

茜がミートボールをパクつきながら呟く。美咲は箸を置いて、「相手がロシアンマフィアで間違ないとすると、ちょっと気に入る情報があるのよ」

「何ですか？」

茜が興味津々の顔で尋ねる。美咲は茜を見て、「ロシアの暗黒街のボスの一人が、癌らしいの」

「癌ですか？」

「ええ。それで手術を受けたいのだけど、仕事柄公式には病院に入院できないから、困つているらしいの」

茜は二マツとして、

「後小松のジイさんと繋がりましたね。ジイさん、ウラジオストックによく行つてるんでしょ？」

「麗奈さん情報ではね。でもそれだけの事で、ロシアンマフィアともあるうモノが、後小松院長の言いなりになるのかしら？」

美咲の疑問に茜は腕組みした。

「確かに。依頼を受けて仕事をするつて感じじゃないですね。こ
き使われているような……」

「そうなのよ。この事件、もう一つ何かあるような気がするの
美咲はタコさんワインナーを食べて言つた。

「皐月先生、急患です！ 救急車がもうすぐ到着します！」

看護師が走つて来て告げた。菖蒲はビッククリして、

「私はこれから手術なのよ？ 無理だわ」

「そちらは明日に延期して、こちらを優先して欲しいと政治家から
電話があつたそうです」

「政治家？」

菖蒲は露骨に嫌な顔をした。

「何様のつもりよ、そいつは！？」

「院長からも、優先して欲しいと電話がありました」

「本当に全く！」

これだから、大学の付属病院は嫌だ！ 菖蒲は心の中で毒づいた。

「逆らうと、圧力かけられるのね」

院長の立場を哀れむ。

「そういう事なら仕方ないわ」

菖蒲は看護師の後につき、救急救命センターへと走つた。

「救急車、到着しました！」

菖蒲はその声に応じて、センターの処置室のドアをバンと開いた。

菖蒲を先導していた看護師は、救急車から降ろされる怪我人をスト
レッチャーに移動させるため、配置についた。救急車が救命センタ
ーの入口に横づけされた。後部のドアが開き、人が出て来る。

「え？」

看護師は、ギョッとした。それは救急隊員ではなく、黒髪くめのギャングだったのだ。彼らはサングラスをかけ、大きなマスクをしていたので人相はわからなかつたが、白人らしいのは肌の色でわかつた。

「あ、あ……」

看護師が唖然としていると、ギャング達は凄まじい速さでその場から去り、救命センターの処置室へとなだれ込んだ。仰天して動きが止まる看護師や医師達。

「何事！？」

騒がしい来訪者に菖蒲が怒鳴る。ギャング達は菖蒲に銃を向けた。他の者達は、震え上がつた。

「どうにづつもりよ、あなた達は！？」

それでも怯まない菖蒲はやはり月一族だ。だが、ギャング達は菖蒲の質問を無視し、彼女に当て身を食らわせると、そのうちの一人が彼女を抱き上げ、あつと言ひ間に出て行つてしまつた。

「うわあ……」

救命センターのドアの外で立ち尽くしていた看護師が我に返つた時は、救急車は姿を消していた。

「何ですつて！？」

菖蒲拉致の話を篠原からされて、葵は仰天した。

「あんたがついていながら、何してたのよ！？」

愚問とわかつていたが、口に出してしまつ。葵自身も、完全に意表を突かれたのだ。

「すまん。油断した。まさか、真昼間に堂々と押し込んで来るとほ思わなかつたんだ」

篠原の声に「元気がない。

「ごめん」

「何が？」

葵に謝罪された事は、今まであつただらうか？ 篠原はふとそんな事を考えた。

「あんたのお姉さんが連れ去られたのに、酷い事言つた。『めん』

「いいよ。お前に謝られると、何か怖い

「……」

葵は何も言い返せない。

「実行グループは目撃者の証言から、ロシアンマフィアのようだ。そつち関係を調べるために俺は一度本部に戻る。麗奈さんの護衛は、大原に直接頼んだから、安心してくれ」

「わかった。落ち着いてね、護」

葵は篠原を気遣つて言つた。すると篠原は、「姉貴は大丈夫だよ。連れて行つたのは、普通の救急車だ。黒くなかった」

「という事は、菖蒲さんは餌つて事？」

葵の問いかけに篠原は、

「姉貴が知つたら激怒しそうだけど、多分そういう事だらう。用があるのはお前の方さ」

「なるほどね」

葵は篠原に礼を言い、携帯を切つた。

「連中も焦つているのね」

美咲と茜も、菖蒲が連れ去られたと聞き、驚いていた。

「菖蒲さんをどうするつもりなんでしょう？」

「所長をおびき出したいんだと思うわ」

美咲の答えに、茜は首を傾げて、

「用があるなら、直接所長を襲えばいいのに」

「それに失敗したから、菖蒲さんを人質にするんでしょう？」

美咲が呆れて言つた。茜はニヤツとして、

「菖蒲さんが人質でも、所長は全然躊躇しないと思ひますけど」

「茜ちゃん……」

妙に嬉しそうな茜を見て、美咲は溜息を吐いた。

(確かにそうかも知れないけど、それを言葉にしないでよ、茜ちゃん)

後小松謙蔵は、院長室で臥月菖蒲拉致を成功したと報告を受けた。

「初めからこうすれば良かったな」

後小松は電話の相手に皮肉っぽく言った。

「その女は使える。殺すなよ。人質としての価値の他にも、使い道があるのはあんたらもよくわかっているはずだ」

後小松の言葉は、謎めいていた。

「それから、探偵事務所と接触している刑事も目障りだ。早く始末しろ」

彼は携帯を切り、その醜く太った身体を椅子に沈める。

「最後に役に立つたな、橋沢。お前の支援は、次の総選挙では見送るがな」

後小松はニヤリとした。

皆村秀一は、自分の署に戻るため、車を走らせていた。
(全く、何なんだよ、この事件は?)

イライラする彼の心を静めるかのように、携帯が鳴った。

「おお」

皆村は田の前に迫った署の駐車場に素早く車を乗り入れ、携帯に

出た。

「すみません、お待たせして」

相手は美咲だ。

「実は、臥月菖蒲さんが、何者かに拉致されたんです」

「さつき、あやめ?」

皆村には、その名前がすぐに誰なのかわからない。

「黒い救急車の目撃者です」

「ああ」

ようやく彼女の傲慢な物言いがリフレインする。

「それが何か？」

皆村にとつて、菖蒲の事などどうでもいい事だ。

「皆村さんも氣をつけて下さい。狙われているかも知れません」「まさか」

皆村は一笑に付した。しかし美咲は、「可能性はあります。ですから……」

美咲が自分を心配してくれている。皆村は感動していた。（生きてて良かった）

そうまで思つてしまつた。

「ありがとうございます。氣をつけます」「そうして下さー」

皆村は名残惜しそうに携帯を切り、車を降りた。

「しかし、そこまでするつて、一体何を考えているんだ、その連中は？」

彼は首を傾げて署の玄関に向かつ。

「ぐつ……」

背中に衝撃が走る。ふと腹を見ると、ワイシャツに血が滲んで来ていた。

「……」

彼はその場に倒れ伏した。玄関前に立つていた制服警官が驚いて彼に駆け寄る。そして銃撃を受けたのに気づき、周囲を見回した。

菖蒲の勤務する大学病院に到着した大原は皆村が狙撃されたと聞き、驚愕していた。隣の麗奈もビックリしている。

「わかりました」

大原は携帯を閉じ、麗奈を見た。

「貴女も警戒した方がいいですよ、先生」「みたいね」

菖蒲は連れ去られただけなのに、皆村は狙撃？　この差は何？

麗奈は怖くなつた。

「僕では守り切れないで、茜ちゃんを呼びますね」

「あら、どうして？」

麗奈の質問に、大原は苦笑いして、

「トイレまではついて行けませんから」

「ああ、なら、私、男子トイレでもOKよ。気にならないから」

「ハハハ」

貴女が気にならなくても、男の方が気にしますよ、と大原は思つた。

葵も、皆村が狙撃された事に衝撃を受けていた。

「そのつもりになれば、いつでも殺せるって意味？」

菖蒲は拉致され、皆村は狙撃。その差に疑問を感じた葵は、

「まさかね」

とある推測を思いつき、すぐに考え方直した。

美咲は、いつも冷静な彼女がどうしたのだろうと、「うへらい、驚いていた。

「時間的に、私が連絡した直後だわ」

彼女は茜と共に麗奈の元に向かっていた。葵が心配して、美咲も麗奈につくように言つたためだ。

「美咲さんのせいじゃないですよ」

茜も美咲の狼狽振りを気にして慰めの言葉をかけた。

「皆村さんは、私達とつながりがあつたから、狙撃されたのよ。私が皆村さんと会つたりしなければ……」

「考え過ぎですよ、美咲さん。そんな事を言い出せば、大原さんがあの刑事さんを紹介したんですから、大原さんも悪くなりますよ」

「そ、そうね」

ネガティブな思考は何も生み出さない。それが、美咲の座右の銘だ。すぐに悪い考えを振り払う。

「刑事さんのお見舞い、行きます？」

茜が水を向けると、美咲は、

「私が行つても、皆村さんの容態が良くなる訳ではないわ。それより、元を叩かないと」

「そうですね」

いつもの美咲に戻つたのを確認した茜は、前を見て言った。

第十二章 美咲、切れる 10月2日午後4時

皆村秀一は警察病院に運ばれて手術を受け、何とか一命を取り留めた。

「良かった……」

美咲は携帯を閉じながら呟いた。

「美咲さん、もしかして、あの仮面の刑事を好きなんですか？」

茜が嬉しそうに尋ねる。美咲はギクッとして、

「ち、違うわよ。私のせいで狙撃された気がするから、無事で良かつたと思つただけよ」

「そうですかあ」

茜は疑いの眼差しを向けたまま、ショルダーバッグを肩に掛けた。「とにかく、今一番危ないのは麗奈さんよ。急ぎましょう、茜ちゃん」

「はい」
一人は事務所を出た。

葵は麗奈の事務所のソファで思索に耽つていた。
(ロシアンマフィアを後小松が動かせるのは何故？ そして、黒い救急車を使つたバカげた寸劇は何のためなの？)
謎だらけである。

「どうぞ」

沙希が「コーヒーを出してくれた。

「ねえ、沙希ちゃん」

「は、はい」

顔を赤らめて返事をする沙希を葵は苦笑いして見上げる。

「金村さんと鳥丸さんは、ここに来たのよね？」

「はい」

葵は少し考えてから、

「一人に共通する事はない？ 何でもいいから、教えてくれないかな」

「えーと……」

沙希はトレイを抱えたままで考え込む。

「お一人とも、イケメンでした」

沙希はニッコリして言った。

「……」

まさかとは思っていたが、やっぱりそこか、と葵はガツカリした。それを察した沙希が、

「す、すみません。そんな事、どうでもいい事ですよね」

「ああ、そんな事ないわよ。何でもいいからって言ったんだから、構わない。もつといろいろ思い出してみて」

男に興味がないから、あまり観察していなかつたのかな、と葵は考えた。

「そう言えば」

沙希は葵の前に座つた。

「何？」

葵は身を乗り出す。沙希はそれにまた赤面し、「お一人共、パスポートの話をしていました」

「パスポート？」

何だ？ 只の偶然か？ それにしては、麗奈の事務所でパスポートの話は不自然だ。会話の流れで出て来たのだろうが、どうにも意味が分からぬ。

（麗奈さんに訊かないといけないな。しかも、いろいろ書類が揃つているから、ここに戻つてもらわないと）

葵は携帯を取り出し、美咲に連絡した。

「それにしても」

病院の待合室で、美咲達の到着を待つている麗奈は言った。

「はい？」

大原はその口調に何かを感じたのか、麗奈を見た。

「どうして葵のところには、こんなに面倒ばかり起こす人間が集まるのかな、と思ったの」

「そうですか？」

大原は自分が警察官なので、あまりそんな風には感じないようだ。麗奈は溜息を吐き、

「その中でも飛び抜けて面倒な奴が誘拐されても。誘拐した連中、今頃後悔してるかもよ」

大原は苦笑いするしかない。菖蒲^{あやめ}とは直接会話した事がないが、雰囲気でやり辛い人だとは思っている。茜も苦手のようだし、何しろ葵ですら避けているという事だから、相当な人物なのだろう、とも分析していた。

「あ、葵からだ」

麗奈は携帯に出た。

「どうしたの？」

しばらく葵が話す。麗奈は相槌を打ちながら、会話を続けた。

「わかった。じゃあ、大原君と一緒に事務所に戻るわ」

麗奈が携帯を切ると、

「どうしましたか？」

と大原は尋ねた。麗奈は大原を見て、

「葵が何かに気づいたみたいなの。私に訊きたい事があるから、事務所に戻つてくれつて」

「そうですか？」

大原が立ち上がると、

「ああ、美咲ちゃん達と同行するように言われたから、彼女達を待ちましょう」

「あ、はい」

大原は椅子に戻つた。

後小松は皆村の狙撃が失敗した事を知られ、また憤激していた。

「確實に仕留めると言つたはずだぞ。警察関係者は、警察病院の警備が嚴重な病室に入つてしまふから、もう殺すのは無理だ。後は死んでくれるのを祈るだけだな」

電話の相手が何かを言った。

「バカを言つた。私は日本でテロを起こすつもりはない。あんたらに協力しているだけだ。そしてあんたらは、その見返りに私に協力しているだけだろう。警察病院を爆破するのは構わんが、それは私の関知する事ではないぞ」

ギャングと言つ連中は限度といつものを知らん、と後小松は内心呆れていた。

「とにかく、契約では後一人だ。もちろん、確保している。そして、警察もあの探偵共も、まだ我々の狙いはわかつてはいはずだ」

後小松は狡猾な笑みを浮かべた。

「それから、探偵共への罠の準備は整つていてるか？」

相手が答える。

「あの皐月菖蒲は、探偵とは顔見知りだ。絶対に取引に応じて来る。うまくやつてくれよ。私達の命運がかかつていてるのだからな」

後小松は携帯を切り、机の上に置いた。

「終わり良ければ、全て良しだな」

彼はその醜い腹を擦りながら呟いた。

その頃、美咲達は渋滞に巻き込まれていた。

「もう、ついていないですねえ。ナビでは、こっちが空いているはずだったのに、直前に事故が起こつていてるなんて」

助手席で茜が剥れた。美咲は肩を竦めて、

「こればかりは仕方ないわよ。まさか事故が起こるなんて、誰にも予測できない事だし……」

と言いかけ、ハツとした。

「どうしたんですか、美咲さん？」

茜も美咲の異変に気づいた。

「まさかとは思うけど、この事故、故意に起こしたものかも」「ええ？ そんな、まさか……」

その時、フロントガラスに何かが当たった。銃弾のようだ。周囲のドライバー達が仰天して逃げ出した。

「この茜号を狙撃するなんて、どこのバカ？」

茜はキッとして、辺りを見渡した。

「とうとう、茜号で決まりなのね、この車は」

美咲が小声で言つと、

「そうですよ。何か不満ですか、美咲さん？」

「別に」

美咲はダッシュボードの液晶パネルを操作し、ミラーの前後に小型カメラを出した。

「こんなので見つけられないとは思うけど、一応威嚇の意味も込めてね」

「ミサイルでも射たれない限り、大丈夫ですけどね」

すっかり人気がなくなつた道路を見て、茜が言つ。

「まだ狙つてますか？」

「こんなに高い建物があるんだから、まだ狙つてているでしょうね。外に出ないでね、茜ちゃん」

茜はニヤツとして、

「それって、『押すなよ、押すなよ、絶対押すなよ』と同じですか、美咲さん？」

「何それ？」

お笑い番組を全く知らない美咲には、茜の渾身のボケは不発だった。

「何でもありません」

茜は撃沈した。

「えつ？」

フロントガラスにヒビが入つた。

「特殊な弾丸ね。このままじゃ、茜号が棺桶になりそうよ」

美咲は忍び装束に着替えた。茜も素早く忍び装束になる。

「これ以上この茜号を傷つけさせないわよ、バカギャング共め！」

茜はサツヒドアを開いて外に飛び出した。

「茜ちゃん、危ないわよ」

美咲も外に出る。

（銃弾の入射角から考えて、あのビルの屋上？）

美咲は走った。

「ああ、美咲さん、待つて下さいよ」

茜が慌てて追いかける。

「あそこね」

美咲は自分達の動きを追い切れていないスナイパーの姿をはつきりと確認した。

「逃走経路を遮断して、茜ちゃん」

「了解！」

茜がビルの裏手に回り込む。スナイパーは標的を見失つて、動転している。

「逃がさない！」

屋上から顔を引っ込んだスナイパーを見て、美咲はビルの壁をよじ上つた。まるでヤモリのようだか、彼女の名誉のためにもそれは使つてはいけない表現だろう。

「待ちなさい」

金網の外から現れた美咲を見て、スナイパーは仰天していた。

「ど、どこから？」

「逃がさないわよ。觀念しなさい」

相手はロシア人のようだ。

「くそ！」

スナイパーはライフルを投げ捨て、自動小銃を取り出した。

「危ないものを！」

スナイパーは自動小銃を乱射した。美咲はまるでプリマドンナのよう華麗な動きをし、銃撃をかわす。

「ば、化け物か？」

「失礼ね、おっさん！」

いつの間にか後ろに回り込んでいた茜が、狙击者の首筋に手刀を叩き込んだ。

「ぐつ……」

狙击者は呆氣なく倒れた。

「何、こいつ。弱過ぎる」

茜は呆れ顔で呟く。美咲が近づいて、

「銃を振り回す人間で、私達に勝てる相手はいないわよ」

「それもそうですね」

茜はニッコリして言った。

「大原さんに連絡して、処理を頼みます」

「お願ひね」

美咲は葵に連絡を入れた。

葵は美咲達が再び銃撃された事を知り、怒りを露にした。沙希が思わず後退りする。

「あのジジイ、まだ懲りていないうね。でも知らないわよ、ジイ様。美咲大明神を怒らせると、私より始末が悪いんだから」

葵が嬉しそうに恐ろしい事を言ったので、沙希はとうとう葵から離れて、給湯室に逃げ込んでしまった。

「ハハハ……」

それに気づき、葵は苦笑いをした。

「あ」

ミニバンに戻ると、周囲はすっかり元通りになり、車が行き交っている。

「美咲さん、何かが貼られていますよ」

茜がフロントガラスに付けられている紙を指差した。

「地図ね。住所が書かれているわ。どこかしら？」

車内に戻り、ナビで検索する。河原のようだ。廃車の処理場らしい。

「そこに菖蒲さんがいるみたい。取引をしようつって事ね」

美咲は紙に書かれた内容を読んだ。

「一人で来いですって。危なそうね」

「所長に行つてもらいましょう」

茜が嬉しそうに言い出す。美咲は茜を見て、

「いいえ。これは私が行くわ。菖蒲さんの救出もそうだけど、皆村さんの件もきつちりお礼をしたいから」

「やっぱり、美咲さんて、あの強面こわもてさんが好きなんですね？」

茜がまた言い始める。すると美咲は、

「そうなのかもね。今までにいない、とても純真な人だから」

「え？」

思わず発言に、茜はビックリしてしまい、何も突っ込めなかつた。

葵は、美咲から更に連絡を受けていた。

「なるほどね。やっぱり菖蒲さん、そう使われたか。ええ、いいわよ。貴女に任せる。あまりやり過ぎないでね」

「所長には言われたくありません」

美咲が憤然として言う。葵は笑つて、

「はいはい。気をつけてよ。相手はギャングだから、何を仕掛けて来るかわからないわよ」

「ええ。慎重に行動します」

葵は携帯を切つた。

美咲は茜と別れ、一人で廃車処理場に赴き、茜は「茜号」を運転し、大原と麗奈の待つ大学病院へと向かう事になつた。

「美咲さん、気をつけて下さいね」

「ええ」

美咲は忍び装束のまま走り出し、ビルの屋上へと飛び移ると、た

ちまち姿を消した。

「廃車処理場か。何か、凄い事になりそうだから、見に行きたいな」
茜は嬉しそうに笑つてから、「茜郎」を発進させた。

その廃車処理場は、今は使われていない。会社が倒産し、只の産業廃棄物と化してしまったその残骸は太陽の光を浴びて、不気味に輝きを放つてゐる。菖蒲はギャング達に後ろ手に縛られたままで、廃車の前に立たされている。ギャングは全員で十五人程いた。今までの情報から、葵達が相当強い事を知らされているのだ。

「こんなところに連れて来て、どうするつもりなの、あんた達は？」
拉致されてから数時間が経過するにも関わらず、菖蒲はまだ元気だった。

「うるせえよ。黙つてろ」

ギャングの中のリーダー格の男が言い放つ。菖蒲はムッとしたが、何も言い返さなかつた。

「来たようですね！」

双眼鏡で辺りを監視していた下つ端のギャングが叫んだ。

「どうして葵が助けに来ないのよ！？」

美咲を見るなり、菖蒲が怒鳴つた。それを聞いた美咲は苦笑いした。

「すみません、菖蒲さん。私が志願したんです」

「ホントにいい子ね、貴女は。護君と付き合ひなさいよ」

「ハハハ」

そればかりは応じられません、菖蒲さん。声に出して言えないのが残念な美咲である。

「本当に一人で来るのは、とことんバカだな、お前らは。只、お前らのボスが来なかつたのが惜しいけどな」

リーダーがニヤけながら言つ。美咲はリーダーを睨み据えて、
「貴方達では格が違ひ過ぎるから、私が来たのよ」

「何だと！？ あのブサイクな面した刑事みたいに、てめえのその

腹に鉛玉食らわせてやろうか、ネエちゃん！？」

リーダーのその言葉が、美咲を刺激した。

「ブチッ。彼女の中で、何かが切れる音がした。

「知らないわよ、あんた達。あの子を怒らせたわね！ ホントに知らないわよ！」

菖蒲が怒鳴り散らす。リーダーが菖蒲を睨みつけ、「邪魔だよ、オバさん。向こうへ行つてろ」

「何ですって？ 誰がオバさんだ、この穀潰し共が！」

菖蒲は一人のギャングに引き摺られるようにして隅に連れて行かれた。

「殺つちまえ！」

「おおっ！」

ギャング達は一斉に銃を取り出し、乱射した。

「そんなもの！」

美咲は近くにあつた廃車のドアを片手でズインと引きずり出すと、まるで座布団でも放るように投げた。

「ギエツ！」

ギャング達は驚愕した。あり得ないものが飛んで来たからだ。

「うわあっ！」

先頭で銃を撃っていた一人が、腰をぬかす。彼等の目の前の地面上に、ドアがドスンと音を立てて突き刺さつたのだ。

「ひいいいっ！」

逃げ出したギャング達の行く手を遮るよつにして、ドスンドスンとドアやボンネットが地面に落下する。

「な、何なんだ、あの女は……？」

一番後ろでそれを見ていたリーダーが呟く。

「忍者よ。よく覚えておきなさい」

菖蒲が言った。リーダーはハツとして彼女を見た。そこには、口

一ツを解かれた菖蒲と、ギャング一人を倒した美咲がいた。

「い、いつの間に……」

リーダーがそう言つた時、彼はすでに美咲の手刀で倒されていた。

「お疲れ様でした、菖蒲さん」

息一つ乱さずに美咲が言った。菖蒲は微笑んで、

「貴女こそ、お疲れ様、美咲」

と応じた。

皆村秀一は、一面が花畠の丘の上で目を覚ました。

「ああ」

「彼は思った。

（ここはあの世か？ 僕は死んでしまったんだな）

ふと、美咲の笑顔を思い浮かべる。

（例え他人がいたとしても、その人と食事をできたのは嬉しかった。でも、一度くらいデートしたかったな）

美咲と二人きりでは、彼女の顔も見られないのに、そんな事を考えてしまふ自分に呆れる。

「美咲さん」

皆村は愛しい人の名前を呟いてみた。

「はい」

え？ 今、返事が聞こえた。どういう事だ？ 皆村は混乱した。

「意識が戻ったんですね、皆村さん」

また美咲の声がする。皆村は仰天して目を開いた。そこは警察病院の病室だった。

「良かつた、皆村さんが無事で」

ふと横を見ると、美咲が田を潤ませて自分を見ていた。その隣には、刑事課長がいる。

（何であなたがいるんだ？）

思わずそう言いそうになつた。折角美咲さんが来てくれたのに、邪魔するなよ。そもそも言いたかった。

「あ、ありがとうございます」

皆村は顔が火照るのを感じた。先日現場であつた時も、こんなに顔が近くにあつた事はない。手を伸ばせば届くところに美咲がいる。

「安静にしていて下さい。皆村さんを狙撃した犯人は必ず捕まえますから」

「は、はい！」

危ないからやめて下さいといつ発想が浮かばない。とにかく嬉しかった。

「また来ますね」

「おおお！ 皆村は心の中で雄叫びをあげた。また来ますね。何ていい響きなんだ。美咲は小さく手を振りながら病室を出て行った。

「何だ、皆村、お前にも彼女がいたんだな」

課長がニヤニヤしてからかう。皆村はギョシとして、

「ち、違いますよ！ あの人を探偵です。大原の紹介の……」

「ああ、そうか。でも、いい雰囲気だったぞ。彼女、お前に気があるんじゃないか？」

「え？」

課長の軽口にも過敏に反応してしまつ。

「あり得ないですよ。あれほどの美人には、絶対恋人がいますって皆村は苦笑いして言った。

「そりや そりだな」

課長のあつさりとした応答が妙にムカつく皆村だった。

一方茜は、大学病院に行つて大原と麗奈を「茜号」に乗せ、麗奈の事務所に向かつた。

「あらあ、美咲ちゃんはあ？」

残念そうに麗奈が言う。

「美咲さんは、菖蒲さんを助けに行きましたよ。後で合流です」

「菖蒲なんて助けに行かなくてもいいのにイ。美咲ちゃんが助けに来てくれるのなら、私も捕まるつかしら？」

麗奈は相変わらずムチャクチャな事を言い出す。茜は苦笑いしたが、

「冗談でもそんな事は言わないで下さい、松木さん」と大原は大真面目な顔で窘めた。

「はーい」

麗奈はションボリしてしまった。

その頃篠原は、防衛省で驚くべき事を知った。

「ロシアンマフィアだけではなく、ロシアそのものが動いているんですか？」

篠原は本部のロシア担当の先輩に話を聞いていた。

「ああ。国そのものという事ではないが、現体制を快く思わない反対派が暗躍している。それがマフィアと結託して、日本に潜入しているらしいんだ」

「それで、後小松のジイさんはどう繋がるんですか？」

「そこがわからないんだよ。あのジジイがウラジオストックによく行っているのは把握しているんだが、何をしているのかはまだ掴めていない。CIAも動いているので、相当ヤバい事かも知れん」

「……」

ヤバい事には慣れっこつもりだつたが、CIAと聞くと、さすがの篠原もギクッとする。

「お前、あまり関わらない方がいいぞ。相手はギャングだけじゃないかも知れないんだからな」

「はあ」

篠原はその先輩に礼を言い、防衛省を後にした。

しかし葵は、篠原からロシアの話を聞き、一ヤツとした。

「楽しくなりそうね、護」

「お前なあ……」

篠原は葵の神経の太さに呆れる。

「ロシアの内部で何が起こっているのかなんて私にはどうでもいいわ。でもこれで、どうして黒い救急車を使ってまで大袈裟な事をしたのか、読めて来た気がする」

「どういう事だ？」

篠原が興味をそそられて尋ねる。だが葵は、

「内緒。あんたは口が軽いから教えてあげない」「おい……」

葵は相変わらずだ、と篠原は苦笑した。

「貴重な情報ありがとう」

「たまにはお礼が欲しいな」

篠原が言つと、

「はい、投げキッス」

葵はブチヨツと音だけを聞かせた。

「直接して欲しいんだけど」

篠原のその懇願には何も返事をせず、葵は携帯を切つた。ふと気づくと、沙希がポオツとしている。

（あ、しまつた、沙希ちゃんがいるのを忘れてた）

位置関係からして、葵の投げキッスが沙希を「直撃」してしまつたようだ。

「ごめんね、沙希ちゃん」

「いえ、ありがとうございました!」「

何故か礼を言われ、葵は苦笑いした。

「すみません、篠原さん、私まで乗せてもらつて」

美咲は助手席で恐縮している。彼女と菖蒲は篠原の運転するワンボックスカーに乗つっていた。

「いいのよ、美咲、お礼なんて言わなくとも。護君は私のボディガードなんだから」

菖蒲は後部座席でふんぞり返つて言つた。

「そうね。姉さん抜きでも、美咲ちゃんならビリでもお迎えに行つちやうよ」

篠原がおどけて言つて、美咲はキッとして、

「所長に言いつけますよー」

「どうぞどうぞ。あいつはそんな事では怒りませんので」

「……」

呆れる美咲。すると菖蒲が嬉しそうに、「

「護君、この際だから美咲と付き合いなさいよ」

美咲はギクッとした。篠原は笑つて、

「それはダメ。美咲ちゃんに手を出したりしたら、葵に殺される」

「おかしな事言わないでよ、護君」

菖蒲ははぐらかされたのに気づき、ムッとした。

「それに、美咲ちゃんには神戸じんとう」つていう彼氏がいるしね」

神戸とは外務省の官僚だ。最近はすっかり会う機会がない。

「まあ、外務官僚とまだ続いているの？」

菖蒲も地獄耳だ。大概の事を知つていて、美咲は苦笑して、

「続いてなんかいません。神戸さんとは仕事上の付き合いだけですから」

「神戸が聞いたら、自殺するぞ、美咲ちゃん」

篠原がからかう。美咲はギクッとして、

「そんな事ありませんよ！」

と反論した。

後小松謙蔵は、ギャング達が皆逮捕されたのを知り、激怒した。

「たかが女探偵に何を手こずつてているのだ!? マフィアの名は伊達か！」

後小松はそのまま倒れそうな勢いで怒鳴り散らした。

「次を急がねばならん。すぐに取りかかってくれ。手筈はすんでいる」

彼は乱暴に携帯を切り、ソファに投げつけた。

「使えん連中だ。この取引を最後にするか

後小松はニヤリとした。

「私の力を必要としている連中は、世界中にいるのだからな

後小松は何を企んでいるのだろうか?

茜達三人は、美咲達より一足先に麗奈の事務所に到着した。

「お帰りなさい、先生」

沙希はビクツとしてソファから立ち上がり、麗奈を出迎えた。

「沙希、そんな風に驚かれると、私が貴女を虐待しているみたいだから、もう少し普通にしてくれない？」

麗奈は茜達の視線を気にしながら言った。

「申し訳ありません、先生」

沙希はますます慌てふためいて頭を下げる。葵がニヤリとして、「相当怖がられてますね、先生？」

「もう、葵まで！ 貴女には言われたくないわよ。ね、茜ちゃん？」

麗奈の無茶ぶりに、茜がギクツとした。

「茜、あんた麗奈さんに私の悪口言つたでしょ？」

葵が茜を睨む。茜はビックリして、

「い、言つてませんてばア。所長、勘織り過ぎですよ、もう……」
と麗奈を見た。麗奈は悪びれもせず、肩を竦めてみせた。そして、「で、私に訊きたい事つて何？」

麗奈は葵に向かいに座る。沙希が大急ぎで給湯室に駆け込む。同じ匂いを感じたのか、

「あ、手伝いますよ」

と茜が沙希を追いかけた。大原はそれを見届けてから、

「次のターゲットを予測するつもりですか、水無月さん？」

葵は大原の指摘にニッコリして、

「さつすが、警察庁さんは鋭いわね。そうよ。前の事件の一人の共通点がこの事務所だから、次に狙われるのは誰なのか、推理したいの」

「なるほどね」

麗奈は顎に手を当てて頷く。葵は再び麗奈を見て、

「という事で、よろしくお願ひします
「はいはい」

麗奈は立ち上ると自分の机に行き、ブックエンドに挟んである書類を取り出した。

「例えば、どんな事がわかれればいいのかしら?」

「外科医で腕が良くて若い人。そして、独身でできればハンサム」

葵の言葉に麗奈は呆れた。

「貴女の好みを訊いているんじゃないわよ」

「もちろんです。ハンサムは余計ですが、後は本当に必須条件ですよ。それと、パスポートを持っている事

「は?」

これには大原もキヨトンとした。麗奈は何となく葵の考えている事がわかつたようだ。

「まさか貴女、もしかして……」

「多分、麗奈さんの想像している事と私の考えている事は一致していると思います。後は、意地悪姉さんの意見が聞ければ完璧ですね」

「そうね」

麗奈は葵の推理の大膽さに驚愕していた。大原は呆気に取られたままだ。

「意地悪姉さんて、誰の事よ、葵?」

地獄耳が来た。葵はしまつたあ、という顔をした。

「ああ、あんたまだ私の事務所の鍵のスペアを持ったままなのね!」

麗奈が立ち上がった。菖蒲はまるで篠原と美咲を付き人のように従えて入つて来て、

「あら、あれは私にくれたのではないの、麗奈?」

と惚けてみせた。

「で、葵、答えなさい。意地悪姉さんというのは、誰の事?」

菖蒲は麗奈を無視して、葵に詰め寄つた。

「訊くまでもないだろ。姉さんの事だよ。なあ、葵?」

篠原が嬉しそうに言つた。葵は、このバカ、と彼を睨んだ。

「菖蒲さん、聞き違いですよ。私はそんな事を言つてませんから」

葵は笑顔で応じた。菖蒲はあまりその事で葵を攻めるつもりはないらしく、

「それならいいのよ

とあつさり引き下がつた。彼女も先が知りたいのだ。そして、麗奈を押しのけるようにソファに座つた。

「では菖蒲さん、教えて欲しい事があります」

葵は愛想笑いをして言つた。菖蒲はシンとしたままで、

「何かしら?」

「医療ミスで亡くなつた患者は、通常司法解剖されますか?」

大原がギョッとした。

「そ、そこか……」

彼も葵の推理の外郭に気づいたようだ。菖蒲はフンと鼻で笑い、「遺族からの依頼がない限り、しないわね。医療ミスで亡くなつた患者の遺族はもうこれ以上患者自身を切り刻むのに同意したくないから、尙更よ」

葵はその答えに大きく頷き、

「という事は、患者の正確な死因は、闇から闇となる訳ですね?」「端的に言つてしまえば、そうね。執刀医が隠そうと思えば、本当の死因はわからなくなるわ」

菖蒲も葵が何を言いたいのかわかつたようだ。

「葵、貴女まさか、臓器売買を疑つていいの?」

そこにコーヒーを持つて戻つて来た茜と沙希が現れた。二人は、「臓器売買」という単語を耳にして、ギョッとした。

「ええ。後小松のジイ様がロシアンマフィアと取引するとしたら、それが一番可能性が高いと思います。遺体は解剖されない訳ですか、健康な臓器が使い放題という事になります」

菖蒲もビックリしている。そして麗奈も啞然とした。

「そして、これは可能性の問題なんだけど、大原君」「はい」

大原は自分が指名されたので、緊張して葵を見た。茜も唾を飲んだ。

「金村医師と鳥丸医師の遺体は、どうやつて確認したの?」

「関係者の方に遺体を見てもらいました。それと、身体の特徴を…

…

「つて事は、DNAとかは調べていかないのね？」

葵の指摘に、美咲がビクッとする。

「所長、まさか？」

葵は美咲を見て、

「そのまさかよ。私は遺体がすり替えられていると思つていいの」
篠原も菖蒲も、もちろん麗奈や茜や沙希も驚愕する葵の推理だった。

「臓器売買だけで、後小松のジイ様がロシアンマフィアを使えるとは思えない。だとすると、後は何か？ 人材の提供くらいしか考えられないでしょ？」

「しかし、無理ですよ。遺体をすり替えるなんて……」

大原が異を唱える。茜がそれに同意し、頷く。

「あらかじめよく似た人物を探し出して、更に整形手術とかで似させる事はできるわ。何しろ、お医者様が計画しているんですけど」

葵の説明に麗奈が口を開いた。

「考えられなくもないわね。後小松のジイ様は、腕は一流よ。それくらい造作もなくやつてのけられるわ」

「という事は……？」

菖蒲が震え出した。

「金村君は、生きているかも知れないという事？」

「その可能性はあります。但し、そのために誰かが犠牲になつていいのですから、あまり喜べる事ではないですけど」

葵は辛そうに言った。菖蒲もそれを理解しているのか、黙り込んだ。本当は嬉しいのだろうが。

「一流の外科医を人材派遣して、マフィアのボスを助けさせるつもりか？」

篠原が言った。葵は肩を竦めて、

「そこまであのジイ様が約束をしているかはわからない。もしかすると、单なる人材派遣かも知れないし」

麗奈が立ち上がる。

「葵の考えはわかつたわ。

じゃあ後は、私がターゲットを絞るだけ

ね

「はい、お願ひします」

葵は微笑んで応じた。

麗奈は棚からファイルをいくつか抜き出した。

「今までの葵の推理と、私のところにあるクライアントの資料を総合的に分析してみると、この辺が怪しいわね」

彼女は葵に資料を手渡した。葵はそれを凄まじい速さで読む。どう見ても只捲っているだけにしか見えないが、彼女は全て読破しているのである。

「医療ミスを連発している若い医師。結構いるんですね」

葵は「うんざり」した顔で麗奈を見上げる。

「そうよ。お医者様つて、イケメンも多いでしょ？　私は興味ないけどね」

麗奈は何故か一やりとして菖蒲を見る。菖蒲はその視線に気づき、

「何？　何なの、今のは？」

「別にイ」

菖蒲の憤激を軽くいなす麗奈。さすが手馴れている、と篠原は感心した。

「件数は絞れたわ。このくらいなら、手分けをして待ち伏せもできるわね」

葵の言葉に、茜がギョシとする。

「ええ！？　全部見張るつもりですかア？」

「そうよ」

あいつさつと肯定する葵に、茜は愕然とし、美咲を見た。美咲は葵を見て、

「あちらさんは、焦っている、という事ですね？」

「そう。早いとこ片づけて、取引を終了したいはず。早ければ今夜、遅くとも明日の夜には動くはずよ」

大原が、

「応援を要請します」

「お願ひね、大原君」

葵がウインクをすると、それを茜が睨む。葵にはそんな気はさらさらないのだが、茜はここのところ被害妄想なのだ。

「さてと。もう菖蒲さんや麗奈さんは襲撃されたりしないだらうけど、ガードは続けた方がいいから、まとめて面倒見てね、護」「えーっ？ 姉さんと麗奈さんのガードは、ハードなんだよなあ」篠原の愚痴に菖蒲がムツと知る。

「何よ、麗奈はともかく、私のガードをするのが嫌なの、護君？」

「菖蒲、日本語がおかしいわよ。護は、貴方のガードが嫌なの。わかつた？」

麗奈のチャチャが入る。篠原は苦笑いして誤魔化そうとしたが、菖蒲が応じない。

「麗奈、私の弟を呼び捨てにしないで。護君を呼び捨てにしていいのは、葵だけよ」

今度は葵が苦笑いする。篠原は呆れ顔で、

「大丈夫だよ、ガードはするから。言つてみただけさ」と火消しに動いた。

「揉め事起こさないでよ、護」

葵が小声で奢^{たしな}める。

「わかつたよ」

篠原は肩を竦めた。

「それならいいのよ」

菖蒲はソソとして麗奈から田を逸らした。麗奈はクスッと笑い、「取り敢えず、そんなとこかしら、皆さん？」

と一同を見渡す。そして、

「では、食事に行きましょう。今日は菖蒲が奢ってくれるそうです」「ちょっと、何言い出すのよ、麗奈！」

菖蒲は仰天して立ち上がった。篠原が、

「「チになります、姉さん」

と調子に乗る。菖蒲はムツとしたが、

「わかつたわよ。私が『ご馳走するわ』と何故か諦めた。葵はニヤツとして、（やつぱり、金村さんが生きているかも知れないという事が嬉しいのね、菖蒲さんは）

「私、後から合流します」

美咲が言った。葵は意外そうな顔をして、「あら、どうして？」

「警察病院に行きますの」

美咲がそう答えると、茜が口を挟む。

「ああ、やつぱり美咲さんてば！」

「ち、違うわよ！」

茜が何も言つていないので、美咲は酷く慌てていた。

「何なのよ、美咲ったら？」

葵はキョトンとしてしまつた。

皆村はベッドの中でボンヤリしていた。術後の経過は、医師も驚くほど順調で、数時間前まで生死の境を彷徨つていた人間とは思えないと言つた。

（昔から、丈夫なのが取り柄だったからな）

苦笑いする。

「暇だなあ……」

美咲が帰つた後、課長もすぐに帰つてしまい、その後刑事課の連中が何人か見舞いに訪れ、女性警官達もきてくれたが、皆すぐに帰つてしまつ。

「美咲さん」

またつい名前を呟いてしまつた。

「はい」

え？ また？ そんな、まさか。幻聴だろ？ 皆村は担当医を呼ぼうとした。

「寝てらしたのですか？」

確かに美咲がそこにいた。花束を抱えて。

「あ、いえ、起きました」

皆村は、また独り言を聞かれてしまったと焦っていた。

「この花瓶でいいですか?」

美咲はベッドの傍らにある何も入っていない花瓶を手に取った。課の誰かが、ナースルームかどこから借りて来たのだが、連中は揃いも揃って気が利かない奴らで、花を持って来る者がいなかつたのだ。酷い奴は、鉢植えをもつて来た。俺に退院するなつて事かよ!?

皆村は呆れてそいつを追い返した。

「は、はい、ありがとうございます」

「さつきは手ぶらで来てしまって、申し訳ありませんでした」

美咲は「コツとして病室を出て行つた。

(美咲さんなら、来てくれるだけで嬉しい)

皆村は「やつこしてしまつた。

「あ、そうだ、茜」

出かける間際に葵が言い出す。

「え? 何ですか、所長?」

思わずビクッとする茜。

「ここ」のパソコン借りて、メールをチェックして。情報屋の皆さんから、何か来ているかも知れないわ

「は」

茜はホッとして沙希を見る。

「ひからでどうぞ」

沙希は自分の席のパソコンを示した。

「ありがとうございます」

茜は礼を言つて席に着く。

(沙希ちゃんて、茜には興味ないのね。子供だから?)

そんな風に想像したので、葵は思わず笑つてしまつた。

「何こやつこしてるんだよ、葵?」

篠原が小声で尋ねる。葵は、

「沙希ちゃん、女性が好きみたいだから、諦めてね」「は？」

篠原は素つ頓狂な声を出してしまった。

「来てますよ、所長」

バカ話をしているうちに、茜が仕事をすませた。

「何かためになる事はある？」

葵は茜の後ろに立ち、モニターを覗き込む。その時沙希が葵と茜に挟まれる形になり、彼女は顔を赤らめた。

「ええ、ありますよ。所長の読み通り、ロシアンマフィアに氣をつけろって書いて来ています」

「他には？」

葵はメールに夢中になり、沙希の肩を抱いて居るのに気づかない。沙希は卒倒しそうだ。

「後小松のジイ様の事も書かれています。医療ミスも捏ね上げの可能性があるようです。但し、何れの情報屋さんも、氣をつけないと言添えてこますね」

茜が振り返ると、葵は沙希をギュッと抱き寄せて、「氣をつけなければならぬのは、あちらさんの方だとこいつ事をわからせてあげないとね」

とうとう沙希は氣を失つてしまつた。

「ああ、沙希ちゃん、どうしたの？」

葵が驚いて沙希を支えた。

「何よ、その子も麗奈と同類なの？」

菖蒲が呆れた調子で言い放つ。麗奈は沙希に近づいて、「彼女は美咲ちゃんじゃなくて、葵の方が好きみたいね」と篠原を見た。篠原は肩を竦めて、

「あーあ、俺は二重に苦しまなくけやならないんですか？」

「そういう事ね」

麗奈は楽しそうだ。

「しつかりして、沙希ちゃん！」

葵はそんな冗談に付き合いつもりはないらしいへ、真剣に沙希に呼びかけていた。

美咲が花瓶に花を挿して病室に戻ると、皆村はビクンとして彼女を見た。

「どうされたんですか？」

「あ、いや、その……」

まさか、美咲が戻つて来るのを心待ちにしていたとはいえない皆

村は、動搖を隠せない。

「本当にごめんなさい」

美咲が花瓶を置くなり頭を下げたので、皆村はビックリした。

「な、何ですか？ 自分は神無月さんに謝られる理由はありませんよ」

それでも美咲は目を潤ませて、

「皆村さんが狙撃されたのは、私達のせいです。ごめんなさい」

「そんな事、ないですよ。警察官なんて、怨まれてなんぼですから、

気にしないで下さい」

例え美咲のせいで撃たれたのだとしても、それはそれで嬉しい皆村なのだ。もはや変態である。

「ありがとうございます」

美咲が潤んだ目で皆村を見つめる。油断していた彼は、それを正面で見てしまった。

「……」

頭の中が真っ白になつた。思考回路が飛んでしまつたようだ。

「皆村さん？」

皆村の様子が変なので、心配になつた美咲が声をかける。

「あ、ああ、すみません」

皆村は美咲の顔をまともに見ないよつにして答えた。

「ありがとうございます、皆村さん。そう言つてもらえて、気持ち

が楽になりました」

「は、はい」

美咲からいい香りが漂つて来る。皆村の鼓動が高鳴つた。

「貴方を狙撃した犯人を捕まえました。今、警視庁で取り調べされているはずです」

「そ、そうですか……」

本当に狙撃犯を捕まえたのか？ 皆村は何となく落ち込んでしまつた。

（やつぱり、俺は美咲さん達の足手まといなのだろ？）

そして午後10時。やや空き始めた大通りを、不気味な車両が走る。

黒い救急車だ。サイレンは同じだが、赤色灯ではなく、灰色だ。全体的に薄気味悪い。周囲のドライバーは、その異様な車体にギョッとする。

黒い救急車は速度を増し、サイレンの音を大きくせると、交差点を左折し、ある病院を目指した。

「来たみたいね」

病院の車寄せの陰に潜んでいる美咲が囁く。

「当たりでしたね、私達」

茜が嬉しそうに応じる。

「じゃあ、鬼退治に行きますか、美咲さん」

茜の言葉に美咲はクスッと笑い、

「はい、桃太郎さん」

「えーっ、せめてかぐや姫にして下さいよ」

茜の意味の分からないボヤキに、美咲は呆れて、

「何よそれ？」

と思わず突つ込む。そんな一人の会話を遮るように、黒い救急車が車寄せに滑り込んで来た。

「まだよ、茜ちゃん」

「わかつてますよ」

黒い救急車は、照明を落とした玄関の前で停止する。中から黒い隊員服に身を包んだ連中が三人出て来て、病院の中になだれ込む。

「今よ、茜ちゃん！」

「はい！」

忍び装束姿の一人は、その偽隊員達を追いかけ、打ち倒す。相手は素人のようで、たちまち気を失つた。

「所長、黒い救急車を抑えました」

美咲が携帯で葵に連絡した。

「そつちだつたのね。了解。後は大ねずみのところに行つて、一網打尽よ」

「はい」

美咲は携帯を切ると、倒した偽隊員の変装を解いた。

「あつ！」

その正体を知つて、茜は驚いた。一人は後小松総合病院事件の有力容疑者である海藤充。そしてもう一人は大日本医科大学付属病院事件の有力容疑者である八幡原栄伍やはたはら えいごだつたのだ。

「なるほどね。自分が疑われない病院に、隊員に変装して乗り込む手筈だつたのね」

美咲は後小松の仕掛けたトリックを見抜いた。

「そうかア、そうすれば完璧なアリバイが作れますよね」

茜がポンと手を叩く。

「そして、事件に関与させる事で裏切りや密告も封じる事ができるわ。あの院長、相当な悪ねわる」

美咲は後小松の狡猾さに虫酸が走った。

一人が潜んでいたのは、純心堂医大付属病院である。そこの外科医である松尾和馬は、医療ミスを犯し、外科部長である板倉光雄に頸で使われていると評判だつた。しかし、松尾医師自身は、その事実を否定し、麗奈に訴訟を依頼していたのだ。いくつかある黒い救急車出現候補の中でも、最有力だつた病院である。

「取り敢えず第一段階終了ね」

美咲は三人目を縛り上げて言った。茜は三人目の白人を見て、「こいつだけ知らないんですけど」

「多分、ロシアンマフィアよ。抵抗された時のために、一人だけ加わっていたんでしょ」

それでも、美咲達にしてみれば、ものの数ではなかつた。

「茜ちゃん、一人の服を脱がせて」

「えつ？ 美咲さんたら、大胆ですね。こんなところで……」

茜が巫山戯て言った。美咲は真っ赤になつて、

「違うわよ！ 隊員に成り済まして、大ねずみさんのところに行くの！」

「わかつてますつて。美咲さんてば、本当に下ネタの冗談にはマジになりますよね」

茜が面白がる。美咲はムッとして、

「一人で行く、茜ちゃん？」

「ああ、ごめんなさい、美咲さん！ 私が悪かつたですウ」

茜は慌てて詫びた。

そして、葵は別の候補の病院から離れ、後小松総合病院に向かつていた。

「どうしてこいつコンビになつたのかしらね」

葵は大原と行動していた。

「さあ、僕にはわかりません」

「多分だけど、茜は貴方と美咲が組むのを嫌がつたんだと思つわ。私なら安心だという事ね」

葵は不満そうに助手席のシートに身を沈める。大原は苦笑いして、「水無月さんは僕じゃあ、そんな気にはなりませんか？」

と妙な事を言い出す。

「その気になつて欲しいのなら、なつてあげてもいいけど？」

葵がおどけて言い出す。大原はビクツとして、

「僕も篠原さんに殺されたくありませんから、その気にはならないで下さい」

「うまく逃げたわね」

「ハハハ」

葵はフツと笑い、またシートに身を沈めた。

「とにかく、後は大ねずみをひつ捕まえて、その後ろにいる親玉まで炙り出さないとね」

葵は前を見据えて呟いた。

黒い隊員服を着て、黒い救急車に乗り込んだ葵、美咲、茜の三人は、敵の本丸である後小松総合病院に向かつていた。

「それでも驚きましたよ。交換殺人だつたんですね？」

助手席で茜が感心したように言つ。ストレッチャーに腰掛けた葵は、

「そんなの、最初の事件でわかつてたぢやないの？ 有力容疑者のアリバイが完璧過ぎて、バレバレだつたわ」

「え？」

葵があつさり指摘した上、運転席の美咲も頷いているので、「もしかして、知らなかつたの私だけですか？」

茜は苦笑いして言つた。

「そうみたいね」

美咲が嬉しそうに言つたので、茜は剥れた。

「何ですかあ、お二人共オ。私がわかつていなゐのを面白がつてたんですかあ？」

「違うわよ。茜ちゃんもわかつてゐつて思つてたのよ」

美咲が言つと、葵は、

「私はあんたが氣づいていなゐ事はわかつてたけどねえ」

「意地悪いですね、所長つてば！ だんだん、菖蒲さんあやぢに似て來てますよ！」

茜が振り返つて言つた。すると葵はムッとして、

「あんな人と一緒にしないでよ！ 冬のボーナス、覚悟しなさいよ！」

「えーつ、そんなあ」

茜は、葵が「最終兵器」を出して來たので、ションボリしてしまつた。

「所長、もうすぐ敵地です」

美咲がハンドルを切りながら叫びた。葵はヘルメットを被りながら、

「さてと。後小松のジイさんの欲の皮がどれくらい厚いのか、確かめに行くわよ」

「はい」

美咲と茜が息を合わせて答えた。

「ねえ」

葛蒲が言う。

「何だよ、姉さん?」

「どうしてここなの?」

葛蒲はご立腹のようだ。篠原は肩を竦めて、

「仕方ないだろ。人の出入りが激しくて、周囲が良く見渡せる場所で、長時間いても怪しまれないところなんて、そうはないんだからさ」

「そうよ、葛蒲、あんまり不平不満ばかり口にしてると、小皺が増えるわよ」

麗奈が嬉しそうに言つたので、葛蒲はムッとした。

「貴女に言われたくないわ」

三人がいるのは、二十四時間営業のコーヒーショップだ。

「オーダーお願いします」

「はーい」

店員は若い女の子ばかりの店だ。篠原がこの店を選んだ最大の理由はそこにあると、長年彼を見て来ている葛蒲は思った。

「俺にはエスプレッソ、もう一杯ね。お二人は?」

「私はブラック」

葛蒲はツンとして答える。麗奈は一ツ「コト女子に微笑んで、

「私は、貴女がいいわ」

「麗奈さん!」

篠原が慌てて遮る。女の子は畳然としていたが、商売上そういう

客もいるのか、すぐに立ち直った。

「冗談よ。カプチーノね」

「は、はい」

女の子はさすがに身の危険を感じたのか、復唱をすると、逃げる
ようにその場を離れた。

「見境がないのね、麗奈

菖蒲が呆れ顔で言つ。

「でも、今の子、可愛かつたよね、護？」

「え？ ええ、そうですね」

篠原は姉の視線を気にしながら答える。菖蒲は、

「護君を呼び捨てにしないでつて言つてるでしょ、麗奈」

「はいはい」

篠原は何も言わなかつたが、麗奈は肩を竦めて「一ヤ一ヤしながら
応じた。その時だつた。

「！」

篠原がバツと麗奈に飛び掛つた。

「いやん、護、こんなところで！」

麗奈はふざけていたが、篠原は真剣そのものだつた。次の瞬間、
麗奈の座つていた椅子の背もたれに、銃弾の痕が着いた。

「え？」

それに気づき、麗奈と菖蒲は仰天した。

（ガラスを貫く音はしなかつた。つて事は？）

篠原は顔を動かさず、周囲を探つた。殺氣を感じようとしている
のだ。

（敵は店内にいる。畜生、全然気づかなかつた）

「そこか！」

篠原は敵の殺氣を感じ、走つた。

「まさか！」

それは店員だった。可愛い女の子が銃を構えていたのだ。

「くそ！」

女性には優しいのがモットーの篠原は一瞬躊躇したが、その子の銃を奪い、右腕をねじ上げた。

「キヤツ！」

その一連の動きで、店内は騒然となつた。

「皆さん、騒がないで！ 防衛省情報本部の者です！ テロリストを確保しました！」

その女の子は、良く見ると日本人ではない。

「まさか、キルギス人？」

キルギスとは、中央アジアの国だ。国民の顔立ちは日本人に似ているが、よく見ると細部は違う。

「そういう事か」

篠原は、何故JIAまで動いているのか、理由がわかつた。

葵達の乗る黒い救急車は、後小松総合病院の裏手にある靈安室の出入り口に回らされた。

「早かつたな。邪魔はされなかつたか？」

後小松自らが出迎えてくれたので、葵はニヤリとした。

「ええ、幸い、全然相手にならなくてすぐに片付いたから、早かつたわ、おじいちゃん」

葵達は一斉にマスクとサングラスとヘルメットを取つた。

「お、お前は！」

後小松は美咲の顔を見て驚いた。

「こいつらは敵だ！ 片づける」

彼の背後に控えていた十人のロシアンマフィアが進み出た。

「またお宅ら？ 弱過ぎて話にならないんですけど」
葵が挑発する。彼女達は一瞬で忍び装束になつた。

「お前ら、一体何者だ！？」

後退りしながら、後小松が叫ぶ。

「少なくとも、おじいちゃんの味方ではないわね」

「その呼び方、やめさせろ！」

後小松の命令で、ロシアンマフィア達が銃やナイフを構えて戦闘を開始した。

「美咲、茜！」

「はい！」

三人はその場から飛び、ギャング達に向かう。

「この隙に……」

後小松は、すでに計画が破綻した事に気づいたらしく、逃亡した。

「あ、待て、ジジイ！」

葵がギヤングの一人を蹴倒して叫ぶ。

「こらあ、待て！」

一番に抜け出した茜が後小松を追う。

「茜、逃がしたら、夏のボーナスもなしよ！」

「えええ！？」

茜はテンションが下がりかけたが、

「それだけは嫌ですウツ！」

とダッシュ。美咲は一人の言動に呆れながらも、ギャング達を次々に倒した。

「くそ」

後小松は茜が追つて来るのを知り、舌打ちした。そして、廊下の突き当たりの扉の前に来た。

「この扉は、私にしか開けられん」

彼は扉のボタンでパスワードを入力し、中に入った。

「待て、このお！」

茜が到着した時、扉は完全に閉じていた。

「あ！」

茜は、ボタンをジッと見た。

「どこを押したのかわからば、開けられるはず！」

彼女は全神経を集中し、ボタンを睨んだ。

篠原は大原に連絡し、キルギス人の殺し屋の女の子を連行しても

らつた。

「それにしても、あんな若くて可愛い子がテロの実行者だなんて、とんでもないぜ」

篠原は「若くて可愛い子」がテロリストになるのを憂えているだけなのだろうか？

「旧ソ連から独立した国は、事情が複雑ですからね。篠原さんの言つていたロシアの動きつて、その辺と関係あるんじゃないですか？」

大原は腕組みして分析する。篠原は頷いて、「多分な。周辺国の不穏な動きをしている連中に、ロシアがピリピリしているのは確かだ。そこを突こうと動いたのが、後小松と繋がつている奴らだろう」

「ええ」

篠原は大原を見て、

「俺は本部に戻つて、もう一度その辺の関係を探つてみる。お前は、葵達の応援に回つてくれ」

「はい。でも、菖蒲さんと麗奈さんのガードはいいんですか？」

「二人には、葵の影をつける。大丈夫だよ。葵のマンションに連れて行つてくれ」

篠原はそれだけ言つと、店を出て行つた。

「さ、行きましょうか、大原君」

麗奈が嬉しそうに言う。

（この人、女性が好きなんだよな）

奇麗な女性と一緒にいると、茜がまたヤキモチを妬くのではない
かと心配な大原だったが、彼女のヤキモチは、それはそれで嬉しかつたりする。

「はい」

菖蒲はすでに先を歩いていた。

（さすが、篠原さんのお姉さんだなあ。全然怖気づいていない）

大原は感心を通り越して、呆れていた。

「はあ、はあ、はあ」

「こんなに走つたのは、いつ以来だ？」後小松はそんな事を思いながら、病院内の秘密経路を走つていた。

「ロシア人共は、あの女達が皆始末してくれる。もつ、あんな役立たずとは縁切りだ」

後小松にとつてはビジネスが最優先。恩も義理もない。

「私だ。計画は変更する。金村と鳥丸は、ロシアには送らない。二人には、もつと金を出してくれるところに行つてもらう」

後小松は携帯でそう告げた。そして、茜が追つて来ていないので

知ると、

「やつと諦めたか」

と咳き、悠然と歩き始めた。ところが、天井が騒がしくなつた。

「何だ？」

後小松はビクッとして立ち止まり、天井を見た。

「えい！」

「えい！」
というかけ声と共に天井が破られ、その破片と共に茜が落下して來た。

「うわお！」

後小松は慌ててそれをかわし、また走り出す。茜は顔に着いた蜘蛛の巣を取りながら、

「もう、あのパスワード、全然わからなかつたあ！」

どうやら、パスワードが解けなかつた茜は、通気孔を通りてここまで来たらしい。

「こら、待て！ あんたを逃がすと、来年の夏のボーナスも逃げちゃうんだから！」

茜はビュンと加速し、後小松の前に出た。

「ぐは！」

後小松はいきなり目の前に現れた茜に驚き、止まる事ができずに彼女にそのまま接近した。

「いやああ、変態ジジイ！」

茜は後小松が襲い掛かつて来たと思い、平手打ちを食らわせた。

「ゲヘッ！」

後小松はその平手打ちをカウンターで受けたので、そのまま横に飛び、壁にぶつかって倒れた。

「え？」

茜は、変態ジジイから逃れるのに必死で、後小松が倒れたのに気づくまで、時間がかかった。

「おお」

彼女は倒れている後小松にやつと氣づき、爪先で確認する。

「氣を失ってるみたい」

そして嬉々として携帯を取り出し、

「所長、変態ジジイを倒しました！」

と報告した。

「捕まえたみたいよ」

葵は携帯をしまいながら言った。

「そうですか。やっぱり、ボーナスがなくなるのは困るんでしょうね」

美咲は倒したギャング達を縛り上げながら答えた。

「さてと。」これで一方の親玉は捕まえたけど、もう一方の親玉が厄介ね

「ええ」

葵は篠原から、キルギス人の殺し屋の話を聞いていた。

「CIAも動いているらしいから、相当な敵ね。後小松のジイさん

が顎で使っていたのなんて、下つ端もいいところでしょ

「そのようですね」

葵はニヤッとして、

「楽しみね、美咲」

「そうですか？ 私はそれほど楽しくありませんけど」

「そう？」

所長はどういう性格なのだろう？ 長い付き合いの美咲が、そう思ってしまった。

篠原は防衛省に戻り、パソコンで検索していた。

「あつた！ これだな」

その情報は、ロシアの周辺でロシアからの圧力を潰すために動いているテロリスト達の活動範囲の地図だった。CIAも周辺諸国への影響を危惧し、動いている。中国も軍情報部が動いているようだ。

「葵、こいつは相手がでか過ぎるぞ」

篠原は腰が引けてしまいそうだつた。

「でも、あいつは引かないよなあ。売られた喧嘩は、誰が何と言おうと買う奴だからなあ」

しかし、彼はそんな葵の事が好きなのだから、どうじょうづもない。

「は！」

後小松謙蔵が意識を取り戻したのは、院長室だった。両手は後ろで縛られており、足首も縛られている。床に転がされたままのは、彼にしてみれば、相当屈辱的だ。

「さあ、話してもらいましょうか、拉致したお医者さんの居所を」葵が仁王立ちで言う。後小松はその時ハツと名案を思いついた。

「だ、誰だ、あんたらは？ ここはどこだ？ 私は誰なんだ？」

そう、記憶喪失のフリをしようとしたのだ。

「あれれ、強く殴り過ぎましたか？」

茜が後小松の顔を覗き込む。

（このガキが！）

後小松はそう思ったが、

「あんたは誰だ？ 私はどうして縛られているんだ？」

と惚けた。茜は首を横に振つて肩を竦める。

「記憶がないみたいですね。どうしましようか？」

彼女は葵に尋ねた。すると葵はニヤリとして、

「そういう時は、もつと強く殴ると思こ出すやつよ。医学書に書いてあつたわ」

(そんな事書いてある医学書なんてあるか!)

後小松は心の中で叫んだ。

「何で殴つてみますか?」

美咲が言った。葵は部屋の中を見渡して、

「ああ、そのブロンズ像なんかいいんじゃない? 美咲、殴つてあげて」

「はい」

美咲がツカツカと部屋の隅に置かれているブロンズ像に近づき、それをひょいと手に取る。

(え? そのブロンズ像は、一十キロくらいあるんだぞ。どうしてそんなに軽く持ち上げるんだ、お前は!?)

全身から嫌な汗が出る。

「ああ、そうそう、頭砕けちゃつと困るから、手加減してね、美咲」

後小松には、葵の顔が悪魔に見えた。

「行きます」

美咲がブロンズ像を後小松の頭の上で振り上げる。

「うわあああ、嘘、嘘だ、嘘。記憶はなくなつていないから、殴らないでくれえ!」

後小松は涙を流して叫んだ。

「全く。この期に及んで、往生際が悪過ぎるのよ、院長」

葵は後小松にドコピンをして言った。

第十七章 敵地へ 10月3日午前1時

黒い救急車事件の首謀者の一人である後小松謙蔵に全てを喋らせた葵達は、彼の命が狙われると判断し、後小松の身柄を葵のマンションに移送した。

「やあ、茜ちゃん。大活躍だつたみたいだね」

先に到着していた大原が、マンションの部屋の前で出迎えた。

「えへへ」

茜は照れ臭そうに笑った。葵が、

「二人は？」

「中です。葵さんの影さん達がついてますよ」

大原の答えに葵は、

「フーン」

と彼と茜を見比べる。

「な、何ですか、所長？」

茜が顔を赤らめて口を尖らせる。葵はニヤツとして、

「別にイ。大原君、ありがとね」

と言い、ウインクをした。途端にムツとする茜。苦笑いする大原。呆れる美咲。

「とにかく、このジイ様を守るのは癪に障るけど、いろいろ知つてから狙われると思うの」

うるさいので眠らされてしまった後小松は、台車でここまで運ばれていた。

「そうですね。相手が相手ですから、きつちり話をつけないと、いつまでも狙われるでしょうね」

大原は後小松を哀れむように見た。

「こいつ、私に襲いかかって來たんですよ、大原さん。取調べで苛めて下さい」

茜が直訴する。大原は微笑んで、

「そつなの。よし、厳しく取り調べるよ」

「お願いします！」

茜は嬉しそうだ。葵が、

「大原君が取調べをする訳ないでしょ、どこまでおバカなの、あんたは？」

と茜を窘める。茜はそれでも、

「そんな事、わかつてますよお。でも、私がお願いすれば、大原さんは願いを叶えてくれますよね？」

大原は微笑んだままで、

「もちろんだよ」

葵は、このバカツップルが、と心の中で思つて、美咲を見た。美咲は肩を竦めてみせた。

「護はもう及び腰なんだけど、私はとことん行くから、頼むわよ、二人共」

「はい」

美咲が答える。茜は、

「当つたり前です！ こんなエロジジイの仲間なんて、のさばらせていはいけません！」

完全に個人的感情で動こうとしている茜を見て、葵は溜息を吐いた。

（私も、今回の敵は許せない）

美咲は、茜ほどではないが、犯行グループに怒りを感じていた。
(皆村さんのためにも、絶対に一網打尽にする)

彼女の決意は固かつた。そんな思いを皆村が知れば、悶絶死してしまうだろう。

葵に及び腰呼ばわりされた篠原は防衛省を出て、港に向かつていた。

（優秀な外科医の密輸か。とんでもない事を企むジイさんだ）

黒い救急車に拉致された金村医師と鳥丸医師が、港の倉庫に監禁

されているのを後小松から聞き出した葵が、篠原に頼んだのだ。

「何で俺が……」

と言いかけ、そもそものきっかけが自分の姉の菖蒲あやめにある事を思い出した彼は、葵に反論するのを諦め、素直に現場に向かった。

「葵のお礼のチューでも当てにして、頑張るかな」

自嘲気味な篠原である。

「おつと」

ヘッドライトを消し、車を停める。見張りの姿が目に入ったのだ。
(銃を持つてるな。ま、関係ないか)

篠原は忍び装束に着替え、闇の中を走る。いきなり眩しい光が彼を照らし出した。

「何！？」

篠原は度肝を抜かれた。彼は完全に待ち伏せされていたのを悟つたのだ。

「たつた一人で来るとは、どうしようもなくバカな奴か、本当の勇者のどちらかだな」

どこかで聞いた事がある声。微妙に記憶の琴線に触れる、微妙に訛りのある言葉だ。

「誰だ！？」

篠原は眩しさに耐えながら怒鳴つた。

「私を忘れたのかね、忍者君」

一人の男が、光の中に姿を現す。しかし、その容貌は、強烈な逆光のために識別できない。

「悪いが、俺は男の事を記憶するなんていう野暮な真似はしないんだよ」

「相変わらず、減らす口を叩くな。そつか、忘れてしまったのか」「だから誰なんだよ、てめえは！？」

焦れつたくなつて叫ぶ。するとその男はゆっくりと前に進み出た。

「私の名は、エクセル・ピクノ・ルミナ。イスバハン王国の国王である

「何イツ！？」

篠原の記憶が甦る。三ヶ月前、この手でぶちのめし、強制送還した腐れジジイだと。

「貴様、性懲りもなく抜け抜けと……」

「私は密入国したのを見つかり、本国に送り返されただけだよ。残念だったね、忍者君」

エクセルはその狡猾な笑みを篠原に見せた。篠原は周囲の敵の動きに警戒しながら、

「もうイスバハンは王国じゃないぞ。貴様は只の老いぼれだよ」

「違うな。確かに私は国王ではなくなったが、もう一つの顔であるスイスのメガバンクの頭取の肩書きはそのままだよ」

エクセルの言葉に、篠原は歯軋りした。

「くそ……」

日本政府そのものが加担したその事件は、有耶無耶のまま闇から闇へと葬り去られた。それは葵がイスバハンの王女ファラを気遣い、意図的にそうさせたのだ。

（葵の思いを取りやがって、このクソジジイめー！）

篠原の全身に怒りの炎が渦巻く。

「こんな形で君達に復讐できるとは、本当に幸運だ。君の仲間も全員、後から君のところへ送つて差し上げよう、忍者君」

エクセルは勝ち誇つて言い放つ。篠原の怒りは頂点に達した。

「ふざけるなアツ！」

彼はまさに目にも留まらぬ速さで動き、銃弾を握り潜つてエクセルに接近した。

「おつと」

エクセルは後ろに飛び退いた。

「君の相手は、私ではなく、この者達がするよ」

その声と同時に現れたのは、一メートルを超す巨体の一人だった。

「やめとけ。怪我するだけだぞ」

「そうかな？」

エクセルの挑発めいた言葉の次に、その巨人の攻撃が始まった。

「ぬお！」

見た目より遙かに速い身のこなしで、一人は篠原に押しかかつて来た。

「何だよ、案外やるじゃないか」

篠原は「ヤリとしてその攻撃をかわす。

「でも悲しいかな、俺はお前らよりずっと強いぜ」

その言葉が理解できたのか、巨人一人は怒りの雄叫びを上げて、篠原に突進した。

「はい、おしまい」

篠原は一人をかわしながら、それぞれの首に手刀を叩き込んだ。

「グヘ……」

巨人一体は呆気なく倒れた。

「む？」

その隙にエクセルは車で逃亡していた。

「くそ！」

倉庫の中はもぬけの殻で、金村医師と鳥丸医師の一人の姿もなかつた。

「やられた……」

エクセルの挑発に乗つてしまつた事を悔やむが、今更そんな事を考えてみても仕方がない。

「葵にどうされるなあ……」

篠原は溜息を吐いた。

葵は、篠原からの連絡で、エクセルが絡んでいる事を知り、ギヨツとした。

「あのジイさん、まだ懲りてなかつたのか」

「スイスの方も、潰しておくべきでしたね」

美咲も悔しそうだ。

「それにも、護はドジッたわね。後でお仕置きしなくちゃ」

葵がそう言つと、

「どんなお仕置きするの？」

麗奈が嬉しそうに口を挟む。

「護は、葵から『お預け』つていう一番辛いお仕置きをされてるから、大丈夫でしょ？」

菖蒲の痛烈な皮肉に、葵は苦笑いした。

「行くわよ、美咲、茜

「はい！」

三人は忍び装束のままで部屋を出て行つた。

「ねえ、エクセルって誰？」

菖蒲が取り残された大原を見る。

「え？」

いつの間にか、彼は菖蒲と麗奈に詰め寄られていた。

「教えて、大原君」

麗奈が妙に色っぽい声で言つ。

「ハハハ……」

早く帰りたい。大原は心の底からそう思つた。

「陛下、『ゴコマツの口を封じた方が良いのではないですか？』
エクセルの側近で、彼と共にイスバハンを脱出した男が言つ。
「そんな事はもう手遅れだ。一刻も早く、日本を出る。それが一番
なのだ」

エクセルは後部座席で眠つてゐる金村医師と鳥丸医師を見て、
「我らには、商品があるのでからな」と呟いた。

「見通しが甘かつたわ。エクセル元国王がイスバハンを出て暗躍しているなんて、全然情報がなかつた」
葵は美咲の運転する車の助手席でぼやいた。美咲は、

「仕方ないですよ。あの人も裏社会のプロです。しかも、テロ国家

を担つて来ていたのですから、その筋のルートもあるでしょうし、まだ協力してくれる組織も多いでしょう」「

「それで、ロシアンマフィアとうまい事やつてる後小松に目をつけ、甘い汁を吸つていたら、私達が絡んで来たのでついでにリベンジつていうのが、一番ムカつくのよ」

葵は、自分達が「ついで」だつた事に腹を立てているらしい。「どつちにしても、みんなぶつ飛ばしちゃいましょう。それが一番です」

茜が後部座席から嬉しそうに口を挟む。葵は茜を見て、

「あら、珍しく意見が合つたわね、茜」

「そりや、私は所長を尊敬しますから」

茜は満面に笑みを浮かべて言つ。葵は呆れ顔で、
「嘘臭うそくさ」

「えええ！？ どつしてですかあ？ ホントですよ、所長」

茜は妙に慌てている。葵はニヤリとして、

「ボーナスが復活しないかなつて思つてるでしょ？」

図星を突かれ、ギクッとする茜。葵は笑つて、

「心配しなくとも、冬も夏もボーナス出すわよ」

「わーい！ 所長、一生ついて行きます」

茜の露骨なお追従つこしよつに葵は苦笑いして、

「一生はついて来ないでね」

と応じた。

篠原は氣絶させた大男の一人を締め上げ、エクセル達がどこに向かつたのか聞き出した。

「新潟だと？ 船でウラジオストックにでも逃げるつもりか？」

彼は大原に大男二人の件を連絡し、エクセルを追つた。

「あのジジイ、里の撻がなれば、粉微塵にしてやりたいくらいだ

！」

篠原は怒りに任せて怒鳴り散らしながらワンボックスカーを走ら

せた。「里の掟」とは、最強の忍びである彼ら月一族の憲法のようなもので、その中の一つに「殺すべからず」がある。どんな敵も命を取つてはいけないというものだ。

葵達も、篠原からの連絡で新潟へと進路を変更していた。

「ロシアに行かれてしまつたら、話がややこしくなるから、何としても日本でケリをつけるわよ」

葵は前を見据えたままで言つた。

「はい、所長」

美咲と茜が答える。

「それから、CIAや他の国の妙な連中に私達の獲物を取られるのも癪に障るから、誤情報をばらまいといつて、茜」

「はい！」

茜は嬉しそうにミニパソコンを操作し始めたが、美咲は呆れて、「所長、そこまではしなくても……」

「私だつてやりたくないけど、あの人人がうるさいでしょ？」

葵はムスッとして言つた。美咲も「あの人」の性格を思い出し、「そうですね」

と納得してしまつた。

その当の「あの人」、星月菖蒲は、疲れたのか、眠つていた。

「大人しくしてれば、美人なのになえ」

そんな寝顔を松木麗奈が微笑んで見ている。彼女も妙な趣味を前面に押し出さなければ、知的美人であろう。

「麗奈さんも休んで下さい。我らが一族の誇りにかけてお守り致します」

葵の影達が麗奈に言つた。麗奈は「ムッとして、

と言つてから、影の一人の女性を見て、

「一緒に寝ない？」

「え？」

その影はギクッとした。麗奈は一ヤツとして、

「冗談よ。お休みなさい」

と言つと、ソファに横になり、毛布を被つた。影達は顔を見合わせ、溜息を吐いた。

大原は、茜からのメールで、エクセル達が新潟に向かっている事を知つた。

「緊急配備をしますか？」

大原は何故かその質問を葵にしていた。

「私は貴方の上司じゃないわよ、大原君」
携帯の向こうで、葵の笑い声が聞こえた。

「いえ、でもその……」

勝手に配備したら、後で怒られそうだしとは言えない。

「緊急配備はいらないわ。連中、何かネットワークがあるみたいで、
警察の情報が漏れてる恐れもあるし」

「ええ？ そうなんですか？」

それは葵のハツタリだ。警察組織を動かさないための作戦である。
「とにかく、気を遣つてくれてありがとう。今度奢らせてね」

「はあ」

水無月さんは茜ちゃんがいるのとわざとそんな事を言つたのかな、
などと邪推してしまう。

大原の推理は、邪推ではなかつた。葵の話を聞いていた茜が剥れる。

「奢りせてつて、どういう事ですか、所長？」

「つるさいなあ、あんたは。奢るのはあんたの役目でしょ、茜」
葵のその返しに、茜はドキッとした。

「え、それって、私が大原さんに抱かれろつていう意味ですか？」

美咲は危うくガードレールに車をぶつけてしまいそうになり、葵

は呆れ返つて何も言わない。

「茜ちゃん、あまりビックリする事言わないでよ」

美咲はルーム//ラー越しに茜を睨んだ。

「自分の願望をこちいち口にしないの、茜」

葵は前を向いたままで言つた。茜はその言葉に赤くなり、

「が、願望じやないですよー」

と慌てて否定する。

「うるさいから、寝てなさいー。」

「はー」

葵が本当に怒り出したので、茜は大人しくした。

第十八章 リベンジ合戦 10月3日午前6時

葵達の乗る通称「茜号」は、関越自動車道を一路新潟へと走っていた。

「所長、連中はNシステム（顔認識システム）を警戒して、脇道を走っているはずです。高速で行くのって、間違つてませんか？」

茜が意見した。すると葵の代わりに美咲が、

「そうじやないのよ、茜ちゃん。あの人達の行く先がわかっているから、先回りするの」

「え？ 行く先がわかっているんですか？」

茜はキヨトンとした。葵は欠伸をしながら、

「護が突き止めてくれたのよ。木偶の坊が一人、泣きながら教えてくれたようよ」

「は？ デクノボウですか？」

茜はますますチンパンカンパンだ。

「連中、まさか私達が先に着いているなんて夢にも思わないでしょうから、楽しみよ」

葵は嬉しそうだ。茜はウンザリ顔で、

「そうですか」

とだけ言い、シートにもたれた。

一方、逃げるエクセル達は、一般道、それも国道の旧道を乗り継ぎながら、新潟を目指していた。

「追尾して来る車はいないな？」

エクセルは部下に尋ねた。

「はい。どの車も、ついて来ていません」

「念のためだ、その道を右折しろ」

「はい」

車は右折したが、後続車は直進して行つた。

「よし」

エクセルはニヤリとした。

「！」の私に泥水を舐めさせた事、たっぷりと後悔させてやるぞ、忍者共め！」

彼のところには、篠原に締め上げられた大男から連絡が入り、行き先を告げた事を知っていた。

「罠とも知らずに、わざ、急いでおるだらうな、愚か者達がエクセルは高笑いをした。

美咲が速度を気にしながら、葵に尋ねる。

「所長、罠の臭いがするのですが？」

「ああ。それはわかつてゐる。でもね、罠とは知らずに近づくのと、知つて近づくのとでは、全然違つわよ」

葵は後部座席を見て、

「で、茜、首尾はどう？」

茜はミニパソコンから顔を上げて、

「バツチリです、所長。情報屋さんから、ビリのおバカさん達が連中に手を貸しているのか、全部教えてもらいました」「名前を教えて。お歳暮を贈るつて連絡するから」

葵がニヤツとして言つと、美咲と茜はビクッとした。

「所長、あまりやり過ぎない方が……」

美咲は前を向いたままで話す。葵は助手席にふんぞり返つて、「心配しなくとも、程々にしつくわよ。地元の警察にちょっと密告のメールを送るだけだから」

「……」

葵の陰険な作戦に、美咲と茜はルーム://ラー越しに顔を見合わせてしまつた。

「それにしても、あの元国王、何を血迷つてリベンジ仕掛けってきたんだか。死ぬほど後悔してもらつわ」

葵は嬉しそうだ。茜は思つた。間違つてもこの人とだけは敵対し

てはいけないと。

「はい」

「機嫌な葵は、篠原からの電話にも愛想良く出た。

「どうした、具合でも悪いのか？」

「何でよ！？」

葵は途端に機嫌が悪くなる。篠原さん、もづけようと所長の扱い方、勉強して欲しい。美咲は溜息を吐いてそう思った。

「いや、お前の『機嫌な声』を聞いたのは、あの夜以来だからさ」

「あの夜つて、どの夜よ！」

ますます機嫌が悪くなる。篠原は笑つて、

「まあ、『冗談はともかく、エクセルの奴、ノシステムに全く引っかかっていないらしい。』『』に向かっているのか、探り直した方が良さそうだぞ」

「そんな事はあんたに言われなくても承知してるわよ。あいつらがどこに向かつていようと、私達は絶対に逃がさないわ」

「ほオ。珍しく、気合入ってるな？」

また余計な事を……。茜も篠原の「所長操縦法」は零点だと思った。しかし篠原も、茜にはあれこれ言われたくないだらう。

「珍しくって何よ！？ 私達が誰のせいで不眠不休で働いてると思つてるの！？」

遂に葵は怒り出した。篠原は、姉である菖蒲の事を持ち出されると、一言もない。

「悪かったよ。その事に関しては、本当に申し訳ないと想つてゐる」「わかれればよろしい」

葵はニコッとした。

「今回の報酬は、護が払ってくれるんだしね」「え？」

篠原が黙り込む。

「電話で寝たふりしても伝わらないわよ、護」

葵は軽蔑の眼差しで言った。篠原はまた笑つて、

「わかつたよ。分割でいいか？　でないと、さすがの俺も身体が保たないからさ」

「何で払うつもり！？　切るわよ！」

葵は憎しみを込めて携帯を切った。

「全く、あの工口男爵が！」

葵は携帯を忍び装束の袂にしまつと、シートにもたれかかった。

そして、その篠原は、葵とは違う経路で新潟を目指していた。彼は関越道から上信越道に入り、直江津を目指していた。

（葵達は新潟市に向かっている。あの木偶の坊達の情報がフェイクだとしたら、本命はこっちかもな）

篠原は、葵達を出し抜くつもりはないが、エクセルには腹の底から怒りがこみ上げているのだ。

（あのジジイは、葵の思いも、そしてあの可憐な姫さんの思いも踏み躊躇やがつた。男として、絶対に許せない）

可憐な姫さんは、アフリカの小国イスバハンの王女ファラの事だ。葵より、ファラの事でエクセルに對して怒りを感じているところが、工口男爵の面目躍如である。

「でもあの子、女が好きなんだつけ」

「テンションがいきなり下がる。

「麗奈さんとこの沙希ちゃんと書いて、姫さんと書いて、どうして可愛い子とは縁がないんだろう？」

篠原は溜息を吐く。

「コーヒーショップの店員は、テロリストだったしなあ」

葵に知られれば、半殺しにされそうである。恋人ではないとか言いながら、篠原が他の女の子に色目を使つのを許さないのは、本當は彼の事を好きな証拠だろう。

「もうすぐ夜明けか」

篠原は時計を見て呟いた。

エクセル達は、自分達が罠を仕掛けたつもりだったが、新潟にいる部下達の報告で、行き場を失いかけていた。

「新潟港付近には、CIAが来ているようです。柏崎には、ロシアの軍情報部が。そして、寺泊には日本の警察が到着したそうです」「ぬう」「うう」

エクセルは歯軋りした。これは、茜が仕掛けた偽情報の結果だ。それに違う情報を送り、新潟のあらゆる港を封じる作戦である。「ならば、ナオエツだ。作戦変更を同志に連絡しろ」「は！」

エクセルはムスッとしてシートに身を沈めた。

「忍者共め、ふざけた事を……」

直江津は篠原が向かっているところだ。

葵の携帯には、お詫びメールがたくさん入っていた。

「葵様のところとは知らず、大変申し訳ありません。多額の報酬に釣られたのが口惜しいです」

葵は愉快そうにメールを読み上げる。

「所長つてば、サテイストですよね、やつぱり」

茜が呆れ顔で呟く。葵はニヤリとして、

「そうよ。私はサテイスト。だから、如月茜さんの冬のボーナスは、神無月美咲さんに贈呈します」

「えええ！？」

茜がパニックになりかける。

「じょ、[冗談ですよね、所長？]

もう泣きそうな顔である。彼女は美咲を見て、

「美咲さんも何か言つて下せよオ」

「ありがとう！」とこます、所長

「えええ！？」

美咲まで悪乗りである。茜は本当に泣きそつだつた。

「見て、海が奇麗よ」

いきなり葵が話を逸らせる。朝日で輝く日本海が、関越道から見えた。

「そんな心境じゃありません……」

茜はションボリして言った。

その頃、大原達は、もう一人の実行犯である純心堂医大付属病院の外科部長である板倉光雄を成田空港のロビーで確保していた。

「何ですか、一体？」

全く事情を理解していない板倉は、抵抗した。

「貴方が、後小松総合病院と大日本医科大学付属病院の事件の実行犯の一人だという事は、共犯者の証言でわかつています。抵抗はやめなさい」

大原が逮捕状を突きつけて言った。すると、板倉はガックリと膝を着き、項垂れてしまった。

「人の命を救う立場の医師が、殺人の片棒を担ぐなんて、許される事ではないぞ」

いつになく大原は強い調子で言い放った。板倉は泣き出してしまつた。自分のした事によく気がついたのだろう。

「刑務所で、よく考えるんだな。自分がしてしまった事について」

大原は機動隊に連行される板倉に言った。

「皆さんのところに行くか」

彼はフツと笑い、ロビーを後にした。

皆村は、妙に気が高ぶつて、すでに目を覚ましていた。

（美咲さん、大丈夫だらうか？）

美咲の強さを自分の目で直接見ていない皆村は、彼女の事が本当に心配だった。

（こんなところで寝てる場合じゃないんだけどな）

タベ、病室を抜け出そうとして見つかり、今はベッドの両脇を警官一人に固められている。

(美咲さん)

皆村は、彼女の無事を祈つた。

「全く… どこまでおバカなのよ、あんたは…」

葵はカンカンだ。茜は消え入りそうな声で、
「申し訳ありません」

葵が怒つているのは、Hクセル達を誘導する眼を、茜が張り間違
えた事だ。

「ようによつて、一番遠い直江津に向かわせちゃうなんて…」

「じめんなさい…」

茜は後部座席で土下座していた。

「まあ、いいわ。直江津には護が向かつてゐるらしいから。報酬を値
引きする代わりに、あいつに頑張つてもらいましょ」

「ありがとう」
「ぞこ」ます、所長！」

茜は涙を拭つて言つた。そして、

「美咲さん、運転代わります」

「ありがとう。お願ひね」

「茜号」はサービスエリアに入った。

「一息つきたいけど、連中が迫つてゐるみたいだから、トイレ休憩
のみよ」

葵の引率の先生のような言葉を受け、茜と美咲はトイレに走つた。

「あれ？ 所長は大丈夫なんですか？」

茜が振り返る。

「美人はトイレには行かないの」

葵の答えに茜は脱力してから、走り出した。

「おお、撮影？」

二人の忍び装束に気づいた周囲の利用者達が集まり始めた。

「ハハハ、再来週の火曜日に放映予定でーす」

茜は苦笑いしながら走り去つた。

「どこのテレビですか？」

「どこのテレビですか？」

若い男が興味津々で尋ねる。

「じつでーす」

茜は前を向いたままで手を振つて言つた。

「はあ？」

若い男はキョトンとして連れの女性と顔を見合せた。

篠原は、海上保安庁に連絡し、直江津近辺を警戒するよひに要請した。

（連中、恐らく自分達の用意した船で近くまで来ているはずだ。乗り込まれちまつたら、アウトだからな）

彼のワンボックスカーは、すでに海岸線に着いていた。

「おいおい」

篠原は葵からメールを確認して驚いた。

「全部俺にやらせるつもりが、あいつ……」

「これも全部、あの我が儘な姉のせいだ。篠原は菖蒲と本当に縁を切らうかと思った。

「あれ、所長がいませんね」

葵の分の缶コーヒーを買って来た茜が辺りを見渡す。

「トイレかしら？」

美咲が振り返つて言つた。茜はニヤツとして、

「きっと、大きい方なので、私達と一緒に行くのが嫌だつたんですね」

「誰が大きい方ですつて？」

「わひや！」

いきなり後ろに現れた葵に、茜は飛び上がって驚いた。美咲がすかさず、

「はい、所長、コーヒーです」

と緊張感を和らげてくれた。葵は美咲を見て「コッ」とし、

「ありがと」

茜をギンと睨んでから、葵は助手席に乗り込む。茜は全身から嫌な汗を搔きながら、運転席に乗つた。

（殺されはしないだらうけど……）

葵が菖蒲に負けないくらい、自分の悪口に対しては「地獄耳」な

のを改めて感じた茜だった。

葵達は、そのまま新潟港に向かっていた。

「一応、こっちのパーティにも出席しておかないとね。私達は主賓でしようから」

葵は楽しそうだ。茜も、

「よし、頑張るぞ！」

「偉いわ、茜。そのボランティア精神は、尊敬しちゃう」「え？」

葵に気になる一言を言われ、茜は一瞬固まりかけた。
「ボ、ボランティア精神で、どういう意味ですか、所長？」

また泣きそうな茜である。葵はニヤツとして何も言わない。

「ああ、許して下さいますよ、所長オ……」

「人の事を陰でいろいろと言つてくれてるよつだから、一生懸命働いてもらわないとね」

葵はチラッと茜を見た。茜は、

「死ぬ気で頑張りますからア」

「よし、許す」

葵は嬉しそうに茜を見た。

「ありがとうございます！」

茜は「茜弓」のスピードを上げた。

「あ」

後ろから迫る高速機動隊のサイレン。

「バカ」

葵の冷たい一言。美咲が頃垂れる。

「茜ちゃん……」

顔色が悪くなる茜。

「前方の白いミニバン、路肩に寄せてゆっくりと停止しなさい」「茜は溜息を吐き、「茜弓」を路肩に寄せ、止めようとしたが、

「茜ちゃん、止めちゃダメ！」

と後部座席の美咲が叫ぶ。

「どうしたんですか？」

「罷よ！」

助手席の葵も叫ぶ。ルームミラーで見ると、高速機動隊のはずなのに、黒い覆面を着けている。

「ロシアンマフィア！？」

茜は仰天し、アクセルを踏み込んだ。途端にロシアンマフィアが銃撃を始める。

「一般人を巻き込んでしまつわー、茜、振り切つてー！」

「はい！」

茜はダッシュボードの端にあるレバーを引いた。すると「茜号」のマフラーの隣にジェットエンジンが現れた。

「スーパーイヤージャー、オン！」

茜のかけ声と同時にジェットエンジンが噴射し、あつと轟つ聞こ「茜号」は偽高速機動隊を振り切つてしまつた。

「な、何だ、あれ？」

ロシアンマフィア達は、唖然としていた。

篠原は、葵からのメールで、ロシアンマフィアが仕掛けて来た事を知らされた。

「連中、とうとう大っぴらに始めたか」

ふと気づくと、彼のワンボックスカーの周辺にも、黒塗りのワゴン車がたくさん集まり始めていた。

「うほ、楽しそうな雰囲気」

篠原は車から飛び出した。それに応じるように、ワゴン車からたくさんの方々が飛び出してきた。皆、マシンガンを携帯している。

「飛び道具を使うのは、弱い証拠だぜ、ギャングさん」

篠原はフツと笑い、走り出した。

エクセル達は、国道十八号線を走っていた。

「女忍者には、逃げられたようです」

「かまわんさ。どの道、連中は私達には追いつけない」

エクセルはニヤリとした。

「それより、ナオエツにいるのは、この前この私を殴った男らしいな」

「はい」

エクセルはキツとして、

「同志に伝えよ。殺すなど。そいつは、この私が直々に止めを刺すとな」

「は！」

エクセルは、葵達より、篠原に大きな恨みがあつた。凄まじい執念である。

大原は、皆村を見舞つていた。

「そうか、事件は解決だな」

皆村は、実行犯を全員逮捕した事を聞き、ホッとしていた。しかし、大原は真剣な表情で、

「いえ、まだです。実行犯は、じかげ蜥蜴の尻尾しつぽですよ。まだ本体は、新潟にいます」

「そうなのか」

皆村はまた美咲が心配になつた。

「大丈夫かな、美咲さん？」

「大丈夫ですよ。あの人達は、僕らよりずっと強いですから」

大原は微笑んで言つた。彼は皆村を安心させようと思つて言つたのだが、皆村は落ち込んでしまつた。

「そうか。やつぱりな……」

皆村がションボリしてしまつたので、大原は驚いた。

「どうしたんですか、皆村さん？」

「俺より強い女性……。諦めるしかないよな」

皆村が何に落ち込んでいるのか理解した大原は、「何言つているんですか、皆村さん！ 僕だって、茜ちやんの方が多分強いですけど、諦めていませんよ」と励ます。しかし、皆村はネガティブ思考だ。

「それはお前がイケメンだからだよ。俺はこの面だから、無理だ……」

「皆村さん！」

大原は皆村を叱りつけるよつと言つた。皆村はギョッとして大原を見上げた。

「神無月さんは、男を外見で判断するような女性ではないと思います」

「……」

「フォローしてくれているんだろうが、何気にそれ、傷つく言い方だぞ、大原。そう思つたが、言えない皆村だった。」

「わ！」

菖蒲はふと目を覚ますと、自分のすぐ横で気持ち良さそうに眠つてゐる麗奈に氣づいて仰天してゐた。彼女はつたた寝していて、そのままソファで寝てしまつたのだ。そして、一度は別のソファに横になつたのだが、また起き出して菖蒲の寝顔を見ていた麗奈も、そのまま寝入つてしまつたらしい。

「う、うーん……。あら、おはよ、菖蒲」

麗奈は二ヶ「コつして言つた。菖蒲は起き上がつて、

「あ、貴女、私が寝ている間に何かしていないでしょーうねー？」ととんでもない事を言つた。すると麗奈は、

「あらあ、私にも選ぶ権利つてものがあるのよ、菖蒲」

「フン！」

菖蒲は立ち上がると、

「シャワー浴びて来る」

「一緒に浴びる？」

麗奈がおどけて言うと、

「冗談じゃないわ！」

菖蒲はプンプンしながら、リビングルームを出て行ってしまった。

「ホーリー、起きると可愛くないわね、あいつは」

麗奈は肩を竦めた。

「何だ、もうおしまい？」

総勢三十人はいたはずのギャングだったが、やはり篠原の敵ではなかつた。

「あの木偶の坊達の方が、ずっと強かったぞ」
ピクリとも動かないギャング達を見渡して、篠原は満足そうに頷いた。

「俺つて、強いなあ」

ポーズを決めてみる。ちょっとバカである。

「うん？」

その時、強大な殺気が近づいている事に気づく。

「もう来たか、あのジジイ」

篠原は舌打ちし、エクセルの乗る車を見た。

「ほお。さすがだな、篠原護。隙を突かれたとは言え、先日この私を倒しただけの事はある」

エクセルが車から降りた。

「強がり言うなよ、ジイさん。ガチで戦つても、あんたなんか俺の敵じゃねえよ」

篠原はニヤリとして言い返した。エクセルはキツとして、
「黙れ。これでも、お前はそんな虚勢を張れるのか？」

後部座席から、エクセルの部下によつて金村医師が引きずり出された。眠つたままの彼は喉にナイフを押し当てられている。

「あー、きつたねえ。そういう事するんだ、ジイさん」

篠原はさも困つたように言う。エクセルはフツと笑い、

「「」の男は、お前の姉である臯月菖蒲の思い人だといつ事はわかっている」

「そうみたいね」

篠原は一ヤリとする。エクセルも一ツと笑つて、「姉の思い人を傷つけられなくなつたら、大人しくしろ」

「やだね」

「何！？」

エクセルは意外な返答に仰天した。

「き、貴様、脅しだと思っているな？ 違うぞ。逆らえば、本当にこいつの命はないぞ」

「別にかまわねえよ。やれよ」

篠原の目が鋭くなる。エクセルは思わず一步退いてしまつた。「できもしねえ事を言つんじゃねえよ、三流ヤロウが」

篠原の挑発は続く。エクセルは逆上した。

「愚弄しおつて！ やつてしまえ！」

しかし、無反応。エクセルはムツとして、「何をしている、やつてしまえ……」「

と振り返り、固まつた。

「残念でした、お爺ちゃん。ゲームオーバーよ」

そこには葵達が立つていた。もちろん、エクセルの部下達は全員倒れている。

「……」

エクセルは、そのまま干物になりそつなくらい、全身から汗を流していた。

「おしまい」

篠原の手刀を首に叩き込まれ、元国王は地面に倒れ伏した。

「護、菖蒲さんに電話してあげなさいよ。金村さんは無事救出しましたつて」

「ああ」

何故かそう言いながら、篠原は目を瞑つて口を突き出していく。

「何？」

鬱陶しそうに葵が尋ねる。

「お礼のチュー」

美咲と茜は呆れて顔を見合せた。多分、殴られる。それが一人の予想だった。

「え？」

篠原自身、意外だつたようだ。葵は本当に「チュー」をしたのだ。

「ありがと、護。助かつたわ」

葵は照れ臭そうにそう言つと、

「茜、大原君に連絡して」

「はい！」

嬉しそうに携帯を取り出す茜。

「大丈夫ですか、篠原さん？」

動かなくなつた篠原を美咲が気遣つた。

菖蒲はシャワーから出て来たといひで、篠原からの連絡を受けた。

「そう。わかつたわ」

彼女は素つ氣ない態度で、金村医師救出の話を聞き、携帯を切つた。

「どうしたの？」

麗奈は菖蒲の異変に気づき、尋ねた。菖蒲は泣いていたのだ。

「金村君、無事だつて」

彼女はそれだけ言つと、大声で泣き出してしまつた。

「おお、よしよし」

麗奈も目を潤ませて、菖蒲の頭を撫でた。

「良かつたね、菖蒲」

それでも泣き続ける菖蒲だった。

（ホント、面倒臭い女……）

麗奈はうんざり顔で思つた。

結局、沖でエクセル達を待っていた船は、そのまま日本の領海を離れ、逃げてしまった。海上保安庁としても、何をした訳でもない船を追う事はできず、ロシアンマフィアの親玉は逃げ切ってしまったようだ。

「でも、もう日本に手出しまはしないでしょ。」しつけの根は断てたんだから」

連行されて行くギャング達を見ながら、葵が言った。美咲が、「そうですね。後はロシア側の問題ですからね」

何故かショーンとしている篠原に気づいた茜が、

「どうしたんですか、篠原さん？」

「「一ヒーショップの店員のテロリストの子、ロシアに引き渡すそ

うだ。可哀相にな」

「え？」

茜はキョトンとした。葵が、

「多分ロシアに引き渡されれば、極刑ね」

「え？」

茜はギクッとした。

「たまたま、生まれ育つた土地がそういう状況だと、子供達の意志なんか関係ないんだよな」

篠原はしんみりと言つた。茜も悲しくなつた。

「嫌も恋もなく、テロリストにされる。悲惨過ぎるよ

「そうですね」

美咲も涙ぐんでいる。

「良かつたな、茜ちゃん、日本に生まれても、いくら葵が怖くても、殺される事はないだろ？」

篠原がニヤリとして言つた。茜はビクッとして、

「へ、返事に困る事、訊かないで下せ」、篠原さん

「どういふ意味よ、それ？」

葵が茜に突っ込む。

「所長、一生ついて行きますからー。」

茜はいきなり葵に抱きついた。葵は面食らって、

「ちょっと、茜、あんたまで田代覚めたんじゃないでしょうね？」

と慌てた。そして茜を振り払う。

「さてと。もう一人、お礼に行かないとな」

葵が車に歩き出す。

「もう一人？　ああ、君のジャさんか？」

篠原が言った。葵は振り返らずに、

「そういうお礼じゃない方」

と答えた。

大原の手配で、本物の高速機動隊が動き、偽高機はすぐに捕まつた。銃を持っていたので、手こすると思われたが、さすがに自分達の名を騙つて悪さをしようとしていた連中に憤激したのか、高機は装甲車で追い詰め、体当たりしたのだ。ロシアンマフィアも、全員鞭打ちになり、たちまち投降したらしい。

そしてもう一つの組織は、アルバイト感覚で企業のホームページを改竄したり、官公庁のホームページをウイルスで悪戯していた大学生達だった。茜がその力を存分に發揮して情報屋達と連携し、彼らの居所を突き止めた。

「僕らは悪い事なんかしていませんよ。ビジネスとして依頼を受け、仕事をしただけです」

組織のリーダー格の大学四年の男が、警察に踏み込まれた時に吐いた言葉だ。

「そんな子供の言い訳が通るか、馬鹿者！」

刑事の怒鳴られ、そのバカ大学生はシュンとした。

美咲はスース姿に戻り、警察病院に来ていた。彼女は前回より大きめの花を買い、皆村の病室を訪れた。

「あ」

美咲は扉を開けようとして、手を止めた。

「もう！ 何度言つたらわかるんですか！ 全治するまで退院はできません！ 少しは大人しくしていて下さいよ」

女性の声だ。美咲は、その声に聞き覚えがあつた。

（確かに、最初に皆村さんを訪ねた時、応対してくれた女性だわ）

「お前にそんな事言われる筋合いねえよ。早く帰れ！」

皆村の声は元気そうで、しかも美咲と話をする時とは違つて、飾らない調子だった。

「ええ、帰りますとも！ あまり長くいたりすると、署で変な噂を立てられちゃいますからね！」

相手の女性も、憎まれ口を叩きながらも、決して皆村の事を嫌っているのではないのがわかる。

「何だよ、変な噂つて？」

皆村が尋ねる。女性は、

「皆村さんと付き合つてるつていう、嫌な噂です」「嫌な噂つてどういう意味だ！？」

皆村は女性の気持ちに全然気づいていない。美咲はクスッと笑つた。

「とにかく、不器用なんですね、皆村さんて」

美咲はそのままナースステーションまで戻り、花を差し出して、「これ、皆村刑事に渡して下さい」

と頼むと、警察病院を出た。

「振られちゃつた、のかな？」

美咲は少しだけ寂しかつたが、

「よし！」

と気合を入れ、葵が待つミニバン「西号」に向かつた。

「あら、もういいの？」

葵は助手席から顔を出した。美咲は苦笑いして、

「何だか、私、振られたみたいで……」

「はああ。身の程知らずねえ、その刑事」

葵は目を見開いて驚いている。美咲は運転席に乗り込むと、

「私が勝手にそう思つただけですから」

「そう？ じゃ、大丈夫ね」

葵は微笑んで美咲を見た。美咲も一ツ「コ」して、

「はい」

「あんたには、外務省君がいるもんね。あ、それから、国会議員さんもいるか」

葵は「ヤニヤして言つた。美咲はムツとして、「あのお一人は、そういう関係ではありません！」

「そうなのお」

葵は笑つたままだ。

「それから、今日の締め、私にさせて下さい」

「え？」

意外な申し出に、葵は笑うのをやめて美咲を見た。美咲は「茜号」をスタートさせて、「え？」

「今日は、私にさせて下さい」

葵は前を見てフツと笑い、

「いいわよ。美咲が一番恨みがあるもんね、あのおっさんには」「別に怨みはないんですけど」

美咲はハンドルを切りながら、

「公務員の長のはずの人が、公務員を危険に晒すような相手と取引したり、現実に公務員が傷ついたのにも関わらず、自分は無関係だと主張するなんて、長たる資格がありません」

「確かにね。つうか、何あんなろくでなしが首相にまで上り詰めちゃうのかねえ。本当に日本人で、政治に関しては、幼稚園児並みね」

葵は肩を竦めた。

その頃篠原は、拉致されていた金村医師と鳥丸医師を乗せ、姉の菖蒲^{あやめ}が待つ大学病院に向かっていた。一人を新潟の病院で診察させてからの出発だったので、今頃になつたのだ。その間、何度も菖蒲からメールや電話があつたので、篠原はうんざりしていた。
(せめて、麗奈さんの事務所で会いたいなあ)

篠原が何故そう思つたのかは言つまでもない。麗奈に菖蒲の相手をさせて、自分は麗奈の事務員である沙希を口説くつもりなのだ。憤りない男である。

そして、警察庁の大原の部屋。茜がパソコンを高速ブロードキャストで操作している。

「よし、終了」

茜は笑顔で大原を見た。大原もニシコロシして、

「じゃあ、夕食は夜景の見えるホテルのレストランで」

「え？」

茜はギクッとして一歩退く。大原はキヨトンとして、

「どうしたの、茜ちゃん？」

「ま、まさか、その後、『部屋をとつてあるんだ』なんて事にはなりませんよね？」

茜は顔を赤らめて囁く。大原は大笑いをして、

「まさか。だって茜ちゃんはまだ……」

と言いかけ、ハツとして黙る。茜はその言葉にピクッと反応し、大原を睨む。

「まだ？ まだってどういう意味ですか、大原さん？」

大原は冷や汗を垂らしながら、

「あ、いや、別に変な意味じゃないよ。茜ちゃんはまだ僕の恋人じゃないから、そんな事はできないって事だ」

「そうなんですか……」

茜は答えを聞いてションボリしてしまった。

「あれ、部屋をとつた方が良かった？」

大原が真面目な顔で尋ねる。茜はその顔を見てブツと吹き出し、「違いますよ！」

と言つた。そしてモジモジしながら、

「大原さんは私の恋人だと思つてるんですけど、迷惑ですか？」

「茜ちゃん」

大原が驚いて茜を見た。茜はニコニコしてドアを開き、

「さ、行きましょ、ホテル！」

「茜ちゃん、その言い方、誤解されるよー」

大原は慌てて茜を追いかけた。

「臯月さん」

篠原の車から金村が降り、最初に言つたのがそれだつた。烏丸医師も、妻と子供が待つていて、涙の対面をしていた。

「金村君、みつともないわ」

菖蒲の第一声がそれだ。篠原も、金村も、そして烏丸達も驚いて彼女を見たほどだ。

「普段から、危機意識を持つていれば、あんな目に遭わなかつたのよ」

「おい、姉さん！」

それは金村さんだけじゃなくて、烏丸さん達にも失礼だろ、と篠原は焦つていた。

「そうだね。ごめん、臯月さん」

金村は二コツとして頭を搔いた。すると菖蒲は顔を赤らめて、「わ、わかればいいのよ。これからは気をつけなさいよ」と言つと、スタスターと歩き出す。

「姉さん、待てよ！」

篠原が、あまりに身勝手な姉を追いかけよつとすると、

「あ、私が行きます」

金村が言い、菖蒲を追いかける。

「臯月さん」

金村が隣に立つと、菖蒲が何かを言つた。慌てて下がる金村。まるで召し使いのようだ。

「俺には考えられない関係だ」

菖蒲の一方的な恋だと思つていたのだが、金村は筋金入りの「M」だった。菖蒲に怒鳴られても、二コニコしている。

「信じられない」

篠原は肩を竦め、車に戻る。烏丸一家が彼に礼を言い、彼の妻の運転でその場を去つて行つた。

「さあてど。今夜は沙希ちゃんとデートしたいけど、たまには葵を

……

と言い、「ヤツとして車に乗り込んだ。

その日の仕事を終えた橋沢龍一郎首相は、進歩党最高顧問の岩戸老人が来ていると聞き、慌てて官邸の執務室に行つた。

「やつと来たか、橋沢」

ソファに座っている岩戸老人が言つた。その隣には見慣れない若い女性がいる。彼女は微笑んで会釈した。

「遅いわよ、首相」

彼の席の椅子に座つている女。確かに「月一族」という忍者の組織で一番強いという女だ。

「お、お前は！」

橋沢は思わずそう言つてしまい、慌てて口を塞ぐ。その女性は立ち上がり、

「はあ？ お前？ あんたのよつなおつさん」「お前呼ばわりされる覚えはないわよ！」

「ひいい！」

橋沢は思わず岩戸老人の後ろに隠れた。まるで悪戯を見つかった子供である。数ヶ月前のトラウマが甦つたようだ。しかし、彼は甘かつた。

「貴方には、一国を任せせるだけの度量がありません。すぐに総辞職する事をお奨めします」

岩戸老人の隣の女性が立ち上がりて言つ。橋沢はギョッとして彼女を見た。

「そして、これは私の知り合いの公務員の方の痛みのおすそ分けです！」

橋沢がハツと氣づいた時は、もう手遅れだった。女性の平手が彼の顔面を捉え、彼はクルクルッと身体を回転させて床に倒れた。

「行政のトップたるお前が、間接的であれ、その下で働く公務員を危険に晒して何とする、馬鹿者！ 美咲ちゃんの言う通り、すぐに

総辞職しろ！」

岩戸老人はド迫力の勢いで橋沢を叱責した。橋沢はポカンとして岩戸老人を見上げた。

「心配するな、橋沢。儂も付き合つよ。引退する

岩戸老人の言葉に、二人の女性は驚いたようだ。橋沢も目を見開いた。

「先生、今、何で……」

「潮時だよ。こんな馬鹿者を首相にしてしまった責任を痛感しとるんだ。まあ、それだけではないが、いいきつかけさ」

岩戸老人はそう言つと、部屋を出て行つた。それを追うよう女性二人も続いた。

「岩戸先生、さつきのは……」

葵は廊下を早足で歩く岩戸老人を追いかけながら言つた。美咲も岩戸老人を見ながら歩く。

「本気だよ。儂が自分の首を差し出さなければ、あいつと刺し違える事はできない。あいつの側近共を黙らせるのには、そこまでせんと無理なんだよ」

岩戸老人はフツと笑い、

「まあ、そろそろ儂のよつなジジイは退くべきなのさ。政界には若返りと再編が必要だ」

「先生……」

葵と美咲は涙ぐんでいた。岩戸老人はそれに気づき、

「ありがとう、二人共。こんな老いぼれのために泣いてくれて」

「先生、今夜は朝まで飲みますか？」

葵が突然切り出す。

「所長！」

美咲は驚いて窘めようとしたが、

「おお、いいねえ。盛大に盛り上がりうつかね」

「はい」

美咲は溜息を吐いたが、岩戸老人がまだ元気なのを知つてホッとした。

岩戸先生を囲む会は、都内の居酒屋で開かれた。岩戸老人の希望だ。

「遅くなりました」

大原と茜がやつて来た。

「おお、もう来たのか、大原。つて事は、まだか？」

妙に嬉しそうに言う篠原に、茜が、

「な、何の事ですか、篠原さん？」

と言い返す。すると岩戸老人が、

「もちろん、あつちの事だよなあ、篠原君」

「あはは」

岩戸老人がそんな事を言い出すとは思わなかつた葵と美咲と茜は、一瞬動きを止めてしまった。

「岩戸先生、お疲れ様でした。これからも、我々を見守つて下さい」

大原が畏まつて言つと、岩戸老人は、

「相変わらず、固い奴だな、君は。そんなんじや、茜ちゃんに嫌わ
れるぞ」

「はあ」

大原は苦笑いして頭を搔く。すると茜が、

「私は、そういう大原さんが好きなんですよ、先生」と徳利を差し出した。

「おうおう、気が利くね、茜ちゃん」

「どうぞ、お一つ」

茜が芸者張りの「しな」を作つて言つたので、葵が大笑いした。

「まだ間に合つたみたいね」

麗奈が沙希を連れて現れた。おお、と篠原が身を乗り出す。

「はい、沙希ちゃんはここね」

葵の隣は岩戸老人と篠原だが、麗奈が篠原を押しのけて沙希を葵

の隣に座らせ、自分は美咲の隣に座る。追いやられた篠原は大原の隣に座つた。

「麗奈君、久しぶりだな。相変わらず、奇麗だね」

岩戸老人が言つた。麗奈は「コッとして、

「ありがとうございます。先生も変わらず、お若いですわ」

「ハハハ、褒められても付き合えんぞ」

「オホホホ」

沙希は葵の隣で身体が密着しているので、真っ赤になつてゐる。

「なかなか、複雑な人間模様だな」

岩戸老人が葵に小声で言つた。葵は苦笑いして、

「そうですね」

と答えた。

「姉さん達は？」

篠原が麗奈に尋ねた。麗奈は肩を竦めて、

「来られないって。全く、協調性がゼロなんだから、あいつ「来なくともいいけどね」

篠原が笑つて言つた。麗奈もケラケラ笑つて、「そうね。来ても、座がシラけるだけだしね」相変わらず酷い言われようの菖蒲である。

「もしかして、今頃あの一人……」

茜が咳く。すると篠原が、

「やめてくれ、想像したくないよ」

と言つたので、皆大笑いしてしまつた。

そして、お開きの時間になつた。

「皆さん、今日は儂のために集まつてくれて、本当にありがとうございます。感激している」

岩戸老人は締めの挨拶をしていたが、目が少し潤んでいる。

「国会議員は引退するが、人間を引退する訳ではないし、男をやめる訳でもない」

岩戸老人はニヤリとして、

「女性陣に言つておこづ。男は若手ではないぞ。経験と知恵だ。儂には、若い者にはないものがたくさんある」

「はあ？」

葵達は顔を見合させた。

「女房に先立たれて随分になるしな。だから、今付き合つてゐる男に飽きたら、いつでも声をかけてくれ。飯くらいは」馳走するぞ」

岩戸老人は、自分が元気なのをアピールし、葵達を安心させようとしている。篠原にはそれがわかつた。

「本当に、今日はありがとう」

岩戸老人は立ち上がり、深々と頭を下げる。葵達はそれに対して拍手をする。それはしばらく鳴り止まなかつた。

そして、それぞれ帰路に着く。

「何であんたがあぶれるのよ」

篠原と二人だけになつた葵は、剥れていた。

「あのなあ。今回、俺、随分頑張つたと思うんだけど？」

篠原は必死にアピールした。しかし葵は、

「元はあんたのお姉さんが発端でしょ？ おかげで私達只働きだし」「あれ？ 俺は報酬を払わなくていいの？」

篠原がニヤツとして言うと、

「身体で払おうとしている報酬を受け取るつもりはないわよ

葵はあつさりと言つた。

「それに、あんたの頑張りと相殺して、少しお釣りができたから」「え？」

篠原は驚いていた。葵がガバッと抱きついて、キスして來たのだ。それもしつかりとしたキスだった。

「はい、これで相殺完了ね」

葵は照れ臭そうに笑つた。篠原は、

「これだけで終わるくらいなら、何もされない方がマシだよ、葵

イ

と甘えてみたが、葵は素つ気ない。

「調子に乗るな、年中発情男が！」

ブイツと背中を向け、歩き出してしまつ。

「ああ、ウソウソ！ せめてあと一軒、一人で飲まないか？」

「それくらいならいいけど……。変な薬飲ませて、襲つたりしない

でしょうね？」

「しないしない。する訳がない」

葵は篠原を疑いの眼差しで見て、

「まあ、いいわ。付き合つわよ」

「やつたあ！」

恋人なのか、そうでないのかわからない二人は、繁華街へと繰り出していく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150k/>

風の葵 黒い救急車

2011年7月15日23時46分発行